

「こんなところで眠つてゐるから起きたんだ、——何を言ふか、貴様は？」
 巡査は酔漢を扱ひ馴れたらしい物馴れた峻烈な口調で怒鳴りつけた。

「そ、そんなに威張るなよ、お、おれはな」

彼が、さう言ひながら前にのめりかゝつたとき、すぐ横の暗い露地の中から、小さな黒犬が頭だけ出して、しきりに吠えついてきた。すると、その男は、犬の方をぢろりと眺めてから、

「——お、おれはな、君に咎められる理由は少しも無いんだ、まったく少しも……」

「貴様は反抗するんだな、ぢやあ一寸來い訊問することがあるから」
 巡査はその男の顔を睨みつけた。

「おい、よせよ、——ぢやあ、これは如何だ、これは、こいつはこんなに貴様に反抗してゐるのに咎められないで済むのにお、おれは……」

その男はうしろをふりかへつて疝高い聲で吠えてゐる犬をゆびさしながら言つた。

「馬鹿、——これは犬ぢやないか、法律は街頭で眠ることを禁じてゐるんだ！」

「ヘッ——」

その男は、嘲けるやうに、胸をぐつと前に張つて

「頭がわるいね、君は——、ぢやあ犬が眠るのに、な、なぜ人間は眠れないんだ？」

その聲は出来るだけ寛容な氣持で、この場を見逃さうといふ考への方にかたむいてゐた巡査の心を一變させるに充分であつた。巡査の右手は素早く前にのびて酔漢の肩を烈しくゆすりながら、

「すると、貴様は犬だな、犬なら犬らしく扱つてやるから、はつきり言へ！」

「怒つたな、——いや、いかにも、おれは犬ぢやないよ、人間さ、たしかにこのとほり人間にちがひないがね、しかし、君」

彼は此處まで一氣にしやべつてぐつと唾を飲んだが、しかし、その聲は何時の間にか哀願するやうな調子に變つてきた。

「しかし、君、——僕はこれでも人間なんですがね、だが、まったく犬にひとしい、いや犬の方が、ずつと僕にくらべたら高等な動物なんですよ」

「よし、犬なら犬らしく四つん這ひになつて歩け！」

鋭く、さう叫んで巡査はその男を路上に引倒した。その男は、ぐつたりと鋪道に兩手をついて、そのまゝちつと首を落としてうつむいてしまつた。一瞬間——それは、さながら、おれはこのまゝ犬にならうか、それとも人間にならうかと考へこんでゐるかのやうに。

しかし、彼は不意に勢ひよく立ちあがつた。

一人の男が、そのとき、靴音も軽く瓢々と歩いてきた。彼は京橋の方角から、鋪道を傳つて、よけては立ちごまり、立ちごまつてはまたよろけながら、すべるやうに歩いてきた。——街は深い眠りに落ちて、空気が朝のやうに澄みとほつてゐた。閑寂たる夜の街は兩側にならぶ軒燈の灯かけも懶うけに、ときく大地をゆるがして通る圓タクの轆の音だけが、脅かすやうにひびいてくるのであつた。その静けさをやぶつて、彼の耳はすぐ手前の四つ角から、巡査の怒鳴る聲を聞いたのである。それから、醉漢の囁言らしい、もつれ合ふやうなかすれ聲を……。

彼は立ちどまつて耳を澄ましただが、すぐに足早に聲のする方に歩いて行つた。尾張町の交番のうしろに一人の男が、威丈高に胸を張つて立つてゐる巡査の前に、いきたなく兩腕をついて這ひつくばつてゐるのが見えた。その異様な情景は彼の好奇心をそゝるに充分であつた。彼はそつと足音を忍ばせるやうにして、闇を負ふて立つてゐる巡査の方へ何氣ない素振りで歩みよつた。

四つん這ひになつた醉漢が、よろよと立ちあがつたのは、ちやうど、そのときである。——一瞬間醉漢の視線はその男の顔にそがれたが、しかし、彼のうるんだやうな瞳にはたちまち烈しい驚愕の色が現はれてきた。

彼は兩手を顫はせながら前にひろげて飛びつくやうにその男に近づいた。

「——お、！南里、君は、たしかに南里だつたな、——お、おれは……」

彼は慌て、何か口走らうとしたが、しかし、その聲は何時の間にかすゝり泣きに變つてゐた。

「黒上ぢやないか、——ど、どうしたんだ？」

その男は、しかし、醉漢の顔を覗きこむやうに、ぢつと見詰めてから、くるりと巡査の方を向いて

「一體、如何したんですか？」

その聲は昂奮のために、多少詰問するやうな調子を含んでゐたので、巡査は反撥的に嘲けるやうな

視線を投げつけた。

「君は何だ——必要があつて訊問してゐるのに餘計なことを言ふな、この男にはまだ訊問すべき理由が残つてゐるんだから」

「いや、——何もそんな」と、彼は軽く手で制しながら、

「——こいつはわたしの友人なんですがね、ひどく酔はらつてゐますから、何か無理なことを言つたかも知れませんが、今夜は大目に見てやつて下さい、あとはわたしが引きうけて、きつと家へつれて歸りますからね、家には女房も子供もあるんですよ、だから、以後はきつと慎むやうに、よく訓戒を與へますからね」

らあ、——あのどた靴を噛んだら、歯が折れるにきまつてるからね、考へ直してゐたところさ、だが、まつたく、あんなところで君に會ふなんて……實に君、久しぶりだな、それでも、何年になるか一體」

「おい、大概にしろよ、うるさい奴だな、おれはどつちにしても圓タクを採すから」
南里は大通りへ出て、あたりを見廻しながら怒鳴るやうな聲で言つた。

「いやに圓タクばかり氣にする男だね、だが、おれは君の家へゆくのは厭だぜ！」
彼は子供が駄々をこねるやうに兩肩をゆすぶつてゐたが、そのとき、築地の方角から曲つてきた自動車が一臺、忽然として南里の眼の前に現はれたのである。南里は慌て、呼びとめるために遠くから手をあけたが、しかし運轉手はちろりと眼鏡越しに彼の方を見たゞけで、轍の音はゆるやかに電車線路の上をすべつていつた。エナメル色の新しいそのキャデラック型の箱の中にはいかにも貴婦人らしい、毛皮の襟巻の中に首をうづめてゐる、三十近い小肥りの女が、面長な若い男の肩にもたれかゝつてゐるのが、窓越しに彼の視線をちらつとかすめた。

「駄目だね——、仕方がないからそろ／＼歩かうよ」

南里は黒上の肩を抱くやうにして前に歩き出した。

二人の影法師が、たよりなく路上に流れて、靴音だけが高く深夜の街にひびいてゐた。

「ところで、君は今まで何處で暮してゐたんだ？」

さう言つた南里の聲には、言ひ知れぬ淋しさが含まれてゐた。

「上海にゐたよ——、だがね、暮してゐたといふよりも生きてゐたと言つてもらひたいね、お、おれは全くやつとこさで生きてゐたんだからな」

「上海？」

と、南里は頓狂な聲をあけた。

「上海にはね、おれの友人の若い小説家が、行つてゐた筈なんだが……」

さう言つて、ぢろ／＼黒上の横顔を見た彼の眼容は悲しさうに輝いてゐた。

「若い小説家——知つてゐるよ感じの弱々しさうな瘦せた男だらう、さうだ、若いといつても年齢はちやうど、おれ位の……」

黒上は、頬に硬ばりついた泥を落しながら早口に言つた。

「さうだ——すると、あの男に君は會つたんだね？」

「荒川と言つたね、あの男は——いや、會つたどころか、おれたちは同じ宿屋に暮してゐたんだか

らね」

「その話を、もう少し續けてくれたまへ、ぢあア、荒川は君と同じ宿屋にすつとゐたんだね？」
 「ゐたとも、——おれは、あの男と始めて會つた晩から、おれたちに共通する一つの運命を感じたよ——例へばだ、おれはひとりぎりでも通らない人生の間道を歩いてゐたんだがそのとき、うしろをふりかへると、まったく同じ道をあの男が歩いてきたさういふわけさ、だがおれはすぐにあの男とわかれてしまつたが」

「ぢやあ、荒川はまだその宿屋に居るんだな？」

南里はポケットの中から、バットの箱をとりだしながら黒上の顔を覗きこんだ。彼の心は回想の中に深く沈んで居るやうに見えた。圓タクが一臺うしろから走つてきたが、しかし彼はもうふりかへつて呼びとめることすら忘れて居た。黒上はにや／＼と笑ひながら。

「さあどうかな、——ゐるかも知れないな、いや、ゐないかな、何かあの男は非常に苦しんでゐるやうだつたぜ、——しかしだ、かりにあの男が、おれの前で、かりに今から自殺しやうと言つたとしても、それを止める理由はお、おれには無いぞ——」

それは、もう酔つてゐると思へないほど正確な語調だつた。二人は何時の間にか銀座通を過ぎて新橋をわたつてゐるのであつた。——河面にはうすく霧のやうなものが下り、橋の下に泊つてゐる荷

船の小さな灯が、わびしく輝いてゐた。そのほかけのかすかにはためくのを眺めながら、南里は前の年の秋、雨の降る夜にこの橋の袂で、同じ日の朝、東京驛から出發つた筈の荒川に會つたことをおもひだしたのである。それからけつそり蒼ざめた顔と、異様な不安を湛えて顫えてゐた彼の瞳とを。

あの男は、ひよつとすると自殺したのかも知れないぞ——、南里は心の底に、さう叫びながら、急にけつそりとした氣持になつた。愛すべき友人の姿が、ふた／＼彼の目の前に夢のやうにうかんできたのである。おそろしさがどつとこみあげてきた。夜更の街を、今、腕を組んで歩いてゐる男は、古い友人である黒上哈介ではなくて、何かそれはうす暗い墓穴から、によろ／＼と這いあがつてきた幽霊のやうな氣がしてきたのである。——

「さあ、今から、おれの家へ行かう、電車道傳いに歩いていつて圓タクを見つけ次第拾ふことにして……」

「いや、——おれは止さう君の歩いてゆくところまではお伴をするが、君の家へ行つて昔話をしたところで、まったく仕方がないからな」

「此處まで来て、そんなことを言ふなよ、如何してども、おれは連れて歸るからね」
 南里は、うしろに廻した手で黒上の背中を撫でながら、眼がしらがへんに熱つほたくなつてくるのを感じた。

「だが、——南里、おれはもうまるで生きてゐる人間ぢやないんだ！」
 その聲はしみじみと南里の心にひびいてきた。彼は、もう一度しっかりと黒上の身體を抱しめながら、數年の間にけつそり瘦落てしまつた不幸な友人の淋しい横顔をしげしげと眺めたのである。

二人は黙つて歩いていつた。闇は深く空にはびこり、夜風はかすかな唸りをたて、身に沁みとほつてきた。——酔ひざめの悪寒のために南里は兩脚が、しきりに、がたがた顫えるのを覺えながら、十年近くわかれたきり、見るかきもなく瘦せおとろえた黒上の肩をしつかりと抱きしめたが、それは妙に骨ばつて冷たかつた。生きた人間を抱えてゐるといふよりも、むしろ死骸に觸れてゐるやうな感じだつた。垢と埃で縮目もわからなくなつてゐる古洋服からは、この男の長い陰惨な生活の名残でもあるかのやうに、かび臭いにほひがぶうんと流れてきた。
 産摩原の近くまでくると、長い塀が兩側につゞいて、そこだけ電燈の光かとぎれてゐるので、大氣はしいんとして、まるで墓場の中を歩いてゐるやうな氣持がした。

「——おい、疲れたね、このへんで圓タクを待たうか、一臺位はまだ通るだらうから」
 南里は、塀が盡きて、少し奥まつた空地の入口に積み重ねてある鐵材の前で、やうやく疲れかけて

きた手をはなした

その拍子に黒上は危く二三歩前によろけながら、——

「お、おれは、もう眠くなつたよ——だからもう此處でおわかれにしよう、自動車でゆくにしても

歩いてゆくにしてもさ、君はひとりで歸れよ」

彼は、積み重ねてある鐵材の上にくつたりと腰をおろした。

「ぢやあ、君はどうするんだ？」

「どうするつて、——そんなことがわかるもんか、いづれどうにかなるだらうよ」

「おい、おい、勝手な理窟は言はないで、今夜はおれの家までゆかうよ、——こんなところで寝ころんでゐたら、今に風邪をひくよ」

「へんなことを言ふね、君は、……」

黒上は、ごろりとだらしなく鐵材の上に寝そべつた。それから、ごろりとうす氣味のわるい眼で南里の顔を見詰めながら、

「南里！人間は他人の運命に干渉する資格は無いといふことをおれに教へたのは君だぜ、その君が——このごろは、すつかり良い世話焼きになつたね、おれはもう君と話をするのは御免蒙るよ、君は立派な人間さ、ニヒリストで、道徳家で、それに慎み深くて——、へッ、へッ、へッ、十年ぶりで會

つた舊友と夜道を歩きながら、センチメンタルになつて、さて、これから家へ歸つて懷舊談に花を咲かせやうなんて不了簡は、おれには無いんだからね、捨て、置いてくれよ、いゝから、何處でくたばらうとおれの勝手ぢやあないか、おれはね、君が考へるほど悲惨な人間ぢやあないんだから、——さつき、君と會つたときには、思はず昔のことをおもひだして悲しくなつてきたが實を言へば、今夜眠るには、君の家なんかより、まつたく留置場の方が相應しいからな」

「そりやあ結構だ——だがね、眠るにしたつて、そとちやあ背骨が痛いだらう」

「背骨？、おい、おい、君には人の背骨のことまで氣にかゝるのかい？」

「急に調子が荒つほくなつたな、まあ、いゝさ、——ぢやあ、勝手にしろよ、黒上よく覚えておけ！貴様とおれとは、もうまつたく別ものになつてしまつたんだといふことを、——おれはもう歸るか

ら」

南里は、少しむつとした調子になつてさう言つたが、しかし、眼の前に寝そべてる黒上の姿を見ると、一瞬間、それは自分の魂がふらふらと自體の中からぬけ出して、眼の前に横はつてゐるのではないかといふ氣がした。だが、彼はそのまま、すたくと前に歩きだした。うしろに残してきた友人の寂しい幻影は、不思議に、彼の心の何處にも残つてゐなかつた。彼は過去の幽霊をふり捨て、きつたといふ氣持に今は新しい昂奮を覺えながら、われとわが胸に叫びかけた。……戦へ、戦へ、——お

れはこの古ぼけた蒲團をはねのけて、人生の戰場へおどり出すのだ、——

彼は筋骨のたくましい自分の腕をさすりながら昂然として胸を張つて勢ひよく歩きだした。

おでん屋の屋臺がごろ／＼とすべつてきた。その車の音をきくと黒上は、首筋をふるふると顫はせながら起きあがつた。

闇の中からぬつと立ちあがつた男の姿に屋臺を曳いてゐた頭の禿た五十近い老人はどきつとして眼を睜つたが、しかし、黒上はにやにやと笑ひながら、屋臺の前に立ちふさがつた。

「酒はあるかね、——酒は？」

「えゝでも、もうすつかり火を落してしまひましたからね」

「いや、酒だよ、酒だけあればいいんだぜ」

「冷でよろしければ」

おでん屋の親爺は、いかにも困つたこいふ表情をしながら、氣の無ささうな返辭をして車をとめた

「コップでいゝよ、——寒いからな」

さう言つた黒上の風體を、おでん屋の親爺はもう一度、うろんさうにぢろん／＼眺めてから不承無精

に柵の上から小さいコップをおろして酒をついだ。黒上はそれを一息にあけてしまふと。

「さあ、もう一杯」

彼は咽喉を鳴らしながら、次のコップを飲みほした。四杯目のコップをあけたとき、おでん屋の親爺は、寒さうに白い息を吐きながら、――

「旦那、もう酒が無いんですよ、それにいくら寒くつたつて、そんな風に飲んぢや毒ですよ」
「無いつて、――ほ、ほんたうかい？」

「ほんたうですとも、このとほりですよ」

親爺は徳利を逆にして見せた。

「ぢやあ、何か無いかね、――何かほかのものは、電気ブランでも焼酎でもいいんだが」

「それがね――まったく何も無いんですよ、だから、今夜はもうお歸りなさいよ、おかみさんが待つてゐますぜ！」

「仕方がない、――ぢやあ、もう行けよ、おれも死んだおかみさんの夢でも見て寝るからね」
彼は元の鐵材の上へぐつたりとよろけかゝりながらもつれ聲で言つた。

「冗談ぢやありませんぜ。――お勘定を戴かなくつちやあ……」

「ところがね、――金になると、こつちの方で火を落したばかりのところさ、氣の毒だが、この次

まで待つてくれよ」

「何だつて、――金がねえつて、おい、いゝ加減にしろよ、おれだつてね。酔狂で商賣してゐるんぢやねえぞ、金がねえんなら、そのお前の着てるボロ外套でも置いてゆけよ」

親爺は聲の調子をがらりと變えて、肩を張りながら、今にも殴りかゝりさうな態度で黒上の方へ近づいてきた。しかし、黒上はもう兩足をだらりと地上に投げだしたまゝ、かすかな駈を立て、眠つてゐるのであつた」

「畜生！狸寝入をしてゐやがる、――よし」

親爺は、屋臺車をそこへ置きざりにしたまゝ二三町先に見える交番の赤い灯かけに向つて走つていつたが、しかし彼はすぐに髯の生えた小柄な巡査をつれて歸つてきた。

黒上は耳の傍でがらん怒鳴る人の聲を聞いた。彼の意識は朦朧として、それはさながら遠いところから迫つてくる群集のわめき聲のやうにひゞいてきた。堅いものが彼の首筋に觸れた――彼は自分の身體が何かに操られて動いてゐるやうな氣がしてきた。何の氣力も精魂もなく、まったく無意識のうち自分の口から流れ出る不統一な言葉が、彼の眼の前におそろしい速さで轉廻する電燈の渦の中に溶けてゆくを感じてゐた。それから、自分の足がまるでつり下げられた人形の動くやうに、乾いて路上を氣持よくするくとすべつてゆくを……。

一時間近く経つて、やつと彼がわれにかへつたときには狭苦しい部屋の中に足をやもりのやうに壁に押つけて眠つてゐた。眼をあけるに彼のそばには五六人の男が、ごつちやになつて蒲團にくるまつたまゝ高い躰を立てゝゐた。——その瞬間すべての記憶がきれぎれに頭の中に甦つてきた。さうだおれは留置場に入れられたのだな、——黒上はむくくを首をもたけながら、あらためて彼のぐるりに眠つてゐる人々の顔を見廻はした。

黒上の右には五つの頭がならんでゐた。——みんな、ぐつたりと疲れきつたといふ風に口をあいて大きな躰をかいて眠つてゐた。ひとわたり留置場の中を見わたしてから彼はまたごろりと横になつたが場所が狭いので兩足を關節のところ曲げてゐなければならなかつた。四角い箱枕のために首の骨が針で刺すやうに痛んだ。そつと箱枕を蒲團の下へ入れてみたが、しかしさうすると、こんどは肩が窮屈で呼吸が次第に苦しくなつてきた。——彼は烈しい疲労を胸のあたりに感じてゐるのであつた。しきりに咽喉が渴いてきた。何時の間にか、すつかり風邪をひいてしまつたらしい。額は焼け爛れるやうに熱かつた。留置場の中は、人の息でぬくんだ空氣が停滞してゐるので、ときぐ、むかつくやうな嘔氣が胸の上のぼつてきた。

「——おい、駄目だよ、そんなに矢鱈に動いちゃあ」

彼のすぐ右側に寝てゐた角刈の頭が、薄闇の中にむくくと起きあがるのが見えた。それは扁平な顔に頬骨のいびつに出張つた、見るからに、下作な顔であつたが不審さうに、ぢろくと彼の顔を見おろしながら、

「お前は何時の間に來たんだい。——何だかばかに、場所が狭くなつたと思つたが、夜中に割込まれちやあ困るね、まつたく」

その男は、低い聲で、さう言ひ終ると、そのまゝ龜の子のやうに首をひつこめて蒲團の中へもぐりこんだ。そして、わざと大きく寝返りをうつて、足をくつと前に伸ばしたので、黒上の身體はいよいよ、きつしりと壁際に押しつけられてしまつた。

「君は何でつかまつたんだい？」

その男がまた彼のうしろから囁いた。

「——酔つぱらつてね、自分でもよくわからないよ」

「酔つぱらひなら大したことはないよ、——おれなんか、これで三度目の拘留だから、今度はひよつとすると検事局へ廻されるかも知れないんだ——」

「ぢやあ君も、酔ぱらひといふわけか？」

「へッ、へッ——酔ばらひぢやなくて、かつばらひさ」

その男は何の屈托も無い聲で無雑作にさう答へながら、ぐるりと向きを変えて彼と脊中合せになつてしまつた。しかし、そのとき、隅の方では誰かゝ眼を醒ましたらしく、いかにも倦怠さうなひそひそ聲が聞こえてきた。だが、その聲がやがてはつたりと途絶えて留置場の中は急にしいんとなつた。熱氣のために黒上は眼が冴えて眠れなかつた。ぐつと両手を前に伸ばすと、指の先が長い桶のやうなものに觸れた、それは、ぬる／＼とすべるやうな手ざわりだつた。——彼は不意にぞく／＼と脊筋を傳はる冷氣を感じたので、そのまゝ両手で肩をしつかりと押えながら、薄い蒲團を頭からひつかぶつた。

「何だか、寒さうだね、もつとこつちへ寄りたまへよ」

かつばらひの男は身體を少し横にねぢらせて二人の間にかすかな隙をつくつた。

「いや、ありがたう——風邪をひいて熱があるもんだからね」

黒上は、窮屈さうに曲けてゐた兩足をやつと、うしろへ樂々とのばすことができた。何處か遠くの方で汽笛の鳴るやうな音が聞こえた。曉闇が、何時の間にか、窓を透して、留置場の中へひた／＼と迫つてゐるのであつた。

黒上は知らぬ間にぐつすり寢こんでしまつてゐた。頭の上でさわぐ人聲にやつと、眼を醒ますと、すつかり朝になつてゐた。熱はよほど下り、頭も窓から射してくる清々しい陽ざしの中に、からりと爽かに晴れてゐたが、しかし、身體中の節々は雖で突き刺されるやうにぎし／＼痛んでゐた。

ごろ／＼と芋のやうに寢そべつてゐた同室の人々は氣忙しさうに起きあがりそれ／＼に自分の蒲團をたゝんで部屋の隅に積み重ねた。それから、兩側のうすべりの上に二列に向ひ合つて坐つたまゝ、黙々として同じやうに腕を組んでゐた。——どの顔もどの顔も蒼ざめて垢によごれてゐた。人の數は彼を合せて六人であつたが、しかし隣合つた同志は互に眼顔で挨拶を交しながら、何時の間にか、ひそ／＼聲で囁きはじめた。

黒上のすぐ前には洋服を着た三十前後の髻の生えた紳士がちつと俯むいて坐つてゐた。どれもこれも同じやうな薄ぎたない風體をしてゐる中でこの男だけは異彩を放つてゐる。それは一見、會社員らしい恰好であるが、しかし、會社員としても相當に地位のある人間にちがひないことは、その人品の整つた、しとやかな顔付に現はれてゐた。この男は眼を開いたり閉ぢたりしながら、始終そわ／＼してゐた。とき／＼物に怯えたやうな痛々しい視線を彼の方に投げてはまた慌て、横に外らした。しか

し黒上の右には六十近い、顔中皺で埋まつてゐる老人があごの下にほつん／＼生えてゐる短い白髯を撫でながら、ゆつたりと落ちついてゐた。左は、よごれた神纏を着物の上から羽織つた見るからに骨格のすぐれた三十前後の若い男だつた。顔の扁平な、額の広い、それは前の晩、彼と隣合せに寝てゐた男らしい、——ちよつとのつべりとした下品な色つほさが顔の何處かに隠されてはゐるたがしかしその眼だけは、いかにもかつばらひの常習犯らしく、引き切りなしに、きよろきよろ動いてゐた。

「——如何ですか風邪は、昨夜はすいぶん遅かつたですな」
その男は妙に改まつた調子になつて、彼の耳のはたで囁いた。

「え、——もう、すつかり気分がよくなりましたよ、寢込みを襲つてすみませんでしたね」

「さういたしました、——だが、君は、どうせもう今日は外へ出られるんですからな、結構ですよ——酔つぱらつて何か亂暴でもなすつたんですか？」

「いえ、どうして。——二日や三日ぢやあ、出られませんよ、浮浪罪の上にもう一つ無銭飲食といふやつがくつゝいてゐますからね」

「なあに、それにしたつて大したことはありませんよ、さうせ初犯でせう、——ところが、わたしなんざあこれから何處へやられるんだか、まるで見當がつかないんですからな」
「すると、何か厄介な罪名でもあるんですか？」

「いゝや、つまりそれも、やつぱり窃盗といふわけなんでせうがね——人の郵便貯金を盗んだんですよ、それが常習で來てゐますからな……」

「ぢやあ監獄へも行つたことがあるわけですね」

「え、もうその方はすつかり馴れつこになつてゐますよ」

その男はあたりをぎよろりと見廻しながら得意さうに鼻をうごめかした。しかし、そのとき、外の通路に高い靴音が聞えたので、彼は急に口を噤んでしまつた。ひとりの若い巡査が眼鏡越しに鋭い眼を光らせながら、せかせかと近づいてきたのである。

しかし巡査は、ぢろりと眼鏡越しに留置場の中をのぞきこんだゞけで足早に裏口の方へいつてしまつた。しばらく経つと雑役夫が箱辨當を運んできた。入口の四角い差入口から、細長い板の上にのせられた箱辨當と汁椀とを一ばん端に坐つてゐた緒ら顔に菊面のある男が、いそいでうけとつた。その男はそれを向ひ合つて坐つてゐる人々の前へ一つづつ配つていつた。

その箱辨當のふたの上には白い塵がたまつてゐた。黒上はそれをちらりと見たゞけでそのまゝ床の上で置いた。彼の横では窃盗犯が、咽喉をごろ／＼鳴らしながら、汗をすゝつてゐるたが、彼は、兩手

をきちん膝の上に組合せてゐる黒上の顔の上に不審さうな視線を投げつけながら、詰るやうな調子で、

「君——喰べないの？」

その男の眼は——ほんたうに要らないなら自分がもらひたいんだが、と言つてゐるやうに見えた。「酒ですつかり腹を壊しちやつたもんだからね」

「ぢやあ——」

彼の左側から不意に疝高い聲が起つた。しかしそれは窃盗犯の聲ではなくて、顔中深い皺につままれた瘦せた老人の聲だつた。——その老人は前屈みになつて黒上の顔を覗きこむやうにしながら、

「——わたしが預戴しませう」

「え、どうぞ——」

きつかり、黒上の視線をうけとめてから、老人はとりすました態度で箱辨當をとりあけた。だがその瞬間、窃盗犯の手は、箱辨當の横に置いてあつた汁椀をつかんでゐるのであつた。生白い皮膚の上に、まだらに毛の生えた動物のやうな彼の手は何時の間にか汁椀を自分の膝の方へすりよせながら「——ねえ、御飯もわたしに下さればいゝのに」
うらめしさうに囁いてからにやりと笑つた。

朝飯がすむと、すつかり空になつた食器をまた雑役夫が来て運んでいつた。——そのあとから、帳簿を持つた脊の低い巡査がやつてきて、留置人をひとり、番號と照し合せては順々に外へひきだした。彼等は、自分の番號が呼ばれることに勢ひよく返事をしては立ちあがつた。そして、いそいそと、うす暗い留置場の中から出ていつた。まるで、長い旅行の一段落が終つて、到着地の停車場のプラットホームに下り立つた人のやうに。……

最後に残されたのは、黒上と窃盗犯の男だけだつた。留置場の扉はふたゝび錠がおろされた。巡査の靴音が聞こえなくなると、部屋の中は急にしいんとなつた。

そこへ雑役夫が雑巾を入れたバケツを持つてやつてきた。窃盗犯はそれを素早くうけとると、肌脱ぎになりながら床板を拭ふ前に、彼は自分の身體をどしどしこすりはじめたのである。

「何しろ、拘留二十九日ですからね、——垢がかびのやうになつてゐますよ」

彼は氣忙しさうに身體を拭いてしまふと、がっかりしたやうに壁にもたれかゝつて、

「——ねえ、君、少し代つて拭いてくれないかな、何しろ脊中の方が、まるで龜の甲羅のやうになつてゐるんだからね」

しかし、そのとき、荒々しい靴音が聞えてきたので、窃盗犯は慌てゝ居すまいを直し、いかにも殊勝らしく床板の上に四つん這ひになつて雑巾をかけはじめた。両肩の張つた巡査が一人の男の肩をつ

かんで扉の前に立つていた。——扉があいて、新來の客は、狭い入口から、突き倒されるやうに、よろよろと部屋の中へ入つてきた。その男の姿を見たとき黒上はわれ知らず、ぎくりとしてもう一度眼を瞠つた。その男は一見乗馬服のやうなカーキー色の洋服を着て赤いネクタイをつけてゐた、だがしかし、その異様な風態よりも、彼を驚かしたものはその男の顔だつた。

一瞬間、黒上はわれ知らずよつとした。——年齢はもうたしかに四十を過ぎてゐるであらうその男の赤黒い顔は、世路數十年の艱難を深い皺に刻んでゐるが、しかし、見よ！彫刻のやうに美しく秀でた鼻と、廣く秀げあがつ顔とは、彼が高い生活の峰から重疊たる人生の斷崖を眞つ逆様にすべつて深い泥沼の中へ墜ちこんできた人間であることを感じさせるではないか！

だが、その男は、自分の顔にそがれてゐる黒上の視線を感じると、ほとんど衝動的にびよこんと頭を下げて、それから、どうぞよろしくと言ふかはりにへらくとつくり聲で笑ひながら彼の横に胡坐をかいた。——しかし、絶えず何もものかにおびえるやうに、苛立たしく動いてゐるその男の視線をぢつと見まもつてゐた黒上の瞳には次第に絶望的な物悲しさが現はれてきた。それは、ちやうど犬が獨特の敏感さで、途中で出會つた犬の中から素早く仲間と敵とを見わけてしまふやうに、黒上はこの男が自分と同種類の、しかも同ず運命の軌道を踏みすべらした人間であることを嗅ぎわけてゐたのである。——

「ねえ君、マッチを持つてゐないかね、マッチを……」

だしぬけにその男が黒上の方を向いて低い聲で言つた。

「ありませんね、——だが、何にするんですか？」

「煙草だよ、——わたしは煙草だけこつそり隠して持つてきたんだがね、何しろマッチが無くつちやあ仕方がないな」

彼は、そつとスポンのポケットから皺くちやになつた朝日の袋を出して見せた。二人の言葉が途切れたとき、巡査の靴音がひびいてきた。がちやりと錠を外す音が聞こえた。

「十一號！」

聲に應じてとびあがつたのは留置場の隅で雑巾をしほつてゐた窃盜犯だつた。彼は立ちあがる拍子に黒上の方をちらりと見て、

「ちやあ、大將、これでおわかれだ、別荘へ行つたらいろ／＼君のことを思ひ出すぜ！」

彼の顔は悲痛な表情によつて埋まつてゐた。しかし、聲だけはわざとらしくおどけた調子でさう言ひながら扉の外へ出ていつた。……正午近い留置場の中は夜更のやうに静かだつた。カーキー色の

洋服を着た男は壁にもたれてちつと眼を閉ぢてゐるが、急に彼の方へこぢり寄り寄つてきた。

「ねえ、君、——失敬だが、君は一體何時出られるんですか？」

「此處を——？さあ酔つぱらつてゐるから、よくわからないですが、何しろ浮浪罪の上に無銭飲食がついてゐるといふ程度ですからね、大したことは無いでせう——今夜か、おそくとも明日の朝か……」

「ぢやあ、一つわたしの頼みを聞いてもらえないだらうか——つまり、わたしが此處に入つてゐるといふことをわたしの女房に知らせてもらえればいゝんだが——愚圖々々してゐるとまつたく未決にぶちこまれるかもわからないんだからね」

「しかしね、そのひまが無いんですよ、今の僕には——だから約束をしたところで、守れなければ結局何の役にも立ちませんから」

「ところが、君——何も難かしいことを頼んでゐるんぢやあないぜ。わたしが此處にゐることを知らせてさへくれ、いゝばいゝんですよ——」

「一體何處へ知らせるんです、——兎に角、その約束を守れたら守りませう、だが僕の心は人のことを考へることができないほど一つのことに集中してゐるんです」

「心臓をいふことを言はないで、これだけは頼むから、」

それは哀願するといふよりも、むしろ訴えるやうな調子を帯びた言葉だつた。

其男の思ひつめた表情は、たしかに黒上の胸にある種の感動をあたえた。——彼は両手を自分の膝の上できつかりと組合せながら、

「——よろしい、ぢやあ引受けませう。僕は少しの感情も雑えないで、機械のやうにあなたの頼みを果しますからね。——だから、あなたの名前とあなたの奥さんのゐらつしやるところだけをよく教えて置いて下さい。それ以外のことは僕は少しも觸れたくないですから」

「それ以外のことゝいふと？」

その男の眉の上をそのとき、一抹の不安が微風のごとくかすめて通つた。——

「僕はあなたに同情したくないんです。——だから、あなたが如何いふ種類の人で、如何いふ運命の中に喘いでこられたかといふやうなことは何も聞きたくないんです。——それだけを約束してもらへればあなたの頼みを果す位のことは何でもありませんよ、」——黒上は、早口に、かうぐつと一本大きく釘をうちこんで置いてから、急に慰はるやうな眼付でその男の顔を眺めながら、

「——それで、何處に、ゐらつしやるんです、あなたの奥さんは？」

「巢鴨の宮仲です。——それだけは、わかつてゐるんだが、しかし番地がはつきりしないんでね」
その男は考へこむやうに首をうなだれて、それから腕をしきりにさすりはじめた。

「番地を知らないんですつて、——自分の家の番地を……？」

「それがですよ、——わたしはもう十年近く家へ歸つたことがないんですからな、始めは四谷に住んでゐたんだが、その家をもう四五年前に引越して、今、巢鴨にゐるといふことだけがわかつてゐるんですよ、母親と、女房と、それから娘が一人ゐるんですが——」

「すると、あなたは、その間、丸きり家へお歸りにならなかつたといふわけですね？」

「さうですよ、——尤もわたしはその前から上海で事業をやつてゐましたからね、家族に會ふ機會は少かつたんですが、十年前に、わたしの身邊に思ひがけない凶變が現はれたんです、それから、ばたばたと……」

言葉につれて次第に昂奮してくるその男の表情の目まぐるしく動くのを黒上は瞬きもせずに見詰めてゐたが、慌てゝわれにかへたやうに手眞似でその男の言葉を遮つた。

「——いや、もう、それで澤山ですよ、どうやら僕はあなたの話に興味を持ちかけてきましたからね、」

彼はきつぱりとした調子でさう言つてから、不意に話の腰を折られてきよとんとしてゐる相手の顔

色に現はれたかすかな苦悶を、やわらかな微笑で救ひあげながら、

「——悪く思はないで下さい、失禮ですが、あなたと僕とはどうやら同じやうな運命に呪はれてゐる人のやうな氣がするんです、だから、——いゝですか、僕は今自分を壓えつけられてゐる過去の重石の上にもう一つあなたの過去を重ねたくないんです、」

「君のお言葉は、わたしにはよくわかりません、わたしは何も君の運命を呪ふためにこんな話をし

てゐるんぢやないですか」

「いや何も、——そんな風に考へないで下さい。つまり一口に言ふと、明日自殺を決行しやうと考へてゐる男があると思いますね。さういふ境遇に置かれてゐる男にとつては、世の中にたつた一つのことを考へる餘裕しかありませんよ——いや決して僕が自殺するといふわけぢやあないんですが」

「自殺——？」

黒上は、そのとき、嘯くやうにさう言つた相手の唇が烈しく顫えるのを見た。

しかし、次の瞬間、その男の眼は、黒上の顔の上に、うす氣味のわるい冷嘲を湛えて輝いてゐた。
「——君は本氣でそんなことを考へますかね、自殺……わたしはさう言ふ言葉を聞いたとけで胸

がひやりとしますよ、昔は、わたしも一生懸命になつて自分の死に場所を探して歩いたことがありませんがね、——しかし、今はもう死ぬことを考へるさえ恐ろしいですよこんな恰好をして人生の泥沼の中を泳いでゐても、もう人間四十を過ぎると死ぬことも出来なくなつてしまふんですからね」

その聲は、洞穴の中から、深い地の底をすべつて洩れてくる風のやうに冷たかつた。しかし、彼はすぐに視線を黒上の顔から外らして正面の板壁を何の意味もなく見詰めてゐた。頬の肉はすつかり落ちてゐるので深い翳に彩られた横顔は一層瘦せほゞけてゐた。——それはさながら、惨虐な運命によつて鞭たれ蹂躪られながら辛ふじて生き残つた人間の模様を見るやうにこの哀れな男は壊れかゝつた骨組だけでやつと人間らしい形を止めてゐるやうに見えた。

「それで、——奥さんの住居は、何うにかして僕が探すことにしませう、だがあなたのお名前は何と仰しやるんですか？」

「あゝさうでしたね、——うっかり話に氣をとられて忘れてゐましたよ、わたしはね、安達龍平といふんです」

「安達さん、——？」

「さうです」

「すると……」黒上は急に考へこむやうに眼をしばだゝいたが、しかし、ふと思ひあたつたこと

があるやうに両手で膝坊主を敲きながら、

「いや、實は僕も上海に暮したことがあるんですがね、北四川路に安達洋行といふ看板のかゝつた家のあつたことを思ひだしたものですからね……」

「そ、それです、たしかに、——わたしの弟が店をうけついでやつてゐるんです」

思はず聲の調子をあけてさう言つてから安達龍平の顔には名状することのできない狼狽と苦悶とが現はれてきた。しかし、そのとき非常な速さで黒上の頭の中をさまざまな情景が入り亂れて通つた。

彼は煉瓦づくりの三層樓である安達洋行の二階の窓から、ある夕方、一人の少女が首をつき出して、ちつと町の雑踏を見下ろしてゐるのを見たことがあるのを思ひだした。——すると、あの薄ぎたない文監師路の月明館の二階で、艶書のやうな封筒の裏にM・Aと書いた女文字の手紙を、自分の眼の前で読みあげたときの生々と燃えるやうに輝いた荒川克彦の顔がうかんできたのである。——

その、きれぐれの記憶は、廣い闇を縫つて輝くランタンの光のやうに、今彼の眼の前に横はつたところの不可解な謎を封じた暮い洞穴の入口を照らしはじめたのである。黒上の心は最早、すべての抵抗力を失つて、勇敢なる探險家が、ぬる／＼とすべる岩角を降りながら一歩／＼闇の中を下つてゆくやうに、進んで安達龍平の語る言葉の裏にかくされた運命の秘密を探らうとしてゐた。

「——しかし、それにしても、あなたは、如何して十年もお會にならぬ奥さんと、不意に會はう

となさるんですか？」

その言葉は、しかし、やうやく落ちつかうとつとめてゐた安達龍平の心を一層狼狽させてしまつた。——彼れはどきつとして胸をうしろへ引き、黒上の顔をおそろしく見詰めてゐるが、急に自分をゴマ化すやうに冷たい笑ひを唇の上に浮べながら、

「いや、——それはね、今その話をあなたに聴いていたところ、で仕方がないですよ、——それに君は自分の上に他人の運命のおつかぶさるのを恐れてゐる人ですからな」

しかし、やつと咽喉から沁み出るやうな聲でさう言つた相手の言葉は、かへつて黒上の胸に新しい興味を勃然として湧き立たせた。

「それにですね」

安達龍平は彼の横に膝を抱えてぢつと壁にもたれてゐる若い男の顔の中から、次第に冷徹な表情が崩れて、その萎んだやうな瞳が急に好奇の感情に彩られてゆくのをみると不意に、不安さうに眉をしばだきながら、慌てゝ手を伸ばして黒上の肩を敲いた。

「そ、それにですね、——一つのことを話し出すと、何から何まで話さなければならなくなります

から、わたしの一生涯はまるで見えない力にひきづられて何處といふ當てなく歩き廻つたやうなものですよ……原因もなければ結果もない、唯、矢鱈無精にぐるぐると引きづり廻されたといふだけのことですよ、しかし今は、君——」

彼はほきぐくと枯枝を折るやうな調子で一息にかうしやべつてしまふと、何かしら深い感慨に沈むやうに口をつぐんだ。しかし、血の氣を失つた唇はひり／＼と動きその顔は今にも泣き出すのではないかと思はれるほぎ深い皺の波はよれ／＼にゆがんで見えた。彼は舌の尖で、硬ばりついたやうな唇を濡らしながら、——。

「今は君、もう、わたしを支えてゐるものは何にも無いんですよ。自分を引づり廻してゐる力からも見捨てられてしまつたんですからね、名譽も誇もすつかり失つてしまつた人間には、まったく自殺をする氣力もありませんよ、自殺をしたところで一體何が得られるんです、ねえ君——わたしはもう二度とかびあがることの出来ない人間なんです、君は何も御存じないが……わたしは四五日前、自殺しを……」

彼はまた此處までしやべつて、ぐつと息を吸ひこみながら耳のはたへ口をよせて、

「——自殺しをしたばかりの人間ですよ、考へるだけでも恐ろしい、わたしはまるで夢中だつた、如何してあんな氣になつたかまるでわかりませんよ——わたしはね今その嫌疑者の一人として留置さ

れてゐるんだが、世の中では、わたしの犯行が少しづつ、ざり／＼と明かるとさへさらけ出されてゐるのが眼に見えるやうだ——こんなどたん場に落ちてから十年も會はない女房に會はうなんてふ氣持の起つたといふことを笑はないで下さいよ——わたしは一言わたしの口から女房に話したいんです、まつたくわたしは、あの毒蛇のやうな女に身體中を締つけられてゐるときでも、女房のことを忘れてゐたことはないですからね」

黒上の胸は痙攣を起したやうに戦のきはじめた。彼は最早、この不可思議な、哀れな男の顔を見るに忍びなくなつてゐた。——他人の運命の秘密を探らうといふ興味は彼の心の底から跡方もなく消えてしまつた。かすかに足元を照してゐたランタンの光はあまりにも凄惨な人生の風景を遠い洞穴の奥に朦朧とうつしだしてゐるではないか。——黒上の頭はもやもやとして、今、彼の前に坐つてゐる乾からびた四十男の顔も、このうす暗い留置場の情景も、いや、此處にちつとして冷たい壁にもたれてゐる自分の姿さえも、誰かと思ひがけなくもひろけた古い小説の頁の中にうかんでゐる奇怪な人間を見るやうな氣がするのであつた。

「ぢやあ、きつと、あなたのお頼みだけは果しますから」

黒上はほとんど無意識のうちにさう言つたが、しかしその言葉も彼自身の言葉ではなくて、何か虚ろな、いや、それすらも、小説の中の人物がしゃべつてゐる言葉を聲をあげて讀んでゐるやうな氣が

した。しかし、そのとき、がちやりと鳴るサーベルの音が廊下にひびいて、嚴めしい巡査の顔が、黒上の心をふたゝび新しい現實に喚戻したのである。

「おい、——十三號、取調べることがあるから出ろ！」

黒上はちろりと部屋の中を見わたしてから、ゆつくりと立ちあがつた。

第八章
南里立作

南里玄作は埃の白くうかんで居る机に片時凭せかけて、暮かゝる高原の風景を眺めてゐた。すつきりと晴れた空には圓錐形の層をつつた白雲が空の軌道に定着したやうにうかんでゐるが、しかし、その雲の一つ一つは鈍い夕ぐれの陽ざしの中にくつきりと正しい輪廓を残してゐた。——
本門寺の森をめぐる丘の傾斜面には麥の穂が青々と波をうち、丘の上に巨人のやうに太い幹をならべてそゝり立つてゐる椎の並木は空つ風が砂塵を煽つて通るごとにざわ／＼と大きくゆれてゐた。
そのとき、何處か遠くの方でガタ馬車のラツバの音が聞こえてきたのである。——彼はその音にちつと耳を澄ました。すると、かすかに底冷のする黄昏の大氣を顫はして次第に遠くかすれてゆくラツバの音は、ふと彼の心に過ぎ去つた日のおもひでを呼び起した。それはちやうど深い苔に蔽はれた墓石がぐら／＼とゆらぎはじめたやうに——。

彼の頭の中には傲然として肩をそびやかした一人の若々しい青年の姿がうかんできた。——高い情熱に燃えてゐる眼、正しい理智に輝いてゐる額——それはまぎれもなく若き日の南里玄作であつた。十年前である。——さながら水の泡のやうに時代の水面にぶく／＼とふくれあがつてきた社會運動の前線に彼は颯爽とした姿を現はした。Z事件——それは日本歴史を通じて最もおそろべき事件である

が、しかし一口に言えばそれは時の政府の奸計によつて構へられた、左傾思想家を一網打盡に葬り去るための大きな罫であつたが——その爲に新しき思想の芽はほとんど一本の雑草をも残さずに刈りとられた。時代はたちまち狂走する馬のやうに反動の谷底に向つて陥没した。しかし新しい時代の波は烈しい弾壓の層をやぶつてむく／＼と頭をもたけてきた。夜が終つて朝が来るその曉闇の微風にも似た時代の風に顔をさらしてゐたところの先驅者としての自分の過去の姿を、南里玄作はきれ／＼に現はれてくる記憶の中に探り求めてゐた。——

だがそのとき、不意に窪地のへりの急な坂をのほつて近づいてくる足音が聞たえてきたのである。その小刻みな靴の音は、ざくりざくりと道路に敷つめた砂利にひゞいた。ほがらかな春の夕、椎の若葉は清々しい風に煽られて絶間なくゆれるごとに孕むやうにうけた鈍い陽ざしを、もううす暗くなつてゐる斷崖の下にゆすぶり落とした。しかし靴音は次第に彼の家に近づいてくる。彼は深い回想に沈んでゐた瞳をあけて慌て、立ちあがつた。——

やがて、弓なりに曲つた坂道——それは彼の坐つてゐる部屋から正面に見える——に黒い婦人帽子が見えた。それから水色のガウンが——。次第にのほつてくるにつれて手が見え手にぶらさけた細長い箱とオペラバックが見え、短いスカートの裾が見え、白い絹の靴下を穿いた足がもつれるやうに動いてくるのが見えた。その、すらりとした洋装の美人は、うつむきがちに、しかし急ぎ足に近づいて

くる。——南里の視線は次第にその女の顔に集注していつたが、そのとき逸早く彼の姿を見つけた女が、五六間手前のところで立ちどまつて軽く頭を下けた。

燦珠、——燦珠、——それは、女優の燦珠にちがひなかつた。それにしても、この女が、何のために、しかも、だしぬけに自分を訪ねてきたのであらう——？

燦珠は表の格子戸の方へは廻らずに、壊れかゝつた低い柴垣の間を身軽にくゞりぬけてはいつてきた。た。

「びつくりなすつたでせう、——でも、よく家にゐらしたのね、わたし若し留守だつたら如何しよるかと思つたの」

燦珠は、右手にぶら下げた細長い箱——それは何處かの店のマークのついた紙にくるんであつたが——を椽側の端に置いて、ほつとしたやうに息を吐いた。

「それにしても、よく僕の家がわかりましたね、何だか度膽を抜かれたやうで心のピントが外れてしまひましたよ——何か急な用事でもあるんですか？」

「さうなのよ、急な用事でもなければ、こんな山奥のやうなところへ、重いものをぶら下けてやつ

て来ないことよ」

「僕に、——僕に用事があるんですつて、眞逆、差向ひになつて口説き落さうといふ不了簡で来たわけでもないでせうね」

「さあ、それも場合によつたらね、でも、あなたとわたしとはどうせ人間の種類が違ふことよ、——ほら、何時か仰しやつたぢやないの、女は猫か牛だつて」

「しかし戀愛は食慾のやうなものですからね、場合によつたら猫が人間を喰ひ殺さないといふことも無いでせう」

「勝手になさいよ、——今日はね、わたし無駄口を敲きに來たんぢやないことよ」

「ぢやあ何か深刻な話でもあるんですか？」

「さう一々からみついてきちや駄目よ、まるで物が言えなくなるぢやないの、——わたし、ほんたうは眞面目な相談があるのよ」

「眞面目な相談ですつて、——そいつは残念だが御免を蒙りたいですな、それよりも燦珠さん、その箱は何です、……どうやら、そいつを頂戴する権利が僕にありさうですね」

「権利ぢやないことよ、ことによると義務になるかも知れないわ」

「義務？義務ならいよく結構だ、——ぢやあ一つ義務を果すためにあけてみるかな」

南里は手を伸ばして、紙にくるんだ細長い箱を引きよせた。紐の結び目をほどいて包紙をめくると、うすい茶色のボール箱が現はれた。その中には、ウイスキーの瓶が一本、きちんとくくりつけてあつた。南里は両手でそれを撫でながら、

「ブラック・ホワイトですね、——何だか咽喉がごろ／＼鳴つてきたぞ、近ごろはすつかりこんなものにはありつけなくなつてますからね、しかし、兎に角、靴をぬいだらどうです、尤も部屋の中はごみだらけだから、反つて、そこにゐる方が安全かも知れませんがね」

「いゝことよ、——急にお世辭を言はなかつたつて、——」

燦珠は、もう、うす暗くなりかけた部屋の中を覗きこんでるたがしかし、すぐにくすくす／＼笑ひだした。

「なるほど、これぢやあ、まつたくあなたの御忠告に従つた方が良さうなのね」

敷居際に置いてある座蒲團を彼女は自分の方に手繰りよせてその上に腰をおろしながら言つた。その間に南里は瓶の栓をぬいてゐた——窪地に鳴る落葉の音が、かさかさと佻しく聞えてきたが、しかし、大氣は生暖かい晩春の感觸を孕んでゐた。

「——兎に角、賓客を遇するために、部屋を掃出しますからね、ちよつとそこを退いて下さい」

南里は、ブラック・ホワイトの瓶を机の上に置いてから、低い聲でさう言つた。——彼は思ひがけ

ない訪客のためにすつかり狼狽してゐた。その感じをゴマ化すために少しいゝ氣になつてはしやぎかけてゐる自分に對して、軽い反感を覺えたがしかし、妙にそわ／＼した態度で部屋の中を片つけはじめた。

小さな机を間にはさんで、あけ放した部屋の中に南里は燦珠と向ひ合つて坐つてゐた、彼の顔は久しぶりで口にするウイスキーの微燻に彩られてゐた。酔はぢり／＼と廻つてきたが、しかし、それにもかゝはらず、不思議に彼の心は沈んできた。——言葉だけは酔とともに、ますます生々とはしやいでくるのに胸の底には重苦しい憂愁がはびこつてゐるのであつた。その同じような、ちぐはぐな感じを南里は、型にはまつた軽口で應酬してゐる燦珠の、何處か苛立たしさうな表情の中にも見出しつゝ、話が自分の心の底にかくされた重要な相談には近づかずに、しかし、言葉が言葉を追つ駈ながら次第に遠のいてゆくもどかしさに燦珠は眉を顫はせながら、

「——わたし、やつぱりかうやつてゐてもあなたにはお話しが出来ないわ、まるで何のために來たのかわからなくなつてしまつたのよ、それに、近ごろはわたし、まつたく調子がへんなの、やつと生きてゐるやうな氣がするのは舞臺に立つてゐるときだけよ——ひとりぎりになるともう何を考へる力

もなくなるの……」

「それはつまり、あなたがすぐれた藝術家だといふことの證據になるわけですからね、だがさういふメランコリーな症候を拜聴したところで、僕はまつたく醫者ぢやないですから」

燦珠は、退屈さうにウイスキーの瓶をとりあげた南里の手首が痙攣的に動くのを眺めながら、頭の中に亂れかゝつてくる感情をやつと壓えつけてゐたが、急に視線を障子の外にうつした。

「すつかり暗くなつたのね、——わたし、もう要件をばきばきと片づけて歸るわ、あなた荒川さんの近頃の消息を御存じないこと？」

「知りませんね、——だが、その荒川に關することが、このウイスキー一本に相當するあなたの重要な要件なんですか？」

「これは別の話よ、——ほんとうはわたしあの手に手紙を出したのよ、領事館氣付にして、それからもう一通領事館警察にあって、あの人の住所へ廻して貰えるやうに頼んだのよ、だけど、その手紙が領事館からの返事と一所に昨日戻つてきたの——、あの人は一ト月前まだ月明館といふ宿屋に泊つてゐるんだけど、今は行方不明になつてゐるといふのよ、だけど、あの人はわたしのことで何か誤解してゐるんじゃないかしら——、上海へ着くとすぐに、わたしのところへ、わけのわからない絶縁狀をよこしたりするんですものね、だけどあの人が何を考へてゐるのか今になるとまるでわからないわ」

燦珠は考へこむやうに、うつむいてしまった。——暗い部屋の中に、うしろの窓からくる外光が彼女の頬に深い陰影を刻んでゐた。風は次第に穩かになり周囲の風物は暗い大氣の中にどつしりと溶けてゐた。

「——つまり荒川の心が何故あなたから離れたといふことがわからないと仰やるんですね？」

「さうなのよ、——でも、わたしたちは東京驛で氣持よくわかれたんですね？」

「ぢやあ」

南里は頬杖をついてゐた兩手を慌てゝ離れた。彼は急に心の構えを立直すやうに立ちあがつて、電燈のスイッチをひねつた。

「ぢやあ——友人の義務として、そのことだけについて僕が説明させよう、僕は荒川が東京驛であなたとわかれた晩に、銀座でその同じ荒川に會つたんですね」

「あの晩——？」

「さうですよ——尤もそいつは幽霊かも知れませんがね」

電燈のほかけの中に、少し面やつれのした燦珠の顔が美しくうかんでゐた。南里はひた／＼と流れてくる宵風に頬を撫でられるやうなやわらかい情感が、しづかに迫ってくるのを覺えながら、彼の前に不審さうに輝いてゐる女の瞳をぢつと見据えた。

「——何だか厭な晩でしたよ、雨が降つてゐてね、僕はひとりで銀座のカフェで酒を飲んでゐて夜が更けてから、ひよつこり出たんですがね、新橋の橋の袂で、かう外套の襟を立てゝ、うつむきながら歩いてくる男に會つたんですよ——その男と擦れ違つたとき僕は身體がぞくぞくとしましたよ、頬が落ちて、眼がどろんどろんとして、何か一つのことを思ひ詰めたといふ顔でしたよ、つまり、人間が自殺を決行する前にはあんな顔付をするだらうと思ひますね、誰だか突嗟の間には僕にもわからなかつたほどですからね、ぢつとその男と顔を見合せて、そのまゝ一足前へ歩いてから、やつと荒川だといふことがわかつたんですよ」

「でも、あの人は、たしかに東京驛から汽車に乗つたんですね」と、慌てゝ燦珠は言葉を遮つた。彼女の眼には未だ半信半疑の色がうかんでゐたが、しかし、一つ一つ實感のこもつた南里の聲の調子はぴり／＼と泌みとほるやうに彼女の胸に迫つてきた。

「ところが、さういふ奇蹟が現はれたから仕方がないぢやないですか——何故、あの男が途中から引返して来たかといふやうなことは多分あの男自身にもわからないだらうと思ひますね、あの男は戀愛のビュリタンですからね、——無論、僕にもわからない、唯わかることはあの男はあなたに會ふた

めに歸つてきたといふことだけです」

「でも、その晩、あの人はわたしのところへは來なかつたのよ」

「そ、それがですよ、——あなたはあの男にお會ひにならなくともあの男はあなたに會つてゐるんです。僕の話は少し抽象的過ぎますがね、——あの男は何か奇妙な幻覺を感じたらしいんですよ」

「何だか、わたし、少しもわからないわ、それで一體如何したといふの？」

「ぢやあ、——もつとはつきり言ひませう、あの男は同じ晩にあなたの部屋の窓の下へ忍び寄つたんですよ——すると、正面の鏡の中にあなたの顔ともう一つほかの男の顔とがびつたりくゝついているたといふんですがね、それはおそらく幻覺でせう、いや全く鏡といふものは何を寫し出すかわからないものですからね」

南里の聲には少しづつ毒舌らしい調子が現はれてきた。

「だ、だれの顔が映つたと仰しやるの？」

燦珠は、もう身體を支える力も失つてしまつたやうにぐつたりとうしろの障子の棧に肩を凭せかけてゐた。

「すると、あなたは、まるで何も御存じないわけですね、——何しろ小説家といふものは突拍子もない空想をするものだな、それであの男は一瞬間のうちに失戀してしまつたといふんですよ、莫迦な

——それだけですよ、だから、そんなに空想を逞しうしようそれはあなたの關り合ふ問題ぢやないでせう」

南里は疊の上にごろりと横になりながら言つたが、しかし、彼の聲は何時の間にか、かすかな冷嘲を雜えて、ぐいぐいと鋭利な針で突き刺すやうに燦珠の胸にひびいてきたのである。

燦珠は急に眼界がくらくらつて動きはじめたやうな氣がしてきた——それはちやうど顯微鏡の穴から心の底を見透されてゐるやうに深く窪んだ南里の眼が、今は自分のどんな微細な感情の動きをも見まもつてゐるやうな氣がするのであつた。彼女はそのまま疊の上に眼を落した。そして深い溜息を吐きながら數分間放心したやうに茫然としてゐたが。しかし急に、聞えるか聞えないほどの。かほそい聲で言つた。

「——南里さん、わたし、ほんたうにあなたに聞いていたよくことがあるのよ」

「どんなことですか？」

「——荒川さんのことよ、わたしね、ほんたうは……」

燦珠は不意に言葉を濁したがしかしその頬は火照つたやうに赤くなつた。

「……どんなことを言つてもあなたは氣を悪くならぬこと？」

その瞳の底をひとすぢの嬌羞に似た感情が流れた。——彼女は思ひ詰めた言葉の噴き上げてくるのをやつと喉咽の下で壓えつけてどもるかのやうにちつと唇を結んで南里の顔を覗きこんだ。

「もちろん、僕が氣を悪くする筈はありませんよ」

「でも、荒川さんはあなたの親友でせう？」

「さあ——先づさういふことになりませんが、だが、それにしても僕と荒川とは全然別ものぢやないですか？」

「ぢやあ言ひますわ——わたしあの人をすつかり不幸にしてしまつたやうな氣がするのよ、でも仕方がないわ、わたしとあの人とは戀愛に對する考へ方がまるきり違ふんですもの、わたし、それはあの人眞劍な氣持はわかるのよ。だけさ、あの人氣持さほりに動いてゆくことはできないわ——あ人はわたしが裏切つたといふ風に考へてゐるけれど、わたしの氣持は少しも變らないのよ」

「だから何も、荒川を不幸にしたといふことにあなたが責任を感じる理由は無いでせう、それに荒川が實際、あなたの考へてゐられるほど不幸なのか如何かといふことは當人にだつてわからないでせうからね……いや、ことによると今頃は、あなたのことなんか、もうすつかり忘れてしまつて新しい幸福に浸つてゐるかも知れませんよ」

「だけどそれはね、——わたしの今の氣持とは別問題よ、わたしはやつぱりあの人を不幸にしたことに責任を感じなければ居られないわ、それに、わたしは決してあの人を幸福だとは思へないのよ——わたしは、もうすつかり墮落しきつた女ですもの、だから、わたしには、自分の愛し方であの人を愛するよりほかに仕方がないの……わたしはね、あの人の前にもう一人ほかの男を戀してゐたのよその人もわたしの爲に身を滅ぼしてしまつたの、そんなことを考へ合すとおそろしくてたまらないわあの人とその男とがともよく似てゐるんですもの、そして二人とも上海へ行つてしまつたのよ……」

燦珠は、しどろもどろな口調でこみ上げてくる感情を今は整理しようとする餘裕もないほどに早口にしやべりつづけた。

「上海へ——。そ、その男といふのは誰です？」

「その人の名前は、言ひたくないのよ、わたしが未だ女優にならないすつと前のことですよ」

胸にとよめいてくる情懷のために彼女の聲は顫えて來た。南里はちつと腕を組んで考へこむやうにやうやく屋あかりに照された森の影が窪地の傾斜面にゆれてゐるのを見据てゐたが、しかしその顔は急に深い憂愁に鎖された。そのとき思ひがけなく彼の頭の中を通りすぎたのは黒上哈介の姿だつた。十年前彼等が未だW大學の學生であつたころ南里は戀愛の秘密主義者である黒上が、ひそかに、——それはまつたく幸福のかすかな塵すらも人に奪はれるのを恐れるかのやうに、石のやうな情熱を溶か

して一人の少女に戀してゐたことを知つてゐたから——。

「——それで、その男は未だ生きてゐるんですか？」
南里は、われ知らずむくむくと起きあがつて、突き刺すやうな語調で言つた。

「——え、生きてゐると思ふわ、だけど、その人の消息はまったくわからないのよ、わたし自分が不幸になるときつとその人のことを考へるわ、——」

「それで、その男は何時ごろ上海へ行つたんです」

「さあ、——もうそれも七八年になるわ、誰ひとりその人が上海にゐるなどといふことは知らないのよ、だつて自分の思ふことを決して他人にはうち明けられない人ですもの、その人がわたしに残していつた手紙には、自分は群集の中にまぎれこんで姿をかくしてしまひたいと書いてあつたわ、そのころは何のことだかよくわからなかつたけれど、今になるさ、あゝいふ性質の人は、自分の熱情の火で自分の身體を焼いてしまふよりほかに仕方がなかつたといふことがよくわかるの」

燦珠の聲は次第にしんみりと落ちついてきた。——しかし、南里はもうウイスキーの盃を手に取らうともしなかつた。彼女の、訴へるやうな言葉の裏にひそんでゐる眞情は彼の心に反響を呼び起すかすかな際をも與へなかつた。この女も、自分の歪んだ性格のために悩んでゐるのだ、——と、南里は思つた。その感じの閃きは彼の心に新しい想念を次から次へと喚び起した。さうだ、この女の身邊にきつと非常に不幸なことが起つたに違ひない。それでなければ、こんな話をするために自分を訪ねてくる筈が無いではないか、——女といふものは、不幸のどん底にゐるときには自分の最も輕蔑してゐる男に極度の尊敬を感じる場合があるものだ——南里は、何時もの獨斷的な考への方に、さう心をかたむけながら、燦珠の美しい横顔——昂奮のために一層生々とした光澤に輝いてゐるその横顔を眺めた。

「それで、その、あなたの前の戀人と荒川とが非常によく似てゐるんですね？」

「顔も性質もまるきり違ふわ——だけど、もうわたしの頭の中では二人の人を別々に考へることができなくなつてしまつてゐるのよ、荒川さんのことを考へるときにはきつとその人の姿が影のやうについてくるわ」

「失敬だが……」

南里は靜かな調子で、燦珠の言葉を遮りながら、

「——あなたも、どうやら荒川の舊式な宿命論に少し感染されてゐらつしやるやうですね、——人間には、それ／＼一つ／＼の性格のためにつくられた方向があるんですからね、あなたはあなたの道を

行くよりほかに仕方がないでせう、過去の幽霊などは、夢中になつて歩き出すと何處かえ消えていつてしまふものですよ」

「それなのよ——其方向が、わたしにはまるでわからなくなつてしまつたのよ」

「だから、さん／＼歩いてゆけばいゝぢやないですか——盲滅法に」

「でも、女にはそんな勇氣は無いわ、——何とか言つたつてね、わたしも結局古い女なのよ、——一步先へ踏出せば、わたしはもう墮落するにきまつてゐるわ、——ほんたうはね」

燦珠はびり／＼つゝ眉を顫はせながら、

「——わたし、ほんたうは、もう墮落しかけてゐるのよ」

「いや、そんなことが」

南里は急に肩をそびやかした。それは彼の前に悄然として坐つてゐる一人の女に對しては、何かしら眼に見えない恐ろしい力に對して新しい確信と力とを喚び起しながら、

「そんなことが何です！」

その聲は彼の心の一隅からむくむくと頭をもたけてきた一つの莊嚴な感情、——その感情の象徴であるかのやうに強い響をもつてゐた。

「墮落とは何のことです、——墮落とは？山へ登つてゆく人間が若谷底へ下つてゆく人間を見て墮落してゐると考へたとしたら滑稽ぢやないですか、——あなたは今夜は如何かしてゐますよ、何時ものやうに翼を張つて男ごもを眼下に見下したらいゝでせう、墮落することも一つの運命ですよ、あなたの身邊に何が起つたのか、僕にはまるでわからないですがね、運命などといふものは人生の平原の道をふさいでゐる峠のやうなものです、——峠にぶつかつたら何よりも勇敢に越えることですね、谷底へ墜ちたら何へんでも這ひあげればいゝさ、まったく何もくよくよすることは無いですよ、だからもつと翼をひろけて……」

「でもわたしの翼はもうこわれかゝつてゐるのよ——こわれてゐなくつたつて、こんな虚榮の翼なんぞ、どんなにひろげて飛んだところで高が知れてゐるわ」

燦珠の唇には始めてかすかな微笑がうかんだ。彼女には南里が何を言はうとしてゐるのかまるでわからなかつたが、しかしそれにもかゝはらず、彼女は電光のやうな光が、暗い憂鬱に鎖された胸の底に明るく閃くのを感じた。

「虚榮の翼か、いや結構ですよ——一つその虚榮の翼をひろげて千里を飛ぶんですね」

「もう澤山よ、南里さん、あなたの毒が利すぎて、わたしも少し気が楽になつたやうよ」
 「毒ですつて、——あなたは、僕の顔を見れば毒舌呼ば、りをしますがね、しかし、モルヒネかコ

カインのやうなあなたの毒とくらべたら、僕の毒などは何です。物の數ぢやないでせう、せいぐ、この小さなグラスに充ちた一杯のウイスキーといふところですからね」
 「ひとりで勝手にしやべつてゐらつしやいよ、——わたしもう退却するわ」

燦珠はちらつ腕時計を眺めてから立ちあがつた。
 「さうですか——僕もさうしていただくと安心ですよ、あなたのやうな美人と差向ひになつてゐる

と何時ごんな誘惑をうけないともかぎらないですからね」
 しかし、そのとき燦珠は椽端にしやがんで、うす闇の中に自分の靴を探してゐるが急に頓狂な聲を

あけて叫んだ。
 「大變よ、——靴が無いわ、わたしの靴が片つ方丈しか無いのよ」

「——犬ですよ、犬がくわえて行つたんですよ、僕のところの犬はとき／＼、さういふ悪戯をやつ

て困るんですよ、しかし、靴を犬にとられたなどといふことは實に愉快ですな、——つまり、靴は人間にとつては良心のやうなものですよ、元來、穴のあいた良心なんか古靴といつしよに、ごみ箱の中に捨てしまふべきものだから、しかし、あなたの靴はあなたの良心のやうに新しいですからね、待

つてゐらつしやい、一つ探し出させよう」

南里は下駄をつまかけて庭へ下りだが、すぐに垣根のそばへ行つて口笛を鳴らした。すると一匹の小さい黒犬が砂利を敷いた坂道の方から走つてきた。

「大丈夫ありましたよ、この犬はまたすばらしく良心的ですからね、くわえて行つたのは必ずくわえて歸つてきますよ」

「わたし、ほんとに何うしようかと思つたわ——でも靴をくわえるなんて、よつぽとお腹がすいてゐると見えるのね」

「驚いたな、さう、穿ち過ぎたことを言ふもんぢやありませんよ、まさか飯のかはりに、さあ一杯といつてウイスキーのグラスを差しつけるわけにもゆきませんからね——だが、今夜は何だかうき／＼するやうな晩だな、僕も一つ戀の相手でも探しにあなたのお伴をして銀座へでも出かけようか、さてわが肩に虚榮の翼、わが足に良心の靴、わが、胸に情熱の毒、………か、」

南里は舌の廻るにまかせてひとりで出まかせに、しやべりつゞけた。

「もう酔つてゐらつしやるのね——しかし、ほんとに如何、銀座までいらつしやらないこと？」

「銀座——いや、とてもそんな勇氣は無いですね、だが、兎に角その街通りまで送つて上げよう、レデイに對する——いや、ウィスキーに對する義務としてね」

南里は柱につるしてあつた外套をとつて来て素早く襦袢の上から無雜作に引つかけた。空は晴れてきたが、しかし風は妙に生暖かい雨氣を帯びてゐた。二人は低い垣根を越えて、砂利が星あかりに白く光つてゐる坂道をならんで下つていつた。あたりはひつそりとしてゐた。遠い丘はうすい靄に包まれて、その上に森の梢だけが帯のやうにうねつてゐた。——燦珠は妙に息苦しいやうな、しかし、夫にもかゝはらず何かかう互に深い秘密をかくし合つたまゝ、何事も口にするのできない戀人同志がそれ／＼の感情を探りあつて歩いてゐるやうな、苛立たしい遣る瀧なさを感じてゐた。彼女はとき／＼ぬすみ見るやうに南里の横顔を眺めた。うす闇の中に彼の骨張つた頬が、かすかに顫えてゐる——この男は一體何を考へてゐるのであらう、女としての自分の存在をこの男はまったく意識してゐないのであらうか。——

燦珠は南里の深い瞳が悲しげに瞬くのを見た。しかし、彼はすぐに朗かな聲で笑ひだした。

「ねえ、燦珠さん、——あなたは一體何のために僕のところへやつてきたんです？」

「わたし、何のためつて、——唯あなたと話がしたかつたの」

「話——しかし、何も昔の戀人の憶氣を話す相手を見つけるのにわざ／＼僕を想ふといふのもへんですね」

「そんなことは如何でもいゝのよ、わたしあなたと話がしたかつただけなの」

燦珠の聲は胸の底から噴きあけてくる生々とした情感のために顫えて居た。——彼女はこの男に對して、もう何を言つてもいゝといふ自由な氣持になつてしまつて居た。しかし南里は皮肉さうに唇をゆがめたゞけで物を言はなかつた。坂が盡きて雜木林の中に細い道が坑道のやうにうかんで居た。こまでゆくと南里は二三歩先に歩いてから燦珠をふりかへつて——

「——四五日前にね。僕はひよつこり銀座で昔の友人に會つたんですよ。ところが、そいつが偶然荒川と同じ宿屋に泊り合せて居たといふんで意外な氣がしましたよ」

「同じ宿屋つて、何處の？」

「上海ですよ。——そいつも上海で暮してゐたんですよ、上海といふ街は放浪者どもにとつてよつほど魅力のあるところらしいですね」

「あなたのお友達ですつて、——何と仰やるの、その方はね」

「そいつはね、——黒上昡介といふんですよ」

「黒上さん！」

燦珠はわれ知らず聲をあけて叫んだ。足元がふらふらつとして、それは高い斷崖の前で危くよろけ

かゝつたときに感ずるやうな烈しい不安のために、やうやく一つの方向にかたむきかけてゐた彼女の情感は再び恐ろしい力でうしろへ引き戻された。燦珠は聲が顫えるのを夢中になつて抑えつけながら「それで、その方は、今、日本に歸つてゐらつしやるの？」

「さうですとも、——四五日前にそいつが亂酔して巡査と喧嘩を始めてゐるところへ僕が通りかゝつたんです、——だが、その男も失戀して半生を棒に振つてしまつたんですがね、一人の女のために一生を失ふなんて、まったく馬鹿ですよ！」

しかし、その聲を耳のそばで聞いたとき、燦珠は急に男の逞しい腕が前にのびて、ぎゅつと自分の首筋に觸れるのを感じた。

闇の中に南里の眼が鋭く光つてゐた。星のかけは鬱蒼と交錯し合つた高い梢に遮られてゐるので深い闇は壁のやうに彼等の行手を塞いでゐる。——燦珠は自分の首筋を抱しめた南里の兩腕の力が次第に重く肩の上のしかゝつてくるのを感じながら、しかし、慌て、兩手をひろげて男の胸を弾け退けようとしたが、その手は力なく南里の胸の上で顫えてゐるばかりだつた。……

すべての記憶が、ほうつとして燦珠の頭の中から消えてしまつた一瞬間、全身が燃えるやうに火照つてくるのを感じた。しかし、唯それだけだつた。——今、自分の眼の前に迫つてくる危険に備えようといふ考えよりも、盲目的に男の力に身をまかせようといふ好奇心の方が彼女にとつてははるかに強かつた。たつた今、自分の心を烈しい不安の中に突き落とした黒上哈介の幻像は、もはや塵ほどにも頭の中に残つてゐなかつた。すべての過去が消えて、まったく新しい世界がひらけてくるといふ氣持が始めて男の唇に觸れようとする小娘の生々しい情感にも似た陶酔の中へぐいぐいと彼女の全身を誘ひこむのであつた。

彼女は、さらさらと伸びた南里の頬髻が自分の頬に觸れるのを感じた。すると、無意識のうちにかういふ場合に身を置いた女が、その感情のクライマックスにおいて必ず一度は男の要求を拒むであらうところの、あるか無きかの抵抗をするために軽く胸をうしろへ引きながら、——

「何を、……何をなさるの？」

それは、かすかな、今、彼女の胸に高鳴つてゐる鼓動よりもはるかに低い聲であつたが、一瞬間——

南里の腕は、そのとき、女の首筋をうしろからしつかりと抱きすくめてゐた。烈しい抱擁の數分間が過ぎた。しかし、二人は未だ離れようとしなかつた。南里は顔をあけて燦珠を見た。——脂粉のかほりがほのかに流れて闇の中に、うつとりと眼を瞑ぢた燦珠の顔が白々と美しくうかんでゐる。おれはこの女に戀してゐるらしいぞ、ミ南里は思つた。戀——戀、あゝいかに長

い間 さういふ夢のやうな陶酔を忘れてゐたことであらう。しかし彼は、自分の腕の中に身をまかせてもうすつかり理性の判断を失つてしまつてゐる女の首からそつミ手を引きながら、

「さあ——もう少し歩かう、僕のとからついてゐらつしやい！」

その聲は何時の間にか命令するやうな調子に變つてゐた。彼の胸には急に若々しい昂奮が張りみちてきたのである。細い道が窮まつて、滑らかな坂に出た。左側には杉の古木が太い幹をならべてゐたが、その下の深い熊笹をゆるがす風はしめやかな落葉のほひを溶かしてゐた。

坂をのぼつて寺の境内を通りぬけ、街路につよく高い石段の前にくるまで二人は物を言はなかつた。その石段の下り口で南里が立ちどまると燦珠も同じやうに立ちどまつた。

南里は夜か更けるまで同じ姿勢を保つたまゝぢつとして動かうともしなかつた。——彼は自分がわけもなく腹立たしくなつてきたのである。

おれは一體何をしたのか？

一つの聲が心の底から聞えてきた。するとその聲に應ずるやうに他の一つの聲が答へた。
貴様は友情を裏切つたのだ。——良心を蹂躪したのだ！

南里は眼を瞑ぢて、努めて荒川の顔を思ひうかべようとしたが、そして荒川を思ひだすことによつて自分の悖倫な行爲を鞭たうとしたが、しかし彼の頭の中に次第に明かな輪廓をとつて現はれてくるのは、不思議にも荒川克彦の顔ではなくて、全く今まで唯の一度も思ひだしたことのない仁科の顔だつた。

その顔は皮肉な笑を湛えて次第に大きくひろがつてくる。——見よその唇はうす氣味わるくにしたと動いて、さながらそれはどうだ、おれのやつたことゝ貴様のやつたことゝどれだけの相違があるのだ……言つてゐるやうに見えるではないか！

しかし、そのとき南里の心の底から、思ひがけない一つの感情がむく／＼と頭をもたげてきた。それは、友情を裏切り、良心を蹂躪した自分の行爲が、人間の生活を支配しようとしてゐる一つの不可思議な意志——見えざる運命に對する勇敢な反抗であるといふ氣持だつた。すると今まで、ちやうど線路の上を汽車が走るやうに、ある規約によつて縛られてゐた情熱が堰をやぶつて氾濫しはじめたのである。

何でもないことではないか——おれは唯荒川が一生涯かゝつてつくり上げようとする悲劇をたつた二分間で喜劇に變へてしまつたさういふだけのことだ。……彼は、さう自分の心に叫びかけながら、深い闇の中を透かすやうにして、誰に對してともなく肩をそびやかした。すると彼の眼は燃えるやうに

輝き、兩腕に張りみちた筋肉は新しくあふれてくる弾力のために生々と波うつてきた。しかし、彼の唇には未だ燦珠の頬の觸感がほのかなかほりとなつて残つてゐる。——さて、之から一體如何なるのだ、おれの生涯は？

彼は黙つて立ちあがつて部屋の中へはいると、隅の方に積み重ねてある蒲團にぐつたりとよりかかつた。静かな酔ひと昂奮との疲れが、わけもなく彼の心を快い眠りに誘ふのであつた。しかし彼は冷たい夜風の肌ざわりを、しっかりとけとめながら、うと／＼と眠はじめた。

草を積んだ荷車が一臺、轍の音を強く砂利道の上に残して斷崖の上の坂道を下つてきた。提灯の光が淡く空間にゆれてゐた。その小さな灯が坂の下へ消えてしまふと、あたりはまたひつそりとなつた。それから、しばらく経つと同じ道を坂の下の方から、ざくつざくつと大きくきれ／＼に砂利を踏みつける靴音がひゞいてきたのである。南里は不意にぞく／＼と背筋を傳つてのぼつてくる冷氣を感じて眼を醒ました。そのとき、坂をのぼつてくる靴音は、彼の家の前でばつたりとまつた。そのまゝ、しいんミなつたが、今度は急に烈しく表の格子戸をゆるがす音が聞えてきた。その音につゞいて太い銅鑼聲が唸るやうにひびいてきた。

「南里！南里！」

南里は、むく／＼と起きあがつて玄關口へ出た。空からくる星あかりを浴びて洋服を着た一人の男が格子戸によりすがつて、ちつと中を覗きこんでゐる。

「誰だ？」

「おれだよ」

格子戸の外の聲が呟くやうに答へた。南里は浅い眼りから醒めたばかりの瞳にうつるその男の顔を敷居際に立つてもう一度はつきり見定めてから、鍵を外すために土間へ下りた。

「……黒上ぢやないか、すつかり風采が變つてゐるから全く見當がつかかなかつた、それによくおれの家がわかつたな？」

「骨が折れたぞ、この家を探すのには、しかし、居てくれてよかつた、——これで留守だつたらもう二度と停車場まで戻る勇氣は無いからな」

南里が内側から格子戸をあけると、黒上はぐつたりよろけるやうにはいつてきた

「——しかし何しろ驚いた奴だな、今ごろ何かおれに用事でもあるのかい？」

「用事？」

黒上は靴の紐を解く手をやすめながら南里の方をふりかへつて。

「用事があるかつて、——冗談ぢやない、君のところ用事なんかあるもんか、今夜は偶然のめぐり合せて若い學生の一團と酒を飲んで、その中の一人の男から君の噂を聞いたんだ、それでひよつこり訪ねる氣になつたといふだけだ、何しろおほろ月夜に友情を探るといふ風流心でやつてきたんだからな」

「その學生といふのは誰れだ？」

「眼鏡をかけた若い男だつた、——名前は忘れてしまつたよ、そいつはしきりに君を讚美してゐたからね、おれも一所になつて君の高徳を讚えたよ、——あの男は人生の三百代言だつて、文學者でもなければ哲學者でもない、さうかといつて政治家でなければ會社員でもない、絶えず人生にケチをつけて運命のカスリをとつて生きてゐる男だといつてね、おれの演説は拍手喝采をうけたよ……」

黒上は部屋へはいるとすぐにごろりと様になつて裾の破れた外套を着たまゝ、疊の上に寝そべつたがしかし、ふと机の上に置いてあるウイスキーの瓶が眼にはいると飛び立つやうに起きあがつて——

「何だ、いゝものがあるね、酔ひざめの水のかはりに一杯頂戴しよう」

南里は黙つて黒上の垢ぢみた手の動くのをちつと見詰めてゐるがふと思ひ出したやうに、

「それで、如何だつた、こないだの晩は？あんまりうるさかつたから、おれも到頭、君を置きざりにしてきてしまつたが」

「うるさかつたつて、——ぢやあ今夜も何處かへ抛り出して貰はうが」

黒上はちよつと眼の色を變へて、頬の肉を痙攣的に顫はせたが、しかし、すぐに、にや〜と崩れるやうに笑ひながら、

「どうせ、おれはうるさい男さ、——しかし、南里、貴様は立派な人物になつたな、おれなんぞはもうそばへ寄りつけないよ」

彼はウイスキーを一杯ぐつこ呷つてから、またごろりと横になつて、

「……おい、そんな顔をするなよ、貴様にそんな眼で睨みつけられると、おれは顫へあがるよ」

「黒上！おれは今夜は酔つてゐないからね、貴様の都々逸に合の手を入れるわけにゆかないよ、——」

南里は妙にぎこちない胸苦しさを覺えながら言つた。彼の頭の中には燦珠の顔が沁み出るやうにうかんできたのである。それから、雑木林の中の暗い道を歩きながら思はず黒上聆介の名前を口走つたときに、頓狂な顫え聲をあけて立ちどまつた彼女の姿を……。

すると、急に、見えざる敵に怯氣を感じてゐる自分の心に反撥するやうに、悪魔的な衝動が南里の心の底から一時に燃えあがつてきた。

「一人きりでこんなところに住んで、人生を罵りながらウイスキーを飲むなんて云ふ身分に一度なつてみたいもんだな」

黒上は持前の皮肉な言葉を、もうそろ／＼酔ひの廻りかけた巻舌口調でまくし立てた。

「——ところが、そのウイスキーはね、たつた今、僕を訪ねてきた戀人が置いていつたばかりだ」

「戀人が……君に戀人があるのかい？」

「あるさ、戀は無くとも戀人はあるさ」

「ほう、——そいつはます／＼結構な身分ですな、道理で段々舌ざわりが甘くなつてきたやうだぞ

！

「おい、おい」

南里は煙草を喫ふためにマツチを擦ながら、ぢろりとうす氣味のわるい瞳を据えて言つた。

「そのウイスキーには毒が入つて居るぜ」

「毒——何の毒が、まさか愛慾の毒といふ洒落でもあるまいね」

「そいつを何杯も飲むと、君が地の底に深く埋めてきた過去の夢が眼の前に踊り出すのだ！」

「過去の夢だつて——冗談言つちやあいけない、おれ自身が過去の夢ぢやないか、まつたくおれの生存は現在とは何の関係も無いんだからな」

するに南里はぢり／＼と不安の色のかんでくる黒上の顔を、一種の快感を湛えた眼で眺めながら心の中で叫んだ。——よし、この古狸奴、今に面の皮をひきむしつてやるぞ！

しかし彼は黒上が飲みほしたグラスを自分の方へ引よせて、新しいウイスキーをつぎながら、

「ミところが、おれの現在は君の過去と大きなつながりをもつてゐるんだから、いゝか、黒上！君の

古い戀とおれの新しい戀とが何處かで結びつくところがあるさいふことを言つてゐるんだ、——も

つとはつきり言はうか？」

南里はグラスにみちたウイスキーをぐつと一息に飲みほした。

「はつきり言つてくれよ、——お前の話を聞いてゐると、おれがまるで悪事でも働いて裁判でもう

けてゐるやうな氣持だ」

「ぢやあ、言はう」と南里は眉をぴり／＼と動かしながら、

「——おれの唇は、たつた今、君の昔の戀人の唇に接吻したばかりのところだぜ、女のために

半生を棒にふらうとする君の馬鹿けたロマンチシズムをおれは一息に蹴飛ばしてしまつたのだ……

……」

南里は胸にこみあけてくる言葉を一氣に怒鳴り立てようとしたがしかし、烈しい不安と憤激のため、今にもつかみかゝらうとしてゐる黒上の憂鬱な重苦しい表情にぶつかると急に言葉を途切らせた。無気味な暗流が黙々として睨み合つてゐる二人の間を流れた。黒上の眼は極度に燃えた敵意と怒りのために、一種の青みを加えて鋭く南里の面上に輝いてゐたが、しかし、その光りは次第に鈍つて萎んだ。險は何時の間にか涙に濡れてゐた。ある感情が胸の底をえぐつてのほつてくるのをちつと壓えつけ、るやうに彼は唇を噛み眼を瞑ちて、そのまゝ首をうなだれてしまつた。數分間——彼は悲しげにうづくまつてゐたが、やがて、深い息を吐いたと思ふと、すぐに胸を張つた。彼の瘦せた右手は高くのびて南里の襟首をつかんだ。

「お、おい——南里、外へ出ろ！」

それは咽喉から出る聲ではなくて、腸から沁み出るやうな叫びだつた。

「外へ出て如何するのだ？」

南里は全身が、がた／＼と顫えてきた。

「何のためにだつて、——おい、白ばつくれるな、おれには貴様の心の底までみんなわかるぞ——」

黒上は涙聲になつてわめき立てた。彼はわれとわが言葉に新しい昂奮を覚えながら南里の襟首をつかんだ手にぐつと力を加えて、

「貴、——貴様は今になつて、お、おれを恐れてゐるぢやないか、——卑怯な奴だ、さつき玄關で會つたときの、あの高慢な面付を思ひ出して見ろ、お、おれが一人の女のために——半生を棒に振らうと振るまいと、それが、貴様に何の關係がある、自分の夢を抱きしめてゐるおれが貴様のやうな下劣な奴から輕蔑される理由は無いぞ、——馬鹿、馬鹿、馬鹿！最初會つたときから、おれは貴様の顔が氣に喰はなかつたのだ。貴様はおれに對して明かに厭な奴が來やがつたといふ顔をしたぢやないか、それなのに、何だ——親しさうな面をしゃがつて忠告じみたことをぬかしやあがる、お、おれの昔の戀人に貴様が接吻したところで、それが如何したんだ、それを正面から言ふことの出来ない卑劣さを胡魔化するために、過去の戀が如何の、ロマンチズムが如何のミ怒鳴りちらしてゐるうちに、小柄巧な貴様の頭は、おれを輕蔑することを思ひついたんだ、そして、おれがへとへとまゐるのを見すまして自分のさもししい行爲を正しく理屈づけようとしてゐるのだ、馬鹿、——人間のロマンチズムを蹴飛ばすために友人の戀人に接吻する奴が何處にある、——おれはあの女に惚れてゐると何故正面が言ふことが出来ないんだ、……よくもおれの誠實まで自分の氣持をゴマ化す道具に使やがつたな、さう言つたら、おれが泣き伏て、南里、貴様の言ふとほりだ、おれは全く馬鹿だつた、と言ふかと思

つてゐやがつたんだらう。——お氣の毒様だ、おれの頭も、酒と放浪に疲れて、痺れきつてしまつてゐるが、貴様のさもしい魂膽を見抜く位の力は残つてゐるぞ、何も彼もわかりきつてゐるやがるくせに、その上、何のためとは何だ、貴様はおれが何か無鐵砲な亂暴でもするかといふことが恐ろしいのか、おれはこのとほりの瘦腕だ、——お、おれは貴様に決闘を申込むんぢやないぞ、制裁を加えるんだ、制裁を……さあ、出る外へ、——出る！

しかし、南里は襟首をつかんだ黒上の手をふりほどかうともしなかつた。極度の怒りミ昂奮のために血走つた眼を輝かせて叫んでゐる彼の顔を見詰てゐるうちに、何時の間にか南里の心は黒上と自分との關係を忘れて、何か遠い舞臺の上で大見榮を切つてゐる人間を描き出してゐた。南里の頭の中には同じ自分でありながら、しかもまつたく異つた二つの感情が交錯してゐた。一つは、黒上の言葉に脅かされて身動きもとれなくなつてゐる自分であり、一つは、そのみすほらしい哀れな姿を烈しい冷笑をもつてぢろく〜と見据てゐるほかの自分であつた。——そして、彼の蒼ざめた顔の中にも明かにこの二つの表情が入り亂れてゐた。

「——待て、黒上、貴様は、おれを誤解してゐるんだ、手を離して先づおれの説明を聴けよ」

さう言つたのは、一方の身動きもとれなくなるほど萎縮してしまつてゐる哀れな南里玄作だつた。しかし、その言葉は、ちやうど燃えかゝつた材木に新しい油をかけるやうに、黒上の胸に波立つた昂

奮を一層強くかきたてることに終つてしまつたらしい。黒上は傲然として南里を睨みつけながら、

「おい、何だつて、——？説明するつて、貴様は自分をゴマ化した言葉をもう一度ゴマ化し直さうとするのか？」

しかし、そのとき不意に、もう一人の冷徹な南里玄作が心の底から瓢々と立ちあがつたのである。

「……制裁だつて、君はまるで法律家のやうな物の言ひかたをするぢやないか、一體、人間が人間を制裁することが出来ると思つてゐるのかね、制裁なんてふことは強者が弱者に對してだけ加えることの出来ることだ、——何故、君はもつと正直にはつきりと復讐をしゃうと言はないんだ。……女を奪はれた恨みを何故、おれに向つてぶちあけないんだ！」

しかし、黒上は正面から南里の顔を睨みつけたまゝ、物を言はなかつた。南里の襟首をつかんだ彼の腕が痙攣を起したやうに顫えてゐるが、一瞬間、彼は極度の輕蔑をこめた眼差しを南里の面上に敲きつけてから、

「——おい、南里、もう一度だけ聞くがね、君は本氣でそんなことを言つてゐるのか、たつた一言でいゝから返事をしてくれ、おれと君とは親しい友人だつた、おれたちは長い間、わかれてくらし

きたが、君は充分おれを理解してくれてゐると思つてゐた、君だけは、……南里！君だけはおれが心から甘えることを許してくれるたつた一人の友人だと思つてゐたんだ、——お、おれは君を訪ねて、こんな侮蔑を受けようとは思はなかつたぞ、南里！おれたちはこれで完全にわかれてしまはなければならぬのか、——たつた一言でいゝ、返事をしてくれ！」

その聲は次第におろ／＼とかすれて、窪んだ彼の臉は熱つほたくふくれてきたま見るうちに、南里の襟首をおさえてゐた握り拳は力なくほどけて、ぐつたりと疊に両手をついてしまった。

「南里今更、君がおれを憐む理由が何處にある。おれは哀れな男ぢやないか、そのおれを、お、おれを……」

涙が彼の蒼黒い頬の皺を傳つて流れ落ちた。しかし、黒上は咳きこむやうに言葉をつゞけて、

「お、おれが、たつた一つこの世の中に大事にしてきたものを、おれの親友だと思つた君から奪ひ去られたときの苦しさを察してくれ——お、おれは放浪者でも何でも無い、唯の甘つたるい男だ、——たつた一人の女を一生涯かゝつて惚れようとする哀れな男だ、君が接吻をしようと思つたか知れないんだ、おれはもう半分死にかゝつてゐる男だぜ、上海で、おれは何べん自殺しようと思つたか知れないんだそれを、おれはあの女に會ふために、たつた一ぺんだけ會ふために恥を忍んで戻つてきたんだ、——

君にとつて、ちよつとした氣まぐれのあそびに過ぎないことがおれにとつては死活の問題なんだぜ南里これだけ言つても未だ君はおれを輕蔑しなければ居られないのか……お、おれはもう駄目だ——」
 黒上は両手を膝の上で重ねたまま、黙禱するやうに頭を下げた。しかし、南里の眼は哀れな友人の姿をぢつと見据えたまま、其表情には少しの變化も現れなかつた。

「黒上！」と彼は低い聲で言つた。

「貴様の顔を見てゐるとまるで狐にとりつかれた人間を見てゐるやうだぞ、しつかりしろ、——もうそろそろ心の構えを立て直す時が來てゐるぞ——」

だがさういつた南里の聲は押潰されたやうにかすれ、その眼はどす黒い蒼味を湛えてゐた。

「す、すると、友情なんてふものは君にとつては土足にかけてもいいものなんだな？」
 黒上は涙に濡れた瞳をあけた。

「いゝとか悪いとかいふ問題ぢやあない、一體何故君は人間をそんなに甘く見たいんだ、——友情なんぞは十九世紀の遺物だ、自分が不幸になつたときにだけ友情にたよらうとするケチ臭い了簡は泥溝へ捨て、了へよ、十年の君の放浪生活が、こんな愚劣な友情のためにぐらつくなんて……莫迦な、

君は未だ夢を見てゐるんだ、友情などといふものはカフエーで一夜を共にした男たちが、互の嘘をか
くし合つて、さあ君のためと言つて乾盃するビールの泡みたいなものだ、おれは君を輕蔑するため
にあの女に接吻したんぢやないぞ——あの女におれは戀してゐるんだ、おれの頭の中には過去も現在
も未來もないおれは戀敵だといふ感情を隠して君と握手するほご生やさしい友情は持つてゐないから
な——あの女を間に挟んで、今日から君とおれとは敵だ、黒上！敵にならう敵に……」

南里の聲は低かつたが、しかし脅かすやうな強い調子をもつてゐた。

「すると、君と僕とはもう友人ぢやないんだな？」

「——同じことを繰返すなよ、君には未だおれの氣持が徹しないんだな、おれたちは一度はつきり
敵にならなければ、ほんたうの友情に觸れることが出来なくなつてゐるんだ——黒上、このへんでい
ゝ加減に立ち直れよ……」

黒上は南里の冷たい聲を、……その聲のかすかな響きをも聞き漏らすまいとするかのやうにちつと耳
を澄ましてゐるが、しかし、すぐに腕を組み、悄然として、そのどろんと曇つた瞳は正面の壁の上に
うすくほやけてゐる南里の影を見詰めてゐるのであつた。無氣味な沈黙が、またしても二人の間に厚
い氣流のやうに流れてきた。黒上はズボンのポケットの中から、皺くちやになつたハンカチをとりだ
し、いそいで涙をぬぐると、そのまゝ畳の上に置いてあつた帽子をとつて立ちあがり、かすかに

南里の顔をぢろりこ見たゞけで、よろ／＼と玄關口の方へ出ていつた。

「何處へゆくんだ？」

そのとき、はじめて南里の聲には異常な狼狽が現はれた。……黒上は襖の前で立ちごまつて、軽く
うしろを振り返りながら。

「歸るんだよ——おれはもう君と話をする理由が無いからな、いろいろ、おれのことを心配してく
れてありがたう、だが、もうやめて貰はう、君は大した人間だ、おれのやうな臆病な男はこんな豪壯
な大人物と交際つては居られないよ、しかし、今夜はいろ／＼なことを教へて貰つた——左様なら！」

黒上は靴を穿いてしまふと、うしろを振り返らうともしないで格子戸をあけて出ていつた。

南里の胸はどよめくやうに顫えて、彼はほとんど無意識に立ちあがつたが、しかし、何か一つの強
い力が彼をうしろへ引き戻した。そのまゝ彼は椽側に敷いてある座蒲團の上にごろりと横になつた。
きれぎれに砂利道を踏みつける黒上の靴の音がひゞいてきた。だがそれもやがてぱつたりと消えて
しまつた。

第九章

光と翳と

爽かな五月の夜風が明け放した窓から流れてくる。——新緑につつまれた深い樹立の中に高い夜空からくる半弦の月光が滲みとぼるやうに碎けてゐた。部屋の中は何とも知れずひそやかな薫にみちみち、青いうす絹を洩れる電燈の光にすらも、うきうきとする明かるさが漲つてゐた。この部屋の中に、燦珠と仁科とが丸いテーブルを挟んで向ひ合つてゐるのである。

桃色のナイト、ドレスを着て胸を露はに出してゐる燦珠の姿が今宵は妙に美しく見えた。仁科は以前とくらべると、少し頬がこけてその蒼白い顔には痛々しい色がうかんでゐたが、しかし、それは反つて彼の表情に自ら貴族的な氣品ともいふべきものを感じさせる。彼が身體を動かすことに紺碧に輝くネクタイピンの翡翠が朗かな光の綾を投げてゐた。

「それで、——わたしに何かしらうしろ暗いことでもあると仰るの？」

もう一時間もあまりも續いて進行してゐる會話に止めをさすやうな調子で燦珠が言つた。

「いや、僕があなたを批難してゐるんじゃないんですよ、僕は唯、さういふ噂がひろがつてゐるといふ事實をあなたに報告してゐるだけですよ」

「でも何だかへんにまだるつこい他人行儀な言ひ方なのね——どうせこんな仕事をしてゐれば世間

はいろ／＼な噂をするでせうよ、それを一々とりあけてるたら切りがないぢやないの？」

「いや」と仁科は高い聲で燦珠の言葉を遮つてから、

「さういふゴシップ的な風評とは違ひますよ、ことによるミかういふ噂のひろがることはあなたの将来に致命的な禍を及ぼすことになるかも知れませんがね」

「馬鹿々々しいわ、それで一體どうだといふの、あなたの仰しやるその噂といふものを総合するとわたしが袋井さんの妾にでもなつてるといふことなのね——それで、若ほんとにさうだつたらどうしたといふの？」

「それだけぢやありませんよ、最も有力な噂は、あなたと南里玄作とが深い戀愛關係に陥つてゐるといふんですよ」

「南里さんとわたしが」

燦珠は一瞬間、顔を赫らめながらいかにも驚いたやうな表情をしたが、しかし、すぐに皮肉さうな皺を唇の上によせて、

「若しさうだつたらどうなの？」

「勿論、どうでもある筈が無いですがね、するとあなたはその噂を全部肯定されるわけですね？」

仁科はわざとらしく落つてゐるが、しかしその聲は痾高い顔へを帯びてゐた。

「肯定も否定もないわ、わたしが——わたし勝手なことをするのに一々世間を憚らなければならぬわけがあるの、あなたは今夜は妙なことを仰しやるのね、たとひ世間にどんな噂が撒き散らされてゐるとしても、あなたに心配していただく必要なんか少しも無いことよ」

「さうですか、——よくわかりましたよ、ぢやあ、あなたと僕とはもうこれきりで全く關係のない人間になることにしませう」

「それは御勝手よ、最初からわたし、あなたに何の關りもないことよ」

「關りが無いつて、——おい、冗談もいゝかけんにして置くものだけ、これだけ男の誠實を蹂躪つて、その上、關りが無いといふ言葉が平氣で言へるんだな、ぢやあ、はつきり言つて置くがね、僕はこれから君に對して露骨に敵意を持つからね」

「敵意を持つたら、どうするといふの？」

「かうするのさ！」

仁科は憤然として立ちあがると同時に、その兩腕は素早く燦珠のしなやかな首筋をぎつしりと抱しめてゐた。

「何を——何をなさるの？」

燦珠は聲を顫はせながら、椅子の脊につかまつて、やつと立ちあがつたが、しかし、そのために仁科の逞しい腕はかへつて彼女の胸の上にひろがつてしきりに息がつまりさうになるのを、やつと堪えて、極度の侮蔑と憎悪とにみちた眼差しを、いきり立つてゐる仁科の顔の上に投げながら言つた。

「そんなに急に恐れなくなつていゝよ、袋井が君に要求したと同じことを要求するだけのことさ」

「袋井さんがわたしに何を要求したといふの？」

「何をだつて——、おい、白ばつくれるなよ、僕だつて子供ぢやないからね、何時か帝國ホテルの Grill で待つてゐたとき、僕がそんな思ひで君をこの部屋まで送り届けたかといふことがわかるかね

——僕はたつた一ぺんの過失のために君を責めることさへしなかつたぢやないか、いゝかね、自分の愛してゐる女が眼の前ではかの男に蹂躪されるのを黙つて見てゐる男の心が君にわかるかね？」

仁科はちやうど芝居の台詞のやうな感動的な調子でしゃべり立てた。それから、そつと押はかるやうに、燦珠の胸の鼓動を軽く指の先に感じてゐるが、しかし彼の眼には次第に蛇のやうな執拗さが現はれてきた。

「仁科さん！」と、燦珠は苦しさうな聲で呼びかけながら、

「——あなたは何か誤解してゐらつしやるのよ、不意にこんなことをなさるもんぢやないわ、もつと靜かに話が出来るぢやないの」

「靜かに話をしてゐたのを君がひとりで勝手に昂奮して來たんぢやないか、——だが、今の僕はもう靜かな氣持で話をつづけることが出来なくなつてゐるんだ！」

仁科は毒々しい情感に燃える眼を輝かせながら、ちやうど鳩の胸に爪をかけた鷲が生々しい食慾を壓えながら、ぢつと舌舐めずりをするやうに、全身を痙攣的に顫はせた。憎しみよりも怒りよりも今や彼の心を支配してゐるものは溢れるやうに殺倒してくる恍惚の感情であつた。おれはこの女を自由にすることに今こそ絶對的な能力を持つてゐるのだ！といふ氣持のために彼の頭はぼうとして、すべての制斷が消えてしまつた。

燦珠は自分の身體を抱すくめた男の手を力一ぱいはね退けやうとして、しきりに身悶えしながら烈しい呼吸をつづけてゐるが、しかし彼女の反抗が強ければ強いだけ仁科の情感は湧き立つやうに高まつてくるのであつた。燦珠の眼は男に對する敵意と輕蔑とを失つて唯、底知れぬ不安におびえながら悲しげに瞬いてゐるばかりだつた。

一瞬間、彼女は自分の胸が引きちぎれるかと思ふほど仁科の腕の力を感じた。それから、蛇が録首

をもたけて迫つてくるやうに彼女の唇を探し求めてゐる仁科の眼を、

「燦珠さん——僕は、僕はあなたを戀してゐるんです！」

思ひがけない聲が燦珠の耳の傍でひびいた。燦珠は最早抵抗する力もなかつた。窓からくる夜風が彼女の亂れた鬚髪を撫で、通つたが、そのとき無心に電燈を見詰めてゐた彼女の耳に遠く木戸の開くやうな音が聞こえた。そのまゝひつそりとなつた。そしてほとんど無意識のうちに男の身體の重壓の中に自分の身も魂も溶けてゆくやうな慌しい思ひが彼女の胸に波うつてきたのである。

3

一瞬間、燦珠の胸の底には反抗的な情熱がむら／＼と燃えあがつてきたのである。——彼女の頭は今や身をまもるといふことよりも、烈しい侮蔑に對する憤りでいつぱいになつた。深い闇を透ほして輝く灯の光りのやうに彼女は、そのとき南里玄作の眼が自分の心の一隅に輝いてゐるのを見たのである。その眼が彼女を勇氣づけた、その眼のために彼女は身を抵して仁科の暴力に反抗しなければならぬと思つたほどだ。

「何を——失禮な！」

燦珠は最後の力を全身にあつめて、仁科の腕をはね返けるために烈しく肩をゆすぶつた。その不意

の逆襲は、もうこの女を自分の思ひこぼりにすることができるといふ自信のために、すつかり心にたるみを生じてゐる仁科をすつかり狼狽させた。手をふりほどくといふよりも、新鮮な食欲に咽喉をころ／＼鳴らしてゐたこの荒鷲は彼の爪の下に身悶えしてゐる鳩の思ひがけない反抗にたち／＼となりながら慌て、身をうしろへ引いたのである。燦珠はよろけるやうに窓枠をつかんで、

「——あなたは此處にゐらつしやる理由は無いぢやないの、すぐ歸つて下さい、すぐ！」

若し、歸らなければ、自分は何時でも此處から大きい聲でわめき立てるぞ！こいふ氣勢を示しながら憤りにみちた眼でちつと仁科の顔を見詰めた。しかし仁科の顔は昂奮のために蒼ざめてゐた。絶望的な感情がそのおど／＼と顫へる瞳の中にうかんでゐた。

だが、次の瞬間、彼はちやうど頭を強く敲かれた蛇が、とぐるを巻いて居直るやうに、一種の凄味を帯びた笑ひを唇の上にかへながら

「歸るときがくれれば歸るよ、——だが、この復讐は、何時か立派にやつてみせるからね、僕には新聞記者に知り合ひもあれば、雑誌を動かす力もあるからね、君の人氣を一變させる位のことにはわけはないよ、たとえ、あの南里玄作のやうな無賴漢と關係があるといふやうな事實は、君には古くても世間の人には眼新しいからね」

「そんなことはあなたの勝手よそんなことで減じる人氣なら、少しもほしくないわ、——わたし、

もう、ちよつとでもあなたの顔を見てみると胸が悪くなることよ、さあ、すぐ歸つて下さい！」

「ほう、えらい覺悟ですね、——だが、そんなに急に嫌ひにならなくてもいいでせう、いや僕も、二度と此處へはお訪ねしないつもりであるんだから、唯、これだけは言はせて貰はう、僕は誠實を蹂躪された男が復讐のためには、どんな卑劣な手段も辭さないものだといふ事を君に教へてあげたいと思つてゐるんだ。間違えてくれては困るぜ、僕は君にちよつぴりとした情愛も持つてゐるやしないんだい、かね、それだけを覺悟の上でいくらでも君の思ひどほりのことをしたまへ！」

彼はさう言ひ終つて、もう一度燦珠の顔を睨みつけてから、わざとらしくゆつたりとした態度で書棚の上に置いてあつた帽子をとつて扉の方へ歩いていつた。そのうしろ姿を燦珠はちつと見まもつてゐるが、しかし、やつと危難を逃れたといふ感じよりも、彼女の胸には妙な會體の知れない不安が油を溶かすやうにぬる／＼と流れてきた。

仁科は扉をあけるとそのまゝうしろを振返らうともしないで、部屋の外へ出ていつた。ぱたんと強く鳴る扉の音が燦珠の苛立たしい神經にひびいてきた。すると、彼女は衝動的にテーブルの上に顔を俯せて、おろ／＼と泣きはじめた。

仁科の靴音は次第に遠ざかつていつた。テーブルの上に垂れた燦珠の髪の毛が彼女のすゝり泣きに調を合せるかのやうに軽くゆれてゐるが、しかし間もなく彼女は顔をあげた。涙に濡れた睫毛は悲しげに顫え、蒼白い頬には涙のあとがかんである。燦珠はそのまま、頬杖をついてちつと深い物思ひに沈んでしまつた。する／＼何かしら一つの烈しい衝動が地殻をやぶつてあふれてくる水のやうに彼女の胸をみたしはじめた。彼女は矢も楯も堪らなく南里玄作に會ひたくなつてきたのである。美しい回想がきれ／＼に彼女の頭をかすめる——本門寺の裏の雑木林の中の暗い小徑を歩いてゐるとき無限の哀情を湛えて闇の中に輝いてゐた南里の瞳、燃えるやうな唇——あの恍惚の瞬間をふた／＼び心の底に味はふかのやうに彼女は両手を胸にあて、眼を瞑ちた。南里の瘦せた頬を掩ふざら／＼の無精髻の感觸さえまだ生々しい傷あとのやうに残つてゐるではないか！

彼女は時計を見た。十一時である。——思ひきつて今からあの人の家へ行かうか、彼女はさう心に呟きながら立ちあがつて電燈のスイッチをひねつた。いや、ことによると、あの人がかひよつこり窓の下へやつてくるかも知れない——

電燈の消えた部屋の中はたちまち眞暗になつたが、しかしそれはほんの瞬間にしか過なかつた。

半弦の月光が深い樹立をすべつて部屋の中へ流れてくるのでほのほのとした明るさが彼女の姿をうす闇の中にくつきりと浮彫のやうに空間に透かしてゐた。うしろ壁に彼女の影が長くうね／＼と戯れながらゆれてゐるが、しかしそれは人間の影ではなくて、何かしら不思議な存在がそこへ現はれてきたかのやうであつた。

彼女は窓に凭れて、ちつと外を見た。空からくる明かるみのために、樹立をめぐる闇はところどころ濃く、ところどころうすくほやけてゐた。不意に彼女は南里が自分を抱きしめたときの烈しい陶酔をまざ／＼と眼の前に呼び起すかのやうに両手を前に伸ばして男の胸にすがりつく恰好をし乍らひとりで、くす／＼笑ひだした。

如何してあの人がこんなになつたんだらう——と、彼女は心の中に繰返した。あのうすぎたない無頼漢が好きになるなんて——？

彼女は南里がよく好んで口にする無頼漢といふ言葉は殊更強い力をこめて呟きながら、しかしそつと窓から身を引いた。そのとき、かすかな靴音がしつみりと夜の静けさの中にひびいてきたのである。彼女は窓を開き戸に両手をかけて、身構へしながら外を見た。靴音はしつとりと、だん／＼窓に近づいてくる。不思議にもそれは、左手の木戸口につゞく石畳をわたつてくるのではなくて、右手の深い植込の中を歩いてくるのであつた。

形棒ぢやないかしら——彼女はそつと身を顛はせたが、しかし七分の好奇心と三分の不安とが、その靴音の正體を見届やうといふ氣持を新しく奮ひ起したのである。その靴音は忍びやかに歩いてくるといふよりも、むしろ何かおぼ／＼とおびえながら歩いてゐるやうに思はれるではないか。彼女は急いで電燈をつけた。

枝を組みかはした雑木の若葉がかさ／＼と鳴つて、ほんやりと闇の中を見詰めてゐる燦珠の眼の前に、一人の男の姿が現はれたのである。その男はすうつと這ひよるやうに窓に近づいてきた。燦珠はしかし、不思議にもこの男の現はれたことについて何の恐れをも感じなかつた。彼女は本能的に、今眼の前に現はれた怪しむべき事實について少しの危険の豫想をも感じなかつたほどに、その靴音は悲しげにひびいてきたのである。

その男は、窓から一間ほど手前のところで立ちどまり、燦珠の顔をぢろ／＼と眺めてゐるが、やがて帽子をとつた。

半弦の月光が骸骨のやうに瘦せたその男の顔の上に碎けてゐた。雑木林の闇の中から抜け出したその男は蒼くすみとほつた月光の中を深い陰翳を刻んで近づいてきたのである。彼は窓の下に立つても

う一度燦珠の顔を見上げた。それからおづ／＼と唇をふるわせながら、――

「覚えてるますか、僕を？」

「あなたを、――わたし知らないわ、しかし、あなたはわたしを御存じなの？」

燦珠は自分がどうしてこんなに落ちついた態度で物を言ふことができるのかまるで自分にもわからなかつた。それは生きてゐる人間と口をきいてゐるといふよりも、寧ろ空想の中に描かれた夢幻的な情景がそのまゝ眼の前に現はれてきたといふ氣がするのであつた。

「僕は、無論知つてゐますよ、あなたに會ふためにやつてきたんですからね」

その聲は妙にとけ／＼しく顫えてゐるではないか。燦珠は急に胸を敲かれたやうにどきつとして、この不可思議な男の顔の上に彼女の視線を集中した。一瞬間――それはほんの一瞬間にしか過ぎなかつたが、しかし彼女の心はたちまち古い記憶の中へ突落された。そのまゝ頭がくらく／＼つとして烈しい目まひを感じたが、彼女は窓枠を握つた両手に力を入れることによつて、やつと自分の身體を支へることができた。

「あなたは……？」

かすかな聲でさう言つてから、しかし燦珠は自分の顔に定着してしまつたやうに瞬きもしないで見詰めてゐる二つの瞳――その瞳の中から電光の如くに遊つてくるすみとほつた感情のために大衆に驚

「僕はね、黒上ですよ、黒上――覚えてゐますか、黒上陸介ですよ」

おだやかな聲で其男が言つた。燦珠は思はず両手をひろげた。そして、かすかな叫び聲をあげたがしかし、その聲はやつと咽喉を通つただけでかすれるやうに消えていつた。

「――僕は昔の名前であなたを呼ぶよりも、やつぱり燦珠さんと言ひませう、ねえ、燦珠さん！かうやつて此處に立つてあなたの顔を眺めてゐると、始めて會つたころのあなたの姿をおもひ出しますよ、まつたく、あなたは昔と少しも變らない」

「わたし、何だかまるで夢のやうなのね、あなたは一體何處からこの庭の中へ入つてゐらしたの、わたし少しも氣がつかなかつたわ」

燦珠はそわ／＼とした調子で言つた。若五月の微風と、月光と、そして彼女の胸に新しい戀愛が芽をふいてゐなかつたら、おそらくこの不可思議な情景の中に無雑作に自分の心を溶かしこんでゆくことは出来なかつたであらう。だが、彼女は何の不安も恐れをも感じなかつた。昔の戀人が、――十年前に消えるやうに姿をかくしてしまつたところの昔の戀人が何の警告もなしに窓の下に現はれたといふ不可思議についても少しの疑ひも感じなかつたほどに。……

「僕はもう一時間も前からこの植込みの中へ忍びこんで、あなたに話しかける隙をうかづつてゐたんですよ何だか先刻はお客様のやうでしたね」

燦珠はぎよつとした。さう言えば彼女は仁科と話をしてゐるときに裏木戸のあくやうな音のしたことをおもひだしたのである、しかし、それにしても、このうすぎたない不可思議な人物が果して十年前に、最初に唇をゆるしたあの黒上哈介であらうか？

人間は極度の驚きに當面するとその昂奮の静まるまでは、まるで何事も起らなかつたやうな静けさを感じる瞬間があるものだ。燦珠は、自分がかうやつて恋をはさんで昔の戀人と話しあつてゐるといふことが何かすつと昔から約束された出來事でもあるやうな氣がするのであつた。

「ぢやあ、何故早く、わたしをお呼びにならないの？」

眼の前に現はれた現實に疑ひをはさむよりも以上に、十年前の思ひ出がひたくと彼女の心を洗ひはじめた。しかし、月光を斜に浴びて立つてゐる男は前と同じ位置に、前と同じ姿勢のまゝで、燦珠の顔から視線を外らさうとしなかつた。彼はかすかに頬を顫はせただけで、少しの感動も交えない靜かな聲で言つた。

「僕は待つてゐたんですよ、あなたがひとりきりになるのを、そして、あなたがこの窓の前に立つて僕の方を見てくれるのを——僕はたつた五分間、あなたと昔のまゝの氣持で話をするために此處へ忍んできたんですよ」

「でも、わたし、いろ／＼な話をしたいのよ、向ふの方から廻つて部屋へ入つていらつしやらない？」

「いや、——僕はそのいろ／＼な話を聞きたくないですよ、僕は唯このまゝ風のやうにあなたの前から姿を消してしまえばいゝんですからね」

彼はさう言ひながら、始めて燦珠の顔に定着してゐた視線を外らしてうしろを振りかへつた。すると右肩を少し怒らした心持ち猫背のうしろ姿が不意に燦珠の思ひ出の中へ鮮かな輪廓を描いてうつし出された。——やつぱり、さうだわ、この人は——と、彼女は新しい感動をもつて自分の心に叫びかけた。すると、すた／＼にひき裂かれた紙きれが、ひとりで元の位置につなぎ合はされて昔のまゝに繪姿がうかびあがるやうに、彼女の心は十年前の美しい夢の中を彷徨ひはじめた。

「黒上さん、——わたし、昔のままの氣持で話が出るのよ。だから——ね」

燦珠は少女のやうな若々しい瞳を据えて、それはちやうど舞臺の上に立つてゐるときと同じやうな氣持で、無限の感懷をゆたかな表情に残して言つた。

「でもね、僕はあなたの話を聞いたところで仕方がないですよ、今の僕にはあなたの幸福を祈る力もなければ、あなたの不幸を防ぐ力もないですからね、——それに、僕は昔の名前であなたをお呼びする気持になれません、燦珠さん、これでもうおわかれにしませう左様なら！」

黒上聆介は深い愛情を湛えた眼で、悲しさにまぢくくと燦珠を見詰めてから、帽子を無雑作にかぶつて、大股に植込の中に、葉末を洩れる蒼白い月光の反射をうけて、帯のやうにうねうねとうかんでゐる敷石傳ひに歩いていった。燦珠は茫然としてそのうしろ姿を見送りながら窓にもたれてゐたが一瞬間、彼女は始めてわれに返つたやうにぢろくくと四邊を見廻した。恐ろしさがどつと胸にあふれてきたのである。

遠くの方でしきりに犬の吠える聲が聞えた。夜はもう十二時を過ぎて、まばらな雲が月の光を掩つてゐた。ひやりとくる夜風をふくよかな胸に受けながら、燦珠は過去の思ひ出の中に心を涵してゐたが、しかし昂奮が次第に静まるにつれて、新しい疑ひが泉のやうに湧いてきた。——十年前に姿をくらましてしまつたあの人が、ひよつこり自分の前に姿を現はすといふことが、假りにあり得ることであるとしても、あの人の顔はまるで昔の顔を失つてしまつてゐるではないか！

彼女は、あの幽霊のやうな蒼ざめた顔が恐ろしいほど冷たい表情を湛えて、雑木林の闇の中から出てきたときの姿を思ひうかべた。それにしても、あの人は何の爲にあんなにいそくと歸つてしまつたのであらう？ ことによるとわたしは知らぬ間に気が狂ひかけてゐるのではあるまい？ わたしがあの人だと思つたのは何かの錯覚で、わたしは唯、まぼろしの姿を見、まぼろしの聲を聞いただけなのであるまいか。いや、しかし、あの人の眼は昔のやうに深い愛情をかくして長い間、瞬きもしないでぢつとわたしを見詰めてゐた。してみると、あの人は惨めな放浪生活の果に自分といふものをすつかり擦滅らしてしまつたのだ。そして最後にわたしの事を思ひだしてひよつこり訪ねてきたのだ。——

燦珠は、そつと窓をはなれて、机の抽出をあけた。そして奥の方から手さぐりに黒塗の小さい文箱をとりだしたのである。その古い文箱をあけると、彼女のしなやかな指は何か恐ろしいものにもでも觸れるやうに戦いてゐた。中にはいつてゐたのは一束の手紙だつたが、彼女はそれを手にとらうともしないで、底の方からとりだしたのは手ざわりのかたい厚い臺紙に貼つてある一枚の寫眞だつた。紺がすりの着物を着て、烏打帽をかぶつた青年の半身像が、生々と彼女の視野の中にひろがつてきた。それは十年前の黒上聆介だつた。額が広く、光線の關係で眼は少し窪んで見えるけれども、しかしぢつと彼女の顔を見詰めてゐるその思ひ詰めた表情は、姿とかたちこそ變れ、たつた今、彼女の眼の前に現はれた見すほらしい幽霊のやうな男の顔とすつかり同じではないか？

彼女は寫眞の裏をひつくりかえして見た。赤茶けた裏の紙には、特徴のある右肩の下つた字でこの寫眞と、黒上が最後に彼女に残していつた言葉が、怨々たる情懷をたゞんで、さながら生けるものゝやうにうかんでゐる。――

左様なら、わたしの戀人よ、わたしはこのやうにお前を愛してゐるのに、いや愛すれば愛するはど、お前から別れてゆかなければならないのだ。――お前こそはわたしがこの世に求めたつた一人の久遠の女性であるといふことがどんなにわたしにとつて悲しいことであらうか。わたしはお前を墮落させるに忍びないのだ。わたしの手がひとたび觸れたら、わたしの唇がひとたび觸れたら、お前はその瞬間から久遠の女性としての姿を見失つしまふのだ。わたしは生くる日の終るまで、お前の美しい姿を抱きしめてゐたい永久に穢れざるお前の姿を。――左様なら、わたしの戀人よ、戀に瘦せたこの悲しき姿をお前への最後の贈り物にしてわたしは日本を去らう。左様なら。燦珠はそれを一氣に讀み終ると深い溜息を吐いて、兩手を胸にあてたまゝ、ちつと眼を瞑じたのである。

その翌る日の早曉であつた。黒上階外はふら／＼する足どりで、戸山ヶ原の船場の裏の草深い道

を歩いてゐた。酔ひのために充血した瞳をあけて、彼は次第に明るさを加へてくる黎明の空を見上げた。うすい朝霧が仄々と彼の視野を埋めて、遠い丘をめぐる櫟林の梢が夢のやうにうかんでゐる。二つの丘を劃る細長い窪地には半圓を描いて電車線路が長々と走つてゐた。――

彼は懐かしげに四邊を見廻はした。だが、しかし、十年前の記憶をとどめてゐるものは何一つ無いではないか！何もかも變つてしまつた、何もかも……、と彼は心の中で嘯きながら、しかし同じやうな足どりで、ふら／＼と歩いていつた。彼の頭の中には、自分の今歩いてゐる同じ小徑を、肩を擦りよせながら歩いてゆく二人の男女の姿がぼつかりとうかびあがつたのである。舊式の烏打帽をかぶつて制服を着た丈の高い二十前後の青年と、黒い瞳の明るく冴えた十六七の少女と。

それは、十年前の幻想の中から抜け出した彼自身の姿であつた。彼も若く燦珠も若かつた。木犀のほひのほかに流れてくる宵闇を二人は、かすかな隙もないほどに、しつとりと溶解合つた心と心とをつなぎ合せて、櫟林の丘をめぐる草道を、夜露に足の濡れるのも厭はずに彷徨つゞけた。――そのころは森は高く空を遮つて、丘の一端に立つと、高原のうねりは遠く無限に向つてひろがつてゐるかのやうであつたが、しかし今は雑木林は伐りさかれて、人家の灯が樹間の闇を縫つてゐるのである。燦珠のやわらかな弾力にあふれた肩が、彼の腕に觸れるごとに筋肉はしきりに戦いて、そのまゝ女の身體を力一ぱい抱きしめて、息の根もとまるほどに、きつかりと結んだ唇に接吻したい衝動を感

じながらも、言ひ知れぬ懼れのためにそつと身を退いて、お互に口にするこのできない胸の惱みを苛立たしい眼で見交すときの烈しい愛撫の感情を古い記憶の中によび起しながら、彼は冷たく澄んだ朝の大気を吸ひこんだ。しかし、彼の姿はやがて窪地へ下る坂道へ消えていった。

それからおよそ一時間の後である、五時半頃、百人町の方角から線路見廻りのために、流行唄をうたひながら歩いてきた一人の工夫が、眞つ蒼になつて踏切番の小屋に駆けこんできたのである。――

「おい、起きろ、起きろ、大變だ！」

彼はしどろもどろの聲で、うすい毛布を羽織つて眠つてゐる踏切番を敲き起した。

「何だ、急に大きな聲を出して如何したんだ？」

「如何したどころぢやねえやちよつと来て見ろ！」

彼はきよとんと眼をあいてゐる踏切番の手を握つて引きづるやうに外へ出た。そのとき黎明の静寂をやぶつて、同じ方向にならんでゐる列車線路の上を貨物列車が烈しい轢音を殘して走り過ぎた。線路工夫は先に立つて駆けるやうにだら／＼の坂道をのぼつていつたが、一町ばかり歩いてから、おづおづと下の方を見廻しながら立ちどまつた。

「見ろ！あれだ、あれだ、――あのひどい死に態は如何だ！」

踏切番は、思はず頓狂な聲をあけて身を竦くませた。見よ、彼等の立つてゐるところから一間ばかり離れてゐる崖の下の線路の上には血の塊のやうな手首だけがころがつてゐるではないか！血に滲んだワイシャツが線路にへばりついてゐる。二三間先の線路の上には屍骸の胴だけが壓し潰されたやうになつてころがつてゐる。

頭や首は何處にあるのかまるでわからなかつたが、しかし線路の兩側に新しく積あけた砂利がところどころに小さな穴を掘つてゐるところから察すると、轢死者は洋服を着たまゝで一二間ほど引づられていつたものらしい。

「こいつはひどいな、――これぢやあ、飛びこんだんぢやなくて、まるで車輪にしがみついたといふ恰好ぢやないか？」と踏切番は不安さうに眼をしばだゝきながらさう言つて慌てゝうしろを振り返つた。しかし、彼のうしろに腕を拱いて立つてゐる線路工夫の顔は凄慘を極めた情景を繰返して見るこゝによつて、まったく血の氣を失つてゐるのであつた。

「お、おれはちよつと交番まで走つてくるからな！」

線路工夫はやつとそれだけの言葉を低い聲で言った。

「ぢやあ、おれも行かう、こんなところに一人で見張りをさせられちやあ生命が縮まるぜ、だが朝つばらから厭なものを見たな、この様子ぢやあ、まだ身體の半分は機關車の車輪にはさまれて遠くまで引ずつてゆかれたらしいぞ！」

二人は肩をならべて、斷崖のやうな削り立つた土手を逃げるやうにのぼつていった。それから一時間の後である。巡查と群衆がこの凄惨な場面をとりかこんでひしめき騒いでゐる。櫟林の梢からふるひ落される朝の光りが線路にひつかゝつてべしやんこに歪んでゐる埃にまみれた古いソフト帽の上にわびしく流れてゐた。檢視が済んで屍體が綺麗に片づけられたのはそれから二三時間経つてからであつたが、しかしこの男の死因についての手懸かりはまるで得られなかつた。唯、覺悟の自殺といふことだけは大體、豫想がついたとしても、しかしそれ以上に自殺の原因を探る方法はまるで無かつた。遺書があるといふわけではなく、車輪に踏み碎かれて、すつかり原形を止めてゐない顔についてこの男の人相を鑑定する方法も今はまつたく失はれてしまつてゐるといつてよかつた。

かうして、この惨劇の謎は、哀れな男の屍體と、もに地の底深く埋められてしまつたのである。彼の肉體が車輪に引きづられて、むごたらしく踏み碎かれた場所はすつかり掃除が終つて初夏の太陽は高く晴れた空から清々しい光を落してゐた。まるですべてのことが忘れ去られてしまつたかのやうに

……新しい省線電車は幾回となく同じ場所をすべり、踏切番の男の顔にはかすかな不安の翳すらも残つてゐなかつた。

その翌日の新聞は、ほとんど人の眼にとまるかとまらないほぎの六號活字でこの男の死を報じた。唯身元不詳の男が鐵道自殺を遂げたといふだけのことを。

燦珠はその夜、二時を過ぎてから床に就いたが少しも寝つかれなかつた。

第十章

矢

車

草

東京地方裁判所、第×號法廷の前には朝から人集りがしてゐた。―數日前から新聞の社會面を賑はしてゐた、殺人事件に關する公判がひらかれることになつてゐたのである。暗い廊下の隅にある細長いベンチのはしに同じ新聞社のマークをつけた二人の男がならんで腰をかけて、しきりに低い聲で話をしてゐる。その横には、これも傍聴にやつてきたらしい帝大の制服を着てソフト帽をかぶつた鼻の大きい男が、ゆつたりと敷島をくゆらしながら、彼の正面の壁にかゝつてゐる公判の日程を書いた告知板を讀んでゐた。そのほか、雑多な恰好をした人々が十人あまり、暗い廊下を忍びやかに往つたり來たりしてゐるのであつた。

「―兎に角、今日の公判だけは金を出しても傍聴するだけの價値があるね、僕は犯人が未決監に護送されるときにちよつと顔だけ見たがね、いや、もう、とても悲痛な顔だ、あの顔を見たゞけでも何かへんなものを感じないではゐられないよ、あの男の一生を書きあげたら、すばらしい小説になるだらう」

紺セルの洋服を来た四十近い新聞記者が、その同僚らしい三十前後の何處か華奢な感じのする若い男の肩を撫でながら言つた。

「いや、ところがね、日本の小説家にはね、あんな深刻な人生を描き得る男は先づるさうもないね——下手くそな小説なんぞ讀むよりも豫審調書でも讀んでる方が氣が利いてるからね」

「だが、かういふ事件をむざ／＼と味も素つ氣もない新聞記事にして書きとばすことは少し惜しい氣がするが、誰か、かういふ材料で大小説を書き上げようかいふ野心を持つ文學者はあるかないかね」

「——そのうち何處かの雑誌で大衆文學として連載されるかも知れないね、だけど、この中から藝術的な感激を喚び起して劃期的な大文學をつくりあけるほどの熱情は、生活に喘ぎながらこせ／＼してゐる今の文學者の中から見出すわけにはゆくまいね」

「僕は必ずしもさうは思はんよ」と、紺セルの男は胸にぶら下げた金鎖を弄びながら、

「いやに氣焔を吐くね、文壇の落伍者といふものは、得て文壇を罵倒したがるものださうだからね君などは先づその典型かも知れないな」

「莫迦な」と若い男は少しきまりわるさうに苦笑しながら、しかし巧な手つきで吸ひさしの敷島を彼の靴の横にある痰壺の中へ投げ落してから、

「——僕は落伍したんぢやなくて、僕の方で見切りをつけたんだ、しかし、そんなことは如何でもいいがね、未だ來ないかな、あの少女は？」

「おい、いゝかけんにしろよ、裁判所は待合ぢやないぞ——どうもまるで、さかりのついた犬のやう

だ、こんな悲痛な事件を前にしてよくそんな餘裕を示すことができるね」

「事件は事件、戀愛は戀愛さ——僕はあの女が、犯人の娘だといふことを知つてから、ます／＼志を堅くしたね、今日は證人として召喚されるといふことを辯護士から聞いたものだから、わざ／＼君

の隨行を志願して來たんぢやないか」

若い男は、少し昂奮した面持でさう言つてから動悸をはかるかのやうに慌て、胸に手をあてた。二人の話聲が次第に高まつてゆくのにつつと耳を澄ましてゐた大學生は犯人の娘といふ言葉が聞こえるに、急に緊張した表情をして若い新聞記者の横顔を眺めた。一瞬間廊下のざわめきが崩れて、人々の視線が入口に通ずる曲り角に集中した。そこには鼠色のセルの單衣を着た、四十恰好の眼鏡をかけた女が悄然として立つてゐる。

「あれは誰れだい？」若い新聞記者が同僚の肩を敲いた。

「さあ、よくわからないね、——しかし、何だか見たことのある顔だな」

紺セルの脊廣服の男は、唇を尖らせて、ちつと、今階段を上つてきたばかりの女の顔を見詰めてゐるが、しかし、急に思ひ出したやうに膝を敲いた。

「あれは君、犯人の昔の妻君さ、あれがまたこの悲劇に一役を演ずる俳優だからね、尤も犯人にしたところで、あの女を舞臺に登すつもりはまったくなかつたらしいが到頭さういふことになつてしまつたんだ。僕は新聞の報道以上に詳しい事情を知つてゐるがね、犯人は、自分には系累が無いといふことで押通さうとしてゐたらしいんだが、最初嫌疑者として留置されたときに、同じ部屋に浮浪罪か何かで留置されてゐた男にこつそり自分の女房に會ひにきてくれるやうに傳言することを頼んだといふんだ」

「何だつて、そんなことを頼んだらう、その男が何をするかといふ事がわからなかつたのかな」
 「それは君、誰だつて、さういふ氣持になるだらうぢやないか、いゝかね、いよゝつかまつてもう一生涯明るみへ出ることができないといふことがわかつてみれば、十年間もわかれてゐた女房の顔をたつた一べんでいゝから見たいといふ氣持になるのは、あたり前だらうぢやないか」

「それにしても、よくわかつたね、その女房が住んでゐる家といふのが」
 「だからさ、——まるで無鐵砲に犯人の頼みを受け入れた浮浪罪の男の努力はするぶん大したものだつたらうと思ふね、それがまた不思議な男でね、警視廳ではその男の行方を探してゐるんださうだが、それきり何處へ行つたのかまるでわからないんだ——何しろ事件が複雑を極めてゐるからね、かういふ影のやうな人物が一人や二人は登場する必要があるのかも知れないが……」

「ほう、そいつは面白いな、もう少し事件が展開してくるとその男がまたひよつこり出てくるんじゃないかな」

「さうかも知れない」と、紺セルの男は勿體さうにチヨツキの隠しから時計を出してちらりと眺めてから

「もう、そろ／＼始まる時刻だぜ、ほかの社の男は誰も未だ來てゐないやうだね、何しろこの事件の報道だけはわが社の社會部は墮然として一頭地を抜いてゐるからな——つまりおれの手柄さ、新聞社はこの際おれを優遇する義務が充分あると思ふね」

「しかし、今までの君の怠慢がわが社の威信を傷つけたことを考ると……」

「おい、止せよ」と紺セルの男は、ちよつと、しかめつ面をして見せてから、筋肉のゆたかに張りきつた兩肩をゆすぶつて笑ひだした。

若い男は、ぢろ／＼と四邊を見廻してから、同僚の耳に口をよせて、

「——あの女がこつちを見てゐるぜ、何か蟲が知らせるんじゃないかな？」

「いや、知つてゐるんだ、おれは一度訪問したことがあるもんだからね。先刻からちよつと話しかけようと思つてゐたんだが、しかしこんな場所で、寫眞を撮つたり話しかけたりする職業意識を發揮するには相手があまり氣の毒でね……この前、會つたときにも、あの女は寫眞だけは決して出してく

れるなといつて泣くやうに頼むんだ、さうなると、こつちにも人情があるからね、しかし、それでも娘の寫真だけは到頭ほかのところから探し出してきたが」

「君にもそんな優しいところがあるのかね。それはさうと少女は如何したんだらう？」

若い男が不安さうに立ちあがつたとき、静かな人波をわけて近づいてきた二人の廷丁が法廷の扉の前に立つて鍵を外した。

高い窓越しに五月の空が輝いてゐた。法廷の中はしいんとして、裁判長の聲だけが、もうほとんど空席のなくなつてゐる傍聴席の上をすべつて、うしろの壁にぶつかり、その反響が四周の壁を傳つて消えていつた。

痩せた裁判長は、もう五十を過ぎてゐるであらう。半白の山羊髯が、その貧相な顔に、辛ふじてかすかな威厳を残してはゐるが、しかし、眼鏡越しにちろちろと、臺の上の調書から顔をあげて、ちやうど蛇が蛙を覗ふやうに、おどろくと顫えてゐる犯人の眼を正面からぐつと睨みつけてゐる冷たい瞳は、流石に十數年を法律ととも暮らしてきた人を思はせる。裁判長の席に起立してゐる青い獄服を着た安達龍平は悲しさうに首をうなだれてゐた。彼の聲は低く、その上にかすれてゐるので、傍聴席の

うしろの方ゐる人にはよく聞きとれなかつた。しかし、それだけに、何か非常にしんみりとした感じが、ぢりぢりと傍聴人の興味を咬りたてるのであつた。

型どほりの訊問が終ると、裁判長は馴れた手つきで調書をひろけながら犯行の状態についての微細な事實を一々聞き訊してから、急に體を前に乗り出すやうにして、

「――、それで被告は、その兇行の前に少しも良心の呵責を感じなかつたのだな」

その聲は、人間の胸の底に深く疊みこまれてゐる秘密を嗅ぎつけようとするかのやうであつた。しかし犯人は首をちよつと傾けながら裁判長の顔を見上げて、

「そのときは不思議に感じませんでした」こゝろ、ほそほそとした聲で言つた。

「しかし」と、裁判長は聲を張りあげて、

「被告の申立によれば、この犯行は發作的のものではなくて充分計畫的に行はれたものであるといふことであるが、しかし被告は犯行を決心してから一度も躊躇したことはないか？」

「ありません」と安達は明瞭りした聲で答へた。それから彼は感慨があふれるやうに胸に迫つてくるのをやつと壓えるかのやうに唇を噛みしめた。

「ほう、――するとお前は平気で殺人が出来るんだね」

裁判長は軽い笑ひを安達の顔の上に浴せかけながら、

「——ぢやあ自分の行爲が正しいといふことを確信してやつたわけだな」
 「いや」と、安達龍平は眉をぴりぴりと顫はせた。

「わたしはそのことについて長い間考へてゐました、もつと正直に言へば、十年前にその女と戀愛關係に陥るときから他日きつとこの女を殺すやうになるだらうといふことを考へてゐました。それはど、わたしは女のために苦しみ惱んで來たのです、その悩みは女の方も同じことです、つまり、わたしはわたくしが女を殺すか、女がわたしを殺すか、どつちか二つの道かを選ばなければならなくなつてゐたのです」

彼はもう半、涙聲になつて早口にしゃべりだしたが、しかし、裁判長はその言葉の終るのも俟たないで被告の言葉を遮つた。

「そんな餘計なことを言ふ必要はない。お前はわたしの訊問に答へればいゝのだから、自分の行爲を正しいと思つたか如何かと聞いてゐるのだ、いゝか！」

「判事様——よくわかつてゐます、しかし、この事件は長い間のわたしの心理經過を説明しないと……」

「それは訊問を俟つて答へるのだ、今、そんなことを聽いてゐるんぢやないんだから」

「それなら、申上げます——わたしは自分の行爲を正しいなぞとは夢にも思ひませんでした」

「ぢやあ今は如何だ——今は？」

裁判長は山羊髯をひねつた。

「今は——と仰ると？」

安達龍平は、證人席の方をちらりと眺めながら言つたが、しかしその瞬間彼の心はまったく平定を失つてしまつたのである。彼の眼は證人席の椅子によりかゝつて、身動きもせずに兩手を膝の上に結合はせてゐる四十前後の女の顔を見た。眼鏡越しに輝く瞳は深い悲しみの翳に彩られ、さながらそれは絶望と不安と祈願とを籠めてたよりなく放心の中を彷徨つてゐるやうに見える。

「今といふのは現在のことだ、——自分の犯行を顧みて如何いふ考へが起るか。被告は相當に知識のある人間だから、自分の行爲に對する判断を持たぬといふ筈はあるまい」

「いや、それなら、——」と、安達龍平は眼がくらくらつとして危く昏倒しさうになるのをやつと抑えつけて、

「少しも、少しもわたしは自分の犯行を悔ひてはるません、わたしは力の及ぶかぎりのことをしたのです、だから、いよく女を殺してはうと決心したときには、わたしは思はずほつとしました、

十年間背負つてきた重荷をなげ捨て、やつと自分の肩が軽くなるやうな気がしたのです」

しかし、裁判長は冷厳な態度で被告の言葉の途切れるのをまつて犯行の順序、状態について、一つ訊問をはじめたのである。被告の言葉が豫審廷の申立とどの位の相違があるかといふことを探るために彼の眼は非常な早やさで被告の顔と調書との間を往つたり來たりしてゐた。しかし、さういふ訊問になると被告の聲は妙に溢りがちになつて、傍聴席にゐる人たちの耳にはほとんど聞えなかつた形式的な訊問が一應終りを告げたのはもう正午に近いころだつた。

「それで、——この事件について特に申立てたいといふことは無いか？」

裁判長は被告の顔を睨んでさう言つたが、しかし、安達龍平は軽く唇を顫はせたゞけで物を言はなかつた。裁判長はすぐに横の席にゐる検事の顔に視線をうつしながら軽い會釋をして席に即いた。でつぷりと肥つた検事は軽く咳ばらひをしながら重さうに身體をもたけた。彼は簡單ではあるが明晰な語調で、この犯行が發作的なものではなく明かに計畫的のものであること、従つて情狀の酌量すべき點は少しもなく、社會道徳の上からするも、人道的な立場からするも、この種類の犯行が極刑に値するものであることを述べた。彼は法律そのものゝやうな冷やかな態度で死罪を求刑して、再びどつかりと椅子に腰をおろした。未だやつと大學を卒業したばかりにしか見えぬ三十前後の若い辯護士が彼の次ぎに立ちあがつた。ちやうど晴れの舞臺に立つて演説でもするやうな態度で、確信と情熱とを眉宇に閃かせながら押高い聲でしゃべりはじめた。

「——この事件について、經過の審議に挺り入る前に、裁判長の注意を促したいことがあります。それは被告の顔です、わたしは敢て申し上げます、生れて今日までこのやうに精魂共に疲れた顔を見たことがありません、若彫刻家がこの顔を彫あけることがあつたら彼は立ちどころに「生命に疲れた人」とか「運命に疲れた人」とかいふ名前をつけるに違ひない、——この人の顔をたつた一ぺんでも見た人は恐らく決して忘れることは無いだらうと思ひます、それほど、この人は戦つてきたのです、そして戦ひ疲れたのです」

若い辯護士は此處で言葉を途切らせて、自分の言葉の効果を見定めるかのやうに傍聴席を見廻したのである。

二ばん目の列の端しにならんで腰かけてゐる新聞記者の、若い方が紺セルの口髯の男の方に胸をすりよせて、

「——仲々やつてゐるね、すばらしく文學的な辯護士だな、こいつ昨夜ドストエフスキーの「罪と罰」でも讀んで、すつかり暗記してきたんぢやないかな」と、低い聲で囁いた。

紺セルの男はたしなめるやうな眼で相手の顔を睨みつけながら、
 「止せよ、——あの熱情一點張りのところが買ひどころだ、當代の辯護士には惜いよ」ときれぐ
 の聲で言つてから、自分の言葉を胡魔化するために軽く咳ばらひをした。そのとき不意に、すつとうし
 ろにある入口の扉があいた。静かな足どりで俯むきがちに入つてきたのは十八九に見える女學生風の
 少女だつた。

それは、いふまでもなく安達美和子だつた。彼女は入つてくるとすぐに傍聴席の一ばんうしろの列
 に身をひそめるやうに腰をおろした。誰も彼女の入つてきたことに気がつかなかつた。若い辯護士の
 眼が傍聴席の頭の波を越えてちらつと彼女の顔の上を閃いたが、しかし、辯護士はすぐ視線を正面に
 外らして、しやべりつゞけた。

「——検事は被告の行爲の中に少しも情状を酌量すべき餘地が無いと言はれるが、それは法律に對
 する解釋を根柢から誤つてゐるものと思ひます、第一に、被告が妻子扶養の義務を放棄して十年間、
 放縱な生活を續けてきたことが道徳上の罪惡であるといふ判定にいたつては、あまりにも被告の心理
 的苦悶を無視したものである、十年前被告は上海に安達洋行の名前で貿易商を經營してゐたことは豫
 審調書の示すごとくであるが、しかし當時被告の家庭には自己名義による數萬圓の財産があつた、そ
 の個人的財産を以てすれば充分妻子が一生涯の生活を支えることができると思ひます、故に被告が精

神的に妻子の生活に打撃を與えたことが假りに事實であるとしても物質的には、それだけの財産の使
 途を妻子の自由に任せたとはいふことだけでも、間接に扶養の義務を果してゐるものと解釋して差支な
 い。精神上的の問題については、結果において被告の不道徳は充分咎めらるべき理由があるとしても、
 被告の心理をしてかくのごとき状態に導いた動機には充分酌量を加ふべき餘地があると思ひます、第
 一に、被告がいかに人格的に圓滿な人間であつたかといふことは被告の舊友ならびに、彼の爲めに精
 神的な打撃を與へられたところの家族の人たちもこれを證明してゐるばかりでなく、豫審廷の取調に
 おいて自己の罪状を少しも隠蔽する跡の見えなかつたことを以てするも被告の人格に曇りのないこと
 がわかると思ひます。唯、悲しむべきことは被告が痛々しいほどに弱い性格の持主であつたといふこ
 とです、性格の弱い人間は屢々運命の偶然に支配せられる、被告もまたその一人であつた、——十年
 前、被告は商用のために旅行する必要に迫られた、當時の被告の回想によれば、その旅行も半ば支那
 の奥地に入つて、娘のために土産を買ひ整えることが目的であつたのである、然るに數日の後、津浦
 線において被告の乗合せた列車が深更に及んで臨城附近を通過中土匪の一團によつて襲はれたといふ
 ことはいかなる偶然であらうか、あの聴くも忌はしい臨城事件については裁判長も記憶して居られる
 ことと思ひます。土匪の一團が急行列車に向つて一斉射撃を行ひ、そのために列車は進行の自由を失
 つてしまつたのです——若い辯護士の聲は次第にどつしりとした重みを加えてきた。

美和子は辯護士の説明を聴きながらも、まるで夢を見てゐるやうな氣持だつた。眼の前に、青い囚人服を着た哀れな父のうしろ姿が見え、その横にちつと首をうなだれてゐる母の、前屈みになつた肩が、かすかに顫えてゐるのは涙を堪えてゐるためであらうか、そのしよんほりと腰かけてゐる姿が、幾つかの列をうづめてゐる傍聴人の重なりあつた肩のすき間から、はつきりと見えるのに美和子にはそれが自分の身の上に係はりのあることだとは如何しても思はれないのであつた。よく調子のとれた抑揚の烈しい辯護士の聲は、何か遠くの方からひびいてくる音樂のやうに彼女の耳にすべりこんできたのである。

「——そこで此際最も考ふべきことは」と、若い辯護士は聲を張りあげながら、

「考ふべきことは、被告安達龍平と、彼によつて惨殺されたところの石塚菊江との二人だけがこの列車に乗合せて日本人であるといふ點であります、彼等は素より最初から知り合つた間柄ではない偶然に同じ列車の、しかも隣合つたベンチに席をとることになつたのである——右を見ても左を向いても異邦人ばかりゐる中に同國人同志が互に親しく語り合ふといふことは當然のことです、被害者石塚菊江は數奇の運命に弄ばれた女であつて當時二十五歳であつたが、しかし、單身支那へ渡つてきた

といふだけで彼女がいかに勝氣な女であるかといふことがわかると思ひます。被告、安達龍平の語るるところによれば、彼女はそのとき自分の身の上を安達に打ちあけたのである、つまり彼女は深い戀愛關係にある男を慕つて上海へやつてきたのであるがしかし上海航行の途上、不幸にも彼女の乗合せた船が暴風雨のために惱まされ、烈しい動搖の爲に彼女は船酔ひに襲はれた、そのとき乗合せた一人の青年紳士が、親切らしく装ほつて彼女を介抱してくれたのが原因で、彼女は一人旅の心細さと、ふとした心の迷ひから、その青年紳士に心をゆるす間柄になつてしまつたのであるが、しかし奚くんぞ知らん、その男は婦女誘拐を職業としてゐる人間であつて、船が上海の淮山碼頭に着くと同時に彼女は城内附近にある支那人經營の宿屋に拉し去られ、漢口にゐる日本人某の妾として引渡されることになつたのである。かういふ境遇に投げ出された彼が捨鉢な氣持になるのは當然です、半年の後、彼女は主人の家に使はれてゐた雇ひ人某とも、謀し合せて數千圓を着服して上海に遁れ、聽て情人ともわかれることになつて昔の戀人の行方を探してゐるが、遂に見出すことが出来なかつた、爾來被害者の生活は流轉變轉を極めて當時に及んでゐるのであるが、彼女の毒婦的性格は彼女の罪ではなくて正に境遇の然らしめるところである——」

辯護士は此處までしやべつて一息入れるために兩手を胸の上に組合せて考え込むやうな様子をしてゐるが、しかし、そのとき退席さうに生欠伸を嚙ころしながら頬杖をついてゐた裁判長が、やつと一

つの機会を得たかのやうに低い聲で、

「一寸注意しますがね、なるべく時間の儉約をするために事實の説明は簡單にして辯論に移つていたよきたい」と言つた。

「いや檢事の解釋があまりに事實を無視してゐるので、事實を繰返してゐるのですよ、これから辯論にうつります」

若い辯護士は、熱辯の腰を折られて。思はずほうつと顔を赭らめた。

7

辯護士は乾いた唇を唾液で濡らしながら、言葉をつとけた。

「——それで、被告安達龍平が、被害者の身の上話を聞いて同情のために心を動かされてゐるときあの凶變が起つたといふことがこの事件の解釋にとつて最も重要な點であると思ひます、彼等はほかの外國人の旅客と共に土匪にかこまれて山塞に拉致されたのである、かういふ生活の中においては人間は明日の生命を信する力を失つてゐる、言はゞ役等は無人島に漂着して蠻人の監視の下に生活してゐるやうなものであつて、最早道德的な判断をもつて生活を律する餘裕がないのである——そこで、この山塞の中の生活が縁となつて二人の關係が一種不可解な感情の下に成立したといふことを理解

しなければならぬ、この不可解なる戀愛關係は彼等が生きて山塞を解放された後においてはいよいよ複雑に展開してきた、これは當然のことです、二人は終生離れることのできないやうな破目に陥つてしまつたのである。そこで、すべての問題の發生は此處にあると、わたしは考へる、安達龍平は女の毒婦的な性格の強さに負けてする／＼と引づられてゆくよりほかに仕方がなくなつたのである——」
彼が此處までしやべつてきたとき、證人席にゐた美和子の母は、胸にこみあけてくる感情を、抑えきる力を失つてわれ知らずハンカチをつかんだ両手で顔を掩つてしまつた。若い辯護士は自分の熱辯が思ひがけない感動を與えたことに急に自信を得たらしく、ふたゝびゆつたりと落ちついた語調に返つて、

「檢事は被告の犯行のみを問題とされるやうであるが、しかしこの事件は被告の性格と運命を考慮に入れなければ決して正しい解釋に到達することができないと思ひます」

彼れはさういふ前提を置いてから、今度は簡條的に檢事の論告に對して一々反駁を加へはじめた。そして最後に彼がこの事件が當然執行猶豫たるべきものであるといふ決論を下すまでには一時間近くかゝつた。彼が着席すると裁判長は食事の時間を急ぐために、眼の前にひろげてある厚ほつたい調書をばつたりとちた。それから彼は判決の期日を協定してから急いで閉廷を宣告しやうとしたが、しかしそのとき黙々として立つてゐた安達龍平が不意に悲痛な聲をふりしほつて叫びだしたのである。

「判事様、一言被告の希望を述べさせていたゞきたいのです、唯今、まことに御親切な辯護が御座いました、しかし、わたしは最早全く生きる力を失つた人間で御座います、わたしの望みは唯一日も早く死にたいことです、さうぞ、わたしを一日も早く死刑にして下さいませう」

さう言つてから、あとはひとりごとのやうに口の中で呟いていたが、しかし被判長は、ごろり無感情な冷やかな眼で被告の顔を見たゞけでいそぐと立ちあがつた。裁判官が退廷してしまふと安達龍平は嚴重な監視の下に手錠を締められて法廷の外へ曳かれていつた。美和子は父の姿が今にも倒れさうによる／＼と自分のうしろを通りすぎてゆくと、慌て、前に立ち塞がらうとしたが、しかし彼女の小さい身體は巡查の逞しい腕によつて軽く弾かれてしまつた。傍聴席は、うしろの一角からざわ／＼と崩れてきた。そのざわめきを透して、何處か遠くの方から午砲の鳴る音が聞こえた。初夏の午後の空は爽かに晴れて、高い窓越しに太陽の反射をうけた白い雲の影が落ちてゐた。――

父を乗せた囚人自動車は、滑らかなアスファルトの街路をすべつていつた。群衆は、消えてゆく轍の音に悄然として耳をすましてゐる二人を残して散りつくしてゐた。

「お母さん」と、美和子はほんやりとして何時までも立つてゐる母のうしろから呼びかけた。

「――日比谷公園の中へ入つて見ない？、一休みしてから、わたしお店へ行つてくるわ」

美和子は公園の鐵柵をかこむ若々しい緑の若葉を眩しさうに眺めながら、さう言つたが、しかし母はハンカチで額を抑えて悲しげに唇を顫はせた。

「美和子――わたしたちは何といふ不幸な身の上になつてしまつたらうね、わたし、お前が氣の毒でならないのよ」

「何でもないのよ、こんなこと、お母さんもあんまり心配なさらない方がいゝわ、わたしお母さんのためにどんなことでもするわよ、これからすつかり新しく建て直すんですもの、心配することなんか少しもなくつてよ」

新緑の輝かしい小徑を歩きながら、義和子は近頃、頬の肉の目立つて衰へた母の横顔を見上げた

「でもね、何時までもお前をあんなところに通はせるかと思ふとわたしはね」

「そんなこと、わたし平氣よ、あんな空氣の中にもたつて、わたし少しも墮落しないことよ、なまじつか會社の事務員なんかになるより、あそこにいる方がいろ／＼な人間の裏がよくわかつて面白いくらゐのものよ」

二人は何時の間にか深い樹立の中の道を歩いてゐた。樹間をわたる五月の風は若葉のかほりを溶かし、徑の盡きたところに、強い陽さしをうけて、きら／＼と輝いてゐる池の一角が見える。噴水は空

間に美しい虹を描いて霧のやうに飛び散つてゐた。

池のふちの藤棚の下のベンチはもう夏の装ほひを凝らした若い男女で埋まつてゐたが、しかし、二人は人に顔を見られるのをおそれるやうに、俯むきがちに歩いていつた。ときく、母は物を言ひかけやうとしては慌て、視線を外らした。眼と眼が二人の心の底に潜んでゐる感情を結びつけた。それは言葉に現はすことのできないほごかすかに、しかし沁々と二人の胸の中に深い愛情を溶かしこんだ。それから二人は廣場を突つ切つて音楽堂の横に出た。折柄、一臺の飛行機が、高くプロペラの響きを残して湖面のやうに澄んだ蒼空をすべつていつた。

美和子は日比谷の電車交叉點の前で、巢鴨行の電車で歸つてゆく母を見送つてから、數寄屋橋の方角へ歩いていつた。

彼女が、エプロンをつけた女給姿になつてカフェー、ナイルに現はれたのは、それから一時間の後であつた。階下の廣間には未だ數人の客が散りちりにテーブルを占めてゐるばかりだつたが、彼女が往來に近い窓の下の自分の受持場所の方へ歩いてゆくと、そのときスタンドの前で、カクテルを飲んでゐた黒い眼鏡をかけた男が彼女の姿をみるとすぐにひよいとスタンドをはなれて彼女のテーブルに近づいてきた。

その男は美和子の顔を見るとすぐに帽子をとつた。——その馬鹿丁寧なしぬけの振舞に彼女は思はずきつとして肩をすくめた。しかし、その男の朗かな微笑がすぐに彼女の狼狽へた心を救ひあげたのである。

「あなたは安達美和子さんでせう？」と、彼は深い親しみのこもつた落つきのある聲で言つた。

「わたし……を、わたしをあなたは御存じなの？」

慌て、呟くやうに言つた彼女の顔をその男は愉快さうに見上げて

「いや、何度も見かけたことがあるといふだけですわね」

「でも、わたし何だかよく」と言ひかけて彼女は不安さうに瞳を輝かした。すると、その男は、右手をあげて軽くうち消す眞似をしながら、

「しかし、東京ぢやないんですよ、それにあなたは無論御存じぢやない——僕があなたを見たといふだけのことですからね」

「ぢやあ、何處で御座いますの？」

「上海ですよ、それもねちよつと瞥見したといふだけのことですよ」

彼はポケットの中からマドロスパイプをとりだして指の尖で弄びながら言った。

「でも、わたしが此處にゐるといふことが如何しておわかりになつて？」

「それは……」と言ひかけて、その男は意味あり氣な表情をして、磊落さうに笑ひながら、

「——僕は一つの使命を帯びて來たんですからね、あなたの動靜を探る位のことには朝飯前ですよ」

「使命と仰しやると？」

「重大な使命ですよ——多分あなたは僕のためにシャンパン位は抜く義務がありさうですね、僕は

戀の使命を帯びた飛脚ですからね」

彼はさう言ひながら上着の内ポケットをさぐつて厚つほつ封書を取りだした。

「たしかに、あなたに渡しますよ、これが如何いふ手紙で誰から送られたものかといふことは説明

する必要は無いでせう、——さあこれで僕の役目はすんだわけだから失敬ませう」

その男は帽子をとつて立ちあがつた。一瞬間、美和子の顔はこの意外な出來事に對する驚きのため

にひきつゝたやうに緊張したがしかし美しく澄んだ瞳には次第に言ひ知れぬ感謝があふれてきた。

「——あなたはどなたですの？」

彼女はやつとこれだけの言葉を顛へ聲で言つた。

「僕ですか、——僕は北野一郎といふ男です、大へん忙しい身體ですからね、今日はこれで失敬し

ます」

彼は無雜作に帽子をかぶつて、ふたゝびスタンドの方へゆつたりとした足どりで歩いてゐつた。美

和子は茫然として突つ立つたまま、その男が勘定を拂つて出てゆくうしろ姿を見まもつてゐるが、しか

し急に烈しい感動のためにどつと胸が波うつてきたのである。彼女は一刻も早くその手紙を讀みたい

といふ氣持に驅られながら、幾度びとなく深い溜息をついた。彼女の頭の中には、もうわかれて半年

近くにもなる荒川克彦の顔がくるくると旋廻するやうに動きはじめた。すると眼がしらが急に熱つほ

たくなつてひとりで涙がにちんできた。始めて手紙をうけとつたといふ喜びよりも、遠く離れて暮

してゐる戀人の姿が深い悲しみの霧を透してまざ／＼と現はれて來たのである。

「——何をほんやり考へてゐるの、いい人が出來たといふわけかね」

そのとき、うしろから思ひがけない聲がひゞいて彼の手が軽く彼女の肩に觸れた。驚いて振向くと

二三度自分のテーブルで見覚えのある四十前後の、目に一癢ある會社員風の紳士が、にや／＼笑ひな

がら立つてゐる。

「ねえ君——今日は少し話があるんだよ」

彼は酒に火照つた顔のふちに皺をよせながら言つた。それから壁に背を向けてぐつたりと椅子に落つてからチン・カクテルを命じた。やがて美和子が運んできたグラスを彼は急いで手にとりながら低い聲で、

「ほんたうに、君——話があるんだよ、君の前途に光明を與へようといふ話だ、まあ聞き給へ、實は僕は今日君のお父さんの事件の傍聴に行つたわけさ」と、言つてから、くるりとうしろを振向いた彼はひとわたり周囲のテーブルに氣を配りながら、鼠の隙を窺ふ猫のやうに、賤しい情感を柔和な目にかくして、

「——僕は思はず貰ひ泣きをしたよ、君のために一肌脱がうといふ氣になつたね、改めて君に話をするがね、僕は何よりも君のために良い辯護士を世話しようと思つてゐるんだ、まつたく、あゝいふ事件は辯護士の良いか悪いかといふことが一番先決問題だからね、——あゝいふ風な辯護の仕方では駄目だよ、あんなにがん／＼怒鳴つたところで裁判官の心證を害するばかりだからね」

「ぢやあ、ずつと聞いてゐらしたのね？」

「いや、途中で退場したが、しかし僕の友人に、あゝいふ事件に馴れてゐる男があるからね、その男を君に紹介することにしよう、僕は今此處から電話をかけて先方の都合を聞き合せてみるから——丸ノ内の一九三四番を呼びだしてくれたまへよ」

「え、——でも、そんなことをしてはいたゞいぢや悪いわ」

「悪いことなんかあるもんか、——人生意氣に感ずさ、僕は君の意氣に感じたからこそかういふ力瘤を入れてゐるんぢやないか、そんなことは少しも心配することはないさ、早速一九三四番へかけて先生は御在宅ですかといつて聞くんだ」

彼はかう言つてから、美和子の表情の中に迷惑さうな感じがちらと閃くのを見てみると、すぐに、應揚に笑ひながら

「——僕だつて、自分から言ふのもへんだが關東信託の笹川と言へば少しは人に知られた男だからね、自分の名譽にかけたつて出鱈目を言つてゐるんぢやないよ」

「そんな風に考へないわよ、——でも何だか悪いわ、わたしのことでそんなに心配してはいたゞいぢやあ……」

二人が、かういふ話をひそ／＼とつゞけてゐる間に、ちやうどそのとき植込のかけの入口の扉に近いテーブルに陣きつてゐた一團の常連の間に高い笑ひ聲が起つて、しきりに面白さうな歡談が進行してゐた。——電燈が點ると、水をうけた八ツ手の葉が生々と明るいはかけの中に輝きだした。テーブルの上にならんでゐるブランデーのグラスは幾度びとなく取替へられて、夜が次第に近づいてきた。テーブルのまん中の大きな花瓶には、温室咲きのカーネーション、アネモネ、ペコニア、シネラリ

ア等々の花が美しい彩りを見せて給みあつてゐた。——その端の方におよそ、これ等のゆたかな色彩とは調合のない、一莖の矢車草が挿してあつた。べしやんこのソフトをあみだにかぶつた撫で肩の瘦せた男が、テーブルをかこむ仲間の顔を見わたしながら、

「——どうだい、諸君、僕がこの花束の中でいかに矢車草を愛するかといふことを説明しよう！」

とそのときしきりに電話をかけてゐる美和子のうしろ姿を眺めながら言つた。

その男は、さう言ひかけて慌て、帽子をとつた。長い髪が額に掩ひかゝるのをうるさうにかきあげながら彼はテーブルの間を往來してゐる女給の顔を眺めて一人一人品評をやりだした。それから彼は女の精神美が今や銀座のカフェーの何處からも消えてゆきつゝあることをしきりに詠嘆しながら

「銀座はわれ／＼のやうなデレッタントの來るところぢやなくなつた——ねえ君、このけば／＼しい色彩の中で、清楚な矢車草がいかに不調和に見えるかといふことを考へ給へ、カフェーの空氣は急流のやうな高速度のテンポで變つてきた、美しい女なんか、もし假りにゐるゝしたところでもそんなものに判断を加へてゐる餘裕はない味増も糞もいつしよくだ、だからさ、僕はかう豫言するね、あの愛すべき矢車草も半年を出でずして、きつとこの潮のやうに爛り立てる空氣の中で墮落してゆくに相違ないといふことを……」

「それは君の時代おくれのセンチメンタリズムだ」と、先刻からバットを立て續けに喫つてゐた、顔にそばかすの多い男が高い聲で叫んだ。

「——例へばだね、君はこの花瓶を埋めてゐるいろ／＼な花の一つ一つを選びわけようとする、これはシネリア、これはカーネーションといった風にね——いゝかね、ところが、おれたちには一つ一つの花の名前なんか如何でもいいんだ、この中から一つや二つの花をむしりとつたところで問題ぢやあない、おれたちはさの女からでも、欲しいだけの戀愛を物差で計つて賣つて貰へばそれでいゝんだからな、義理人情の精神主義なんか一昨日來いだ、女もまたそれでいゝ、——カフェーへ來てブラトニッククラブを説く馬鹿者に禍あれだ、美しさは女の墮落する姿の中にもあるさ、假りに、かういふ空氣の中で若さを滅ぼしてゆく女の末路が悲惨であるとしたところで……」

「しかし、君、僕がデレッタントであるといふことは必ずしも時代おくれだといふ理田にはならんよ、われ／＼は、かういふ高速度の時代に生きながら、しかもゆるやかなロマンチズムの霞を喰はうとしてゐるんぢやないか！」

「だからさ、——だからこそ君はカフェーの仙人になるよりほかに仕方がないのさ、僕は銀座で僕たちがゆつくり酒の呑めるのも、もう餘り長いことではあるまいと思ふな」

さういふ議論は際涯もなくつゞいていった。

關東信託の笹川と名乗る中年の紳士は、美和子が電話口へ呼び出した相手としきりに話をしてゐたが、やがて話がすんでテーブルへ戻つてくると、「今夜會ふ約束をしたからそのときくれぐれも君のお父さんの一件を頼みこんでみる」といふ言葉を残して出ていった。時間が経つにつれて美和子は妙に胸騒ぎを感じてきた。——法廷で見た父のうしろ姿、涙に濡れた母の顔、それから若い辯護士の熱情にみちた言葉……等、等、等、今日半日のきれぎれの記憶が頭の底にからみついてきたのである。彼女は帯の間にはさんだ克彦の手紙に何べんとなくそつと手を觸れてみた。すると、その厚ほたい封書の感觸が夢みるやうなほのかなおもひでを運んできた。

夜が更けて、家へ歸る巢鴨行の電車の中で美和子は到頭その手紙の封を切つた。それは三枚の原稿用紙に細かいペン字でぎつしりと書き詰められたものであつたが、しかしその手紙をひろげた瞬間、回想が一時にとつとあふれてきて今にも聲をあけて泣き出しさうな氣持になつてきた。彼女はそのまま手紙を握りしめた。電車が水道橋にさしかゝつたとき一人の男が忙がしさうに飛び乗つた。その男は美和子の前に來て吊皮にぶら下つた。

「おや——」

その男は美和子の顔を見ると驚いたやうに聲をあけた。

それはつい數時間前にカフェーナイルの階下の廣間で會つたばかりの「關東信託」の笹川だつた。

——彼は前よりも一層酔つてゐるらしく、頬の色には毒々しい赤味が加はり、瞳はうす氣味わるくどろんと澄んでゐた。

「ほう、——これは偶然だね、ちやうどよかつた、先刻電話をかけた友人と今まで話しこんぢやつてね、それも話が非常にうまく進行したもんだから、明日あたりそのことをあんなのところへ知らせに行つてやらうと思つてゐたんだ、それにね、——先方に話しこんでみるとちやとあんなのを知つてゐるといふわけさ、あんなのためなら一肌も二肌も脱がうといふことになつてね」

彼は吊皮にぶら下つて、身體を前後にゆすぶりながら喚くやうな聲で言つたがしかし黙つてうつむいてゐる美和子の顔を見ると急に前屈みになつて

「どうしたの、——あんたは？、泣いてゐるね、何かまたお父さんのことでも考へ出したんぢやないかね、それともほかに悲しいことでもあるのかな？」

すると美和子は熟柿くさい息を避けるために慌て、ハンカチで口を掩ひながら

「何でもありません、——でもそんなにわたしのことを心配していたゞいちや悪いわ」

「良いも悪いも無いさ、もうかうなつたら乗りかゝつた船だからね——だから、何よりも近いうちに一度その人に會つていろ／＼話をする必要があると思ふ、場所と時間はこつちでとりきめて置くから」

「でも、一度家へ歸つてお母さんに話してみないと……」

「お母さんに、——なるほどね、それもいゝさ、しかし、こんな話は出来るだけ早く決りをつける方がいゝからな」

電車は知らぬ間に春日町を過ぎて白山の方角に向つて走つてゐた。笹川は小聲で端唄のやうなものを唄ひながら、しかしとき／＼色つほくたるんだ視線を慎ましうにうつむいてゐる美和子の横顔の上に投じた。

「次ぎは指ヶ谷町——白山下」

車掌の叫ぶ太い聲がうしろに聞えると笹川はわれに返つたやうに吊皮から手を離して、

「ぢやあ、——僕は用事があるから、此處で失敬しますよ、その話は明日ゆつくりするからね」

彼はかう言ひながら、ひよいと身を引くとたんに膝の上にひろけてゐる美和子の手の中に一枚の十圓紙幣を握らせた。それから、何気ない素振りりで彼女の耳に口をよせて、

「これは僕の好意だからね、——遠慮しないでうけとつてくれ給へよ」

彼はそのまゝ車掌臺の方へ歩いて行つた。そのうしろ姿を眺めながら美和子は妙に胸がむかついてくるのを感じた。若／＼に乗客がゐるなかつたら彼女は十圓紙幣を足元に敲きつけてしまつたであらう。それほど不潔な穢らはしい氣持の中で美和子は烈しい侮辱を感じないではゐられなかつた。その感じは、しかし白山下へ笹川が降りてしまつてから一層高まつて來た。巢鴨の終點に着くまでその昂奮は續いてゐた。終點附近の店はすつかり戸をとぢてゐるのでひつそりとした街は夜更けの無氣味さにつままれてゐた。彼女が電車を降りて二三歩歩き出すと、そのとき電柱のかけに立つて煙草をすつてゐた洋服姿の二人の男が顔を見合せてにやりと笑つた。同じやうな烏打帽をゆがめてかぶつた一見不良青年らしい感じであるがしかし一人が合圖するやうに吸ひさしの煙草をひよいと路上に投げ棄て、すた／＼と先に歩きだした。

道は白く月光に輝いてゐた。しいんと静まつた街通りを一町ほゞ歩いてから高い石垣にはさまれた暗い横町を右に曲つたときあとから蹤いてきた烏打帽の青年が大股に歩いて急に美和子を追ひ越した。「ねえ、君、——君はナイルのお光さんでせう？」

その聲に美和子はときつとして二三歩後へ退いた。

「さうだらう、——？」

闇の中に男の顔が威嚇するやうに光つた。その瞬間、彼女は全身が硬直したやうになつて恐ろしさのために兩足が立ちすくんでしまつた。

「顔えなくつたつていゝぜ、——何も君の生命を貰ひたいといふんぢやないからね、どうだい、紅茶でも飲みたいと思ふんだが交際つてくれないかな？」

「でも、わたし、もう歸らなかりやならないんですもの」

美和子はおろ／＼聲でさう言ひながら慌てゝうしろを振り返つた。若し逃げる事ができるなら今のうちだといふ氣がしたのである。道が小さいカーブを描いて石垣の盡きるところに街の明りが落ちてゐる。その曲り角に一人の男の姿が見えた。すると彼女はほつとして急に勇氣づいてきた。しかし鳥打帽の青年は、せゝら笑ひを唇の上にかべたまゝ、悠然として新しい煙草の火を點けながら、——

「歸つたつて家は直ぐだらう。いゝぢやないか、少し位」

「でも」と美和子はまた、うしろの方に氣を配りながら言つたが、しかし不思議にも街角に立つてゐる男はちつとこつちの方を見てゐるだけで歩いてくる様子はなかつた。それは立ちどまつてゐるといふよりも、むしろ見張りをしてゐるといふ感じだつた。

「ぢやあ、すまねえが、おれたちに少し金を借してくれねえかな——少しあればいゝよ」

「お金——？」

「さうさ、無いとは言はせねえぜ何しろあんなところに棒のやうに突つ立つて君の來るのを待つてゐるだけでも並大抵ぢやないからな」

その男は靴の踵で、堅い土をふみつけながらにやりと笑つた。そのとき、美和子は自分の、袂の中に先刻笹川から貰つた十圓紙幣のあることに氣がついた。するとほとんど衝動的に十圓紙幣を握つた彼女の白い右手は顫えながらぐつと前にのびてゐた。

「これ、——これ差上げるわ」

男は急いで皺くちやの紙幣をうけとると闇の中がちつとすかして見てから、

「いや、これは濟まねえな、釣りをあけたいんだが何しろ持ち合せが無いからね、それにしてもこんなにおそく歸るのは危険だぜ、ついでに、——いやお禮の代りに家まで送つてあげようか？」

「いゝのよ、わたし一人の方が」と、美和子はやつと口の中で呟くやうに言つて、やつとその男の前を通りぬけた。

「ぢやあ、——左様なら、おれたちもこんなことはしたくないんだがね、悪く思はないでくれよ」
酒臭い息とゝもに「けーつ」と、痰を吐き捨て、相棒の待つてゐる街角の方へ歩いていつた。一人になると急に荒涼としたうそ寒さが彼女の胸にはびこつてきた。家へ歸ると母が眠さうな目をして格

子戸をあけてくれた。彼女は黙つてその前を通りすぎて、寢室兼用の茶の間へはいつて火鉢の前へ坐るとすぐに克彦の手紙を読みはじめた。ぐつたりと落ちついたせいか急に張りきつた力がぬけて悲しさがどつとこみあけてきた。

「どうしたの？何か變つたことでもあつたのかい」と、母は寢巻姿のまゝ、蒲團によりかゝつて心配さうに聲を顫はせた。

「お母さん、——何でもないのでわたし今日は、いろいろなことがあつたの、それから北野さんといふ人がね、荒川さんの手紙を持ってきてくれたのよ」

「荒川さんといふと」

母はちよつと考へこむやうに小首をかたむけてから、

「上海で暮してゐる人ね。——ぢやああの人はもう歸つたと見えるんだね」

「さうぢやないのよ、——あの人が上海から日本へ歸るお友達に手紙をこつづけたのよ」

美和子はそつと懐ろの中へしまひこんだ荒川の手紙を出して見せた。母の顔には淋しさうな微笑がうかんだ。彼女はそれとなく娘の戀の相手であることを氣づいてゐたところの若い小説家の顔をはつ

きり思ひだしたのである。すると娘の幸福に對する豫感がかすかに彼女の頭をかすめた。しかし、その感情を押しやくすために彼女はくると美和子に背を向けて、

「ぢやあ、お母さんは少しやすんでゐるからね、お前も手紙を読んでしまつたら早くおやすみなさいよ、——お腹が空いたら、その茶菓子の中に駄菓子を買つてあるからね」

その母の聲には答へないで、美和子は荒川克彦の手紙をもう一度最初から読みはじめた。

美和子よ、わたしの愛する美和子よ、あなたと別れてからもう半年あまりになるのに、わたしは一本の手紙も書かなかつた。わたしの運命とあなたの運命とがぎつしりと結びついてゐることを知つてゐるからだ。あなたは何時もわたしの胸の底に美しい瞳を輝かして坐つてゐる。わたしたちは二人の人間ではなくて、もうまつたく一つのものになつてしまつてゐるのだ、しかし、美和子よ、わたしの生活は轉々として移り變つた。わたしは乞食のやうな放浪者になつて揚子江岸をぶらついた。秦淮河畔になまめく緑燈の、灯かけを慕ふ羽虫のやうに、酒を追うて暮してきたのです。半年の間に私はすつかり變つてしまつた。若わたしがああなたの前に現はれたとしてもきつと昔のおもかけを探し出すことはできない。——わたしは今日、南京の街で古い友人である共産黨員の北野といふ男に會つたのです。その男とあなたとは多少の因縁がある、わたしが上海へゆく船の中で北野から託された秘密書類を北野が上海で捕縛されたときに、こつそり書類のはいつた白い封筒の上にあなた

の名宛を書いてわたしの宿に踏みこんできた刑事の目をごまかしたといふことを何時だつたか、お話ししたことがあるでせう、その北野です、わたしたちは戀人のやうに抱あつて潜々と泣いたので、古い南京の街は戦亂の餘燼を蒙つて古典的な美しさが古壁のやうに壊れてしまひました、わたしは久しぶりで北野と二人で秦淮河畔の旗亭にのほり老酒の盃をかたむけながら沁々とあなたのこと、を思ひだした。そして手紙を書く氣持になつたのです、月光が波に砕けてゐます、河畔をめぐり赤い灯かけの家々から咽び泣くやうな胡弓の哀音が聞えてきます、あなたは今ごろ何をされてゐられるだらう——わたしは數日前、邦字新聞を讀んであなたのお父さんの公判の開かれたことを知つたのです、わたしの美和子よ、今のわたしは昔のわたしではない、——あなたの心を傷つける惡魔のたくらみをわたしの強い腕は必ず拂ひのけてみせます、あなたとわたしとは併にあるのだ、わたしがこの手紙を書いてゐるテーブルのそばで北野が酒に酔つて唄つてゐます、娼女は知らず亡國の恨み……わたしは其聲に耳を澄ましたながら、蒼白い月光の中にあなたのまほろしを探し求める。

美和子は此處まで讀むと、急にうつ伏したまゝ聲をあけて泣きだした。

美和子は袂の端でそつと涙をぬぐつてから手紙を讀みつゞけた。

——美和子よ、わたしは長い間苦しんできたのだ、今こそわたしはあなたに一つの秘密をうちあけやう、わたしは失戀の殘骸を埋めるために上海へやつてきたのだ、わたしは生命を賭けて戀してゐた女から裏切られたのです、女を殺す勇氣もなく自分の脳天にピストルをうちこむこともできず身も魂も疲れはてゝのたうち廻つてゐる男の姿をわたしは過去の記憶の中にあり／＼と探し求めることができない、——わたしは自分の姿を群集の中に見失つてしまふために喘ぎ喘ぎ生きてきたのだ、美和子よ、これがわたしの過去に残してきた一つの秘密です、わたしはこの事を幾度びあなたにうち明けやうとして躊躇したか知れない、ずつと前に月明館の四階の部屋でわたしは影に脅かされる男の話をしたことがある、わたしは長い間、わたしは魂に巢喰ふ影のごとき惡靈と戦つてきたのだ、しかし、わたしは今ま一つ過去の鎖を断ちきることができたといふ喜びをあなたに告げることができなのです、わたしの心は惡夢から醒めたやうな清々しさにみだされてゐる、——わたしは今始めてあなたを愛するといふことを運命の前に傲然として叫ぶことができる、美和子よわたしの美和子よ、相距る千里の遠きにあるもあなたのまほろしは常にわたしの胸の中に呼吸してゐる、わたしはふたゝび日本へ歸るかも知れないし、歸らないかも知れないが、しかしそんなことは如何でもいゝ、月明館の四階であなたがわたしの前に示してくれた熱情はわたしの生命の終るまでわたしの胸にダイヤモンドの如く輝いてゐるであらう、わたしは人生の放浪者だ、埃で白く染つ

てゐる黒いソフト帽と、色のすつかり褪めた紺セルの洋服と、それから一本の万年筆と、これだけがわたしの財産だ、わたしは蒼天の下にあなたの幻像を抱いて旅をつゞける、それでは、さよなら美和子よ、——わたしが手紙を書いているので北野がすつかり退屈してゐます、川波が窓の下に静かな音を立て、流れてゐます、北野はしきりに老酒の盃をかたむけて柄にもなく昔の戀を呂律の廻らない口調でわたしに話してきかせるので革命家にもそんなセンチメンタリズムがあるのかといふと彼は冗談を言つちやいけないと言ひながら、わたしの万年筆をひつたくつて、こんなへたくそな歌を書いて見せるのです、——秋風の舊都の街の辻に立ちてわかれしが長のわかれとなりしか——去年の秋の戦亂のために彼の戀してゐた教坊の女が行方不明になつてしまつたのです、それにしてもこの歌はまるで流行唄だねといつてひやかすと、彼は昂然として銅鑼聲を張りあけて「琵琶行」の朗吟をはじめましたこの北野とも明日の朝は別れなければならぬのです、それでは、さよなら美和子よ、——あなたの夢が何時までも幸福であるやうに。

荒川克彦

美和子様

読み終つてから美和子はしばらくの間、茫然として火鉢にもたれてゐた。久しぶりで手にした戀人の手紙も虚ろになつた彼女の心を充たしてはくれなかつた。——わたしはこんな遺瀨ない思ひをしで待つてゐるのに、あの人はわたしのところへ歸らうとしてはくれないのだ。——母はもうぐつすり眠つてしまつたと見えて、かすかな鼻が聞こえる。鈍い電燈の灯かけが瘦せこけた寝顔の上にとよりなくゆれてゐた。

第十一章

蘇州の夢

荒川克彦は「老蘇臺旅館」の一室に、ゆるやかな水の流れを聞きながら眼を醒ました、前の晩、寝るときに河に向つた窓をあけ放したまゝで眠つてしまつた、めか、曉闇の大氣をすべつてくる風が冷たかつた。彼はしばらく寝臺の上に仰向きになつて、とりとめのない空想に耽つてゐた。——

半年あまりになる漂泊の旅を彼は無心に頭の中に描き出したのである。その夢のやうな思ひ出は壁にゆらぐ影のやうにかすかに彼の頭の中を通りすぎていつた。彼はそれからまた、うとくと軽い眠りに落ちた。二度目に眼が醒めたときは、爽かな朝の光りが窓ガラスの上に流れてゐた。もう七時を過ぎたであらう、狭い運河を隔ててすぐ前に大きい茶館が見える。二階の廣間は朝の客で埋まつてゐるらしく聲高な話聲が、清冽な流れの音を透して聞こえてきた。茶館の厨房からのほつてゐる白い湯気が屋根を掩ふ深い緑の中に溶けてそれは雨後の山をかこむ雲のやうに見えた。

窓から首をのばすと水邊の杭に小さい客船がつないであり、その軸の方で年とつた支那の女が脊を曲けて米を磨いでゐる。

「お早う！」

不意に横の方から思ひがけない日本語が響いてきたので慌て、ふりむくと隣室の窓に色の黒いちよ

び髯の生えた一人の日本人が、彼と同じやうに窓から首をつきだしてしきりに大きい手を振つてゐる

「君は昨夜おそく來られたんですね、一人ですか？」

其男は克彦の顔に朗かな笑ひを浴びせ掛ながら疊かけて訊いた。

「さうですよ、」

「結構ですね、——いや、實は僕も一人ですがね、失敬ですがあなたは畫を描かれるんぢやないですか？」

「いゝえ、——だが、如何してそんな風に見えますかね？」

「ぢやあ小説家か、——顔を見ればわかりますよ、兎に角どつちにしても、さういふ仕事に關係のある人ですね」

どうです、當つたらう、と言はぬばかりにその男は屈托のない笑顔を見せた。

「なるほど、さういふ生活も僕にはあつたやうですね、だが今はかうやつて唯ぶらついてゐるんですよ」

「君は難かしい理窟を言ふ人ですね。——ところが僕もそのふらつき屋の一人なんです、ところで如何です、今日若都合がよかつたら天平山まで御同行を願へませんか？」

「いや、そんな結構な身分ぢやありませんよ、僕は今の宿賃を拂つてしまふと、もう素寒貧になら

なけりやならないんですからね」

「ふらつき屋にも似合はない、心細いことを言ひますね、そんなものは僕がすつかり引き受ますよ僕は一昨夜上海の賭博場を逃げ出したばかりですから、囊中自ら錢ありさ、ポケットの中で紙幣束が唸つてゐますよ」

「ぢやあ君は博徒ですか？」ミ克彦もひみりでにこだわりのない親しみを感しながらぶつきらほうな調子で言つた。

「博徒——？いや如何いたしましたして、大した御挨拶だな、しかしまあ一種の博徒に違ひないね、どうですこつちへ來て朝飯をいつしよにやりませんか？」彼はさう言つてから今度は恥かしさうに眼をしよほしよぼさせながら、——

「昨夜はよく眠れましたか、——何しろ壁がうすいもんだから氣兼ねでならなかつたが、教房第一の美人とすつかり話しこんでしまつてね」

彼は生色の乏しい頬を撫じた。さう言へば昨夜、淺い眠りの中に喃喃として盡きぬ情語が潺々たる流れとともに耳に通つてきたのを克彦は思ひ出した。

荒川克彦は顔を洗ふとすぐに廊下へ出て隣室の部屋の扉をあけた。同じ位置に隣り合つてはるてもしかしこの部屋は彼の部屋とくらべるとすばらしく上等である。中もすつと広いし、それにテーブルも寢臺も重々しくどつしりしてゐるし、壁の裝飾にも一々深い心づかひのあとが残つてゐるばかりでなく扉をあけるとすぐに高い香のかほりがほのほのと流れてきた。

克彦の姿をみこめると、そのときワイシャツ一枚になつてうす絹の帳の前の朱塗の椅子に悠然として腰をおろしてゐたこの風變りな旅客は彼の右手の太い指の間に挟んだ葉巻の灰を落しながら立ちあがつた。

「どうぞこつちへ」
彼は自分の前にもう一つ空いてゐる同じ恰好の椅子をゆびさしながら言つた。それから彼等はお互に自然な氣持で名乗り合つて、もう五六年越しの知り合ひでもあるかのやうに親しげな調子でしゃべりだした。克彦がうけとつたその男の名刺には「相良信一」といふ名前が刷つてあるだけだったがしかし彼はこの男の努めて装つてゐる無頼漢らしい素振りの中から高い教養と、ゆとりのある生活がつくりあげた我儘な坊つちやんらしい氣質を感じてしまつた。財産のある家庭に生れて、親の遺業を

繼ぐ氣にもなれず、さうかといつて無一物になつてプロレタリアの生活にまで没落する勇氣もなく、絶えず殺到してくる時代思想の波におびえながら、金に任せて女をあさつてくらすことに鬱結した心をやつとまぎらしてゐるところのの高踏的な遊蕩兒——それは過渡期の日本に現はれた特殊な貴族的性案であるところのルンペン、ブルチョアの姿を彼はこの輕口のうまい、何のこだわりもなく飄々としてゐるにもかゝらず、心の底の方でちんとした姿勢を保つて氣取り澄ましてゐる男の姿の中に見出したのである。

やがて、ボーイが朝飯のお粥を運んできた。克彦はどろんとして甘味をもつた液體には如何しても食欲が起らなかつたが、それでも一椀だけはひと思ひに吸こんだ。食事の最中、扉が音もなくあいて手籠に花を入れた少女が何の會釋もなしに入つてきた。

「茉莉花！」と、少女は指に顫える聲でにつこり笑つて見せてから、急に克彦の方を向いて、
「先生、——要、不要？」

と言つた。それから、白い花を針金をまるくしてつくつた環に通したのを無遠慮に彼の鼻先に突きつけた。蘭に似た高い香りが強くきた。

「幾錢？」
「一角洋錢」

すると、彼は克彦の方を向いてにやりと笑ひながら、十仙銀貨を一つ籠の中に入れて、その中の一つをとつた。女が出て行くと彼等はまた向ひ合つて雑談を始めた。その頃から空がだん／＼曇つてきた。

二人が支度を整へて老蘇臺旅館を出たのは十時を過るころだつた。眼の前にはうす曇つた小東門外の大通りが雑然として展開してゐる。巍然として聳え立つ純支那式の商店が建込んでゐる中を、馬車黄包車、小車、騾馬、等々の乗物が入り亂れて混沌とした騒音をつくつてゐた。彼等のぐるりには忽ちのうちに數十人の男が集まつてきた。背のひよる高い一人の黄包車夫が俵の梶棒を彼の足元につけて、

「寒山寺まで行くか？ やすいよ。俵——」と言つた。しかしそのとき、彼等のすぐそばで群集のざわめきが起つた。洋装した一人の日本婦人が騾馬曳きの群に包圍されて何か聲高に叫んでゐるのである。

3

相良は急いで群集の波をかきわけて洋装の婦人に近づいていつた。——彼等は古い知合でもあつたらしい。もう微笑みかはしながら握手をしてゐるのである。しかし、すぐに彼は両手をひろげて、

「去—去—」と、騒いでゐる馬夫や、黄包車夫を叱りつけながら克彦のそばへ戻つてきた。

「——君！ いよいよ天平山行に一點の紅彩が加はつたよ、今僕が話をしてきた女があるだらう、あれは上海で豪華な寡婦暮しをしてゐる有名な淫婦さ……あいつに見込まれたら大抵の男がなめくちのやうになつてしまふんだ、何しろ孫傳芳の妾までしたといふ噂のある豪の者だからね、見たまへ、あの目付を！」

その女の周囲には祝儀を貰ふために車夫や馬子たちがお世辭笑ひをしながら集まつてゐた。女はしかし平然として、さういふざわめきを少しも氣にとめてゐない様子でちつと克彦の顔を遠くから見詰めてゐるが、しかし視線がぱつたり出會ふとえん／＼たる瞳が閃光の如く輝いた。相良はすぐにそれを感じたらしく、意味ありげに唇をすほめながら、——

「おい、しつかりしたまへよ、あの女はどうやら君に目星をつけたらしいぜ、あいつは天平山まで駕籠でゆくんだから僕等は一足先きに行つて待伏せしてやることにしやう、思ひがけない材料が見つかるかもわからないからな」

「いや、——僕にはあゝいふ種類の女は苦手ですよ、それこそ文字どほり不要、不要だ」
克彦は相良の肩を敲いた、二人が聲を合せて笑つたとき、少年の馬夫が二頭の騾馬を引つ張つてきた。

「さあ、どれでも君の好きなものを選び給へ！」

「だがね、——全く僕は馬に乗るのは始めてなんだが、大丈夫だらうか？」

「そいつは何とも僕には保証が出来ないな、しかし、馬を御することは女を御するよりは樂かも知れないからね、まづ思ひきつて一鞭當てゝみるんだな」

相良は冷笑するやうにさう言つて、ひらりと一頭の騾馬に飛び乗つたのである。克彦も恐るおそる馬背にまたがると彼はそのまゝ首筋へしがみついてしまつた。

「さあ、出掛けやうか」と、相良は克彦の方を振り返る拍子に、洋装の婦人に、「ではお先に」といふ感じを含ませた眼くばせを呉れてからゆるゆると騾馬を進ませた。しかし、克彦は次第に馬の歩みが速まるにつれて、しつかりと手綱を握りしめたまゝ、ますます前へ屈んでしまつた。眼界が急にひとすぢになつた。騾馬の首筋が見える。長い耳が見える。それからしつかりと手綱を握りしめた自分の手に汗のにちんでゐるのが……。二三町歩くうちに少しは馴れてきたがしかし首をもたけることがやつとできるだけで何處を歩いてゐるのかまるでわからなかつた。並木を彩る若葉の色だけが眼界をほうつとかすめてゐる。道は次第に川に沿つて、岸邊に咲く黄色い花が美しい流れの上に砕けてゐる鏡のやうな水面を民船が通る。書舫が通る。蘇州城外の新緑は日ざかりの下に輝いて楊柳の葉は緑のやうに微風にもつれてゐる。やがて江南隨一の名園である留園の古風な門の前で先に立つた相良が騾馬から下りた。

「此處で一休みしやう」

彼は廣場にならんでゐる、楊柳の幹に騾馬の手綱をつなぎながら言つた。古風な門をはいると厚い壁に仕切られた廻廊が續き、ところどころに青磁色の陶器の椀をはめた窓があり、窓から流れてくる薄い外光が黒く冴えた敷石の上に靜かな反射をつくつてゐる。奥庭の池の前でぐつたり一休みしてゐるころへ、うしろの靜かな廻廊にしなやかな靴の音がひびいてきた。

4

近づいてきたのは、先刻、小東門外で騾馬曳きの群れにかこまれて騒いでゐた洋装の夫人だつた。

相良は女の姿を見ると皮肉さうな微笑を頬にうかべながら立ちあがつた。

「ずるぶん早駕籠ですね、僕等も今、着いたばかりですよ、——」

「わたしの駕籠はね、何度あなた方を追ひ抜けやうとしたかわからないのよ、でもわたし遠慮してあけたわ、でも、馬より駕籠の方が早かつたりしたら、見つともない話ですものね」

もう三十を越した女とも見えない媚羞を脂粉に彩られた顔にうかべて、彼女は愉快さうに笑つた。

「困るな、——かういふ初心の乗手がゐるもんだから、僕まで輕蔑せられることになるんだが……」

よし、あなたがさういふ了簡なら僕は一つ颯爽とした姿を見せてあげやう、何しろ天平山までは未だ道が遠いですからね」

彼はかう言つてから、一人で横を向いて苦笑してゐる克彦の顔の上に軽く視線を投げながら、——「ねえ君、この夫人を紹介しやう、この人の本當の名前は僕も知らないんだが、いや知る必要が無いんだ、——われ／＼の間では「楊子江夫人」といふ綽名で通つてゐるんだからね、それから、こつちは……」

と彼は、慌て、彼の言葉を遮らうとして何か言ひかけやうとした「楊子江夫人」の前に突つ立つて克彦の肩を敲きながら磊落さうに腹をゆすぶつて笑ひ出した。

「……こつちはね、實は今朝會つたばかりの友人でね、つまり隣室の客なんだが、われ／＼は十年の知己のごとく相通するのを持つてゐるといふわけですよ」

「口上はもう結構よ、——それで何と仰有るの？こちらは」

「荒川君と言ふんですよ、——それ以外のこゝは僕も未だ知らないんですがね」

「荒川さんと仰有るの……どうぞよろしく」

と婦人は軽く頭を下けた。

「いや、わたしこそ」と言つてから克彦はちよつと言葉を途切らせて、「楊子江夫人といふのは

あなたが上海に住んでゐるからですか？」

「相良さんの出鱈目には、もうわたし兎をぬぐわ、——わたし、もうあなたを紳士として待遇しな

らうかよ」

夫人は流石に憎々しさに唇を顫はせた。

「——紳士として、いやどうも結構な話ですね。あなたに紳士として待遇されることを期待したことは未だ一度もないからな、ところで荒川君、この夫人が何故に「楊子江夫人」であるかといふことは實は僕もよく知らないんです、いや、夫人の名譽のために知らないことにして置きたいんです、楊子江のごとく綿々たる情感を千里の遠きに流すといふ意味なのか、それとも楊子江のごとく……」

「もうお止しなさいよ、そんな皮肉は少しも利かないことよ、わたし、もう退却するわ」

「楊子江夫人」は克彦の顔の上に凄艶な一瞥を投げてから、くるりと向きを變へた。

「ひどいことを言ひますね」

克彦は夫人の姿が廻廊のかげに見えなくなると、かつとしたやうに聲をひそませて言つた。相良はからからと高い調子で笑ひながら、

「いや、あれは一種の挨拶さ、あの程度の言葉では全くあの女には何の感應もないですからね、——あいつは有名な阿片溺愛者ですよ、誰にしても若あの女を完全に征服し得る時があつたら、それは

あの女を昏倒させるほどの侮辱を與へた時だ、何しろ千軍萬馬の間を往來した豪の者だからね、しかし、あの女が一人で天平山へ出かけるといふのもへんだな、——ことによると、天平山に誰か男が待つてゐるのかも知れないな」

彼はちよつと考へこむやうな眞似をしてから、にやりと笑つた。

5

風が出て、大湖石にかこまれた飄丹型の池の水面がざわ／＼と波立つてきた。對岸の重疊たる岩の上に小さな亭があつて、その下までうね／＼とつゞく細い石の坂が時代の冷たさを吸ひこんだ古めかしい苔の色を曇つた大氣の中にうかばせてゐる。石の下には葉蘭がむらがり、ところ／＼の葉がくれに小さな石像の置物が、數百年の風雨を留園と、もに潜いで古色蒼然と輝いてゐる。——

「そろ／＼出かけるかね、今から行けば途中でまたあの女に追ひつけるからな、——今度は一つ一泡吹かしてやらうよ」と退屈さうな聲で呟きながら相良は吸ひさしの葉巻をほんと池の水面に投げたそれから亭のうしろを通つて、入つてきたときは反對の廻廊をぬけて、垣根の下に咲き亂れてゐる名も知らぬ白い花を踏みつけながら、雑草にかこまれた道を歩いていつた。

外へ出ると少年の馬夫が近づいてきた。今度は克彦を先にして驟馬はゆる／＼と動きだした。

二里の道を辿つて天平山の麓についたときには兩足が痺れて克彦は物を言ふ元氣もなく、ぐつたりと、うすじめつた青草の上に身體を横たへてしまつた。相良は樓門の前を往つたり來たりしてゐるがすぐに戻つてきて軽く克彦の肩を敲きながら、——

「あいつ、どうも未だ來てゐないらしいね、ことによると留園から引返したのかも知れないな」

彼は丘の疎林の間に閃く山門の朱の色を眺めながら言つた。空が曇つて居るので風は夕暮のやうに冷たかつた。

「免に角、僕も一休みしやう」と言ひながら、彼も克彦とならんで腰をおろした。

「——ところで、荒川君、君はこれからずつと支那に居るつもりですか？」

「いやそのことを僕も今、考へて居たところですよ、——僕はもう實を言ふと飛び立つやうに日本へ歸りたくなつて居るところですよ」

「おや、おや」

と、相良は落膽したやうに聲の調子を落して、

「さう言はれると僕はまつたく谷底へ轉け落ちたやうな氣がするんだ、僕は夕暮の淋しい男でね毎晩、電燈の點くころになると郷愁が潮のやうに殺倒してくるんですよ、だけど僕は日本へ歸つたところで仕方がないからな、——支那に放浪してもう十五年あまりになるが、かうやつて思ひがけなく親

しくなつた日本人と袖を別つときの淋しさといつたらないね」

「しかし、僕はすぐにまたやつてきますよ」

「直にだつて、——いや誰でも決り文句のやうにさう言ふんだ、いざ左様ならとききたときにはね、互に手を握りあつて、再會を契ふものさ、僕もかういふ調子で何べん左様ならを言つたか知れないよしかし左様ならをしてわかれた男と再會した例がないからね」

「ところで、失禮ですがあなたは何を仕事にしてゐらつしやるんですか？」

「仕事？」と、相良は眼をしばたゝきながら低い聲で同じ言葉を繰返してから、

「——先づ親父の遺産を費ひ果すことですね、僕がそのためにいかに苦心してゐるかといふことは十日も僕と起居を共にして居られるとわかりますよ」、その聲には悵然たる響がこもつてゐた。空は次第に曇つて、うすい霧が山の中腹に環を描いてとろ／＼と流れはじめた。

二人は山門の前をしばらくうろついてゐたが、しかし、到頭楊子江夫人の姿は見えなかつた。夕暮の風がざわ／＼と樹立をゆるがして、大地は秋のやうな静けさにつゝまれてゐた。雨の絲がかすかに頬に觸れた。草原に突つ立つて乗手を待ちあぐんでゐた二頭の驟馬は二人を乗せると、馬夫の掛け

聲も待たずに、濛々たる雨氣を衝いて駈だした。

正面に青い畑がかすんで見える——空はますます曇つてきた。克彦は背筋に傳はる冷氣におびえながら、しかし彼の心は深い郷愁に鎮されて居た。彼はわけもなく美和子の姿を思ひ出した。あの女は自分を待つて居るのだ——その感じはしつとりと彼の心の底に根をおろした雑草のやうに、生々しい愛情の新芽をもたけてすく／＼と伸びて來た。彼はもう矢も楯も堪まらなく日本へ歸りたくなつて來たのである。彼は潮のやうにどよめく回想の中に土を踏んで高鳴る驟馬の鈴の音を聞いた。

「ねえ、君！」

と、相良が雨に濡れた額を撫でながらうしろを振り返つた。

「——ねえ、どうだい、思ひ切つて今年の秋までたまへよ、すくなくとも上燈節のすむまで……」彼は唸るやうに叫んでから、烈しい感慨を籠めて、ちやうど演説でもするやうな口調でしゃべりだした。それは彼のうしろにゐる聽手に話しかけるといふよりも、むしろ胸に鬱結する感情を一息に吐くやうな調子で、

「——上燈節がすむと、支那は始めて支那らしくなつてくるんだ、江南一帶の楊柳が黄ばむといふわけさ、——遊子腸を断つときだ、蘇州、揚州、杭州、南京いや殊に南京はいゝな秦淮の秋を語らずして支那の風景を語る資格は無いよ骨組だけになつた林の間から、南朝逆跡鷄鳴寺の桃色の壁が見え

る頃になると莫愁湖の水が澄んでくる、すると女が輝くやうに美しくなるといふわけさ」
 しかし、その聲は何か調子のいい唄をきいてゐるやうにゆるやかなメロデーをつくつて克彦の頭の中をすべりぬけた。そのとき右手のひらけた麥畑のうねりを越えて黒くうきだした森の間に赤い塔の聳えてゐるのが見えた。

「あれさ、あれさ——」と、相良が左手をあけて指差しなが叫んだ。

「あれが寒山寺だ、夜、蘇州河を民船で下ると、鐘の音に眼が醒めるからね、文字どほり夜半の鐘聲客船に到る、といふやつさ、ほのほのと明けかゝつた空にあの赤い塔の色が見えるときの感じは、ちよつこらちよいとやつてきた旅行者にはわからないからね」

「いや、どうも、——大した氣焔ですね、しかしさういふ感慨の中に埋まつてゐると僕はますます／＼郷愁を感じますね」

彼等の行手には街をめぐる姑蘇の城壁がそびえてゐた。吳王夫差が三百丈の城壁の上に美女青施を擁して長夜の宴を張つたといふ歴史の古い夢が、きれ／＼につゞく城壁の中かしつとりとうかんでくる。坂の多い道をすべるやうに駆て、やつと老蘇墓旅館に着いたときは、もう六時を過ぎてゐた。外套をぬいですが、二人で宿屋の前の湯屋に出かけた。湯屋の名は「華清池」——白樂天の長恨歌の一節「始賜恩澤華清池」からとつたものであらう、名前の象る古き情緒にひきかへておそろしく文

化的な風呂に入ると、嬌として夜に待する楊貴妃のかはりに頭をてかてかに光らせた支那ボーイが出てきた。一風呂浴びて歸つてくると、二人はわかれ／＼にそれ／＼の部屋に歸つた。しかし五六分も経つたと思ふ頃、年とつた番頭が一通の手紙を持つて靜かに克彦の部屋の扉をあけてはいつてきた。

ボーイの手から手紙をうけると克彦はその黄色い支那封筒の上に艶めかしくうかんでゐる女文字を眺めて思はずどきつとした。

彼はいそいで封を切つた。

前略、先刻はまことに失禮いたしました、今夕、わたしの別荘にあなたを御招きしたいと存じます、どうぞ御都合お繰合せの上、この馬車にてすぐにお出で下さらばうれしく思ひます、匆々署名はしてないけれども、しかしこの手紙が「楊子江夫人」から届いたものであることは今は寸分の疑ふ餘地もなかつた。

一瞬間、克彦は手紙をひろけたまゝ緑色の書簡箋の上を覗みつけてゐた。何か不愉快な、見くびられてゐるやうな感じが彼の胸の底をかすめたのである。だが、彼は扉口に立つてゐるボーイの顔を見ると不意に皮肉さうな微笑をうかべながら、しかし眼顔ですぐに軽くうなづいて見せた。無氣味な好

奇心が残滓のやうにこびりついた彼の不快な感情を拂ひのけた。

それから三十分の後、彼を乗せた馬車は蘇州郊外の滑らかな並木道を走つて、古めかしい煉瓦づくりの建物の鐵柵にかこまれた門を潜つたのである。ベルを押すよりも早く表玄関の扉をひらいて出てきたのは愛想のいい支那の老婢だつた。すぐに彼は廣い廊下を突切つて正面の客間に通された。老婢は彼が安樂椅子に深々腰をおろすのを待つて「何卒しばらくお待ち下さい」といふ感じを品の良い笑顔に残して出ていつた。

外は雨がひどくなつてゐるらしく、庭に面した窓ガラスの上を流れ落ちる雨だれが明るい電燈の光の中に碎けてゐる。しかしそのとき扉が靜かにあいた。入つてきたのは水色のナイト、ドレスを着た「楊子江夫人」だつた。

彼女の姿が、光線の加減が非常にしとやかに見えた。歩くごとに香水のかほりがこぼれて、和やかな身のこなし方が、いかにも深窓に育つた高貴な夫人といふ感じを與へる。不思議にも、半日前に受けた、あの毒婦らしいがさくした印象は、小さつぱりとしたナイト、ドレスに着替へた彼女の姿の何處からも探すことは出来なかつた。

「よくおいで下さいましたのね、わたし若かしたら怒つてゐらつしやるんぢやないかと思つたのよこほる、ばかりの愛嬌を漂はせて彼女は馴々しい調子で言つた。

「いや非常に光榮です、——どうして僕があなたの御招待に對して怒る理由があるんです？」

「でもするぶん手前勝手なお願ひなんですもの——」と、夫人は小娘のやうないそ／＼とした素振りてテーブルの上の小さい箱にはいつてゐる葉巻を彼の方へすゝめながら言つた。克彦はちつと彼女の顔を見詰めてゐた。——房々たるんだ髪、若々しい輝いた瞳、多少もつれかゝるやうではあるがしかし美しい響にみちた聲、——

それ等の肉體と聲と衣裳との調和が何時の間にか克彦の頭に先入觀念となつて入つてゐたところの彼女に對する不快な記憶を見事に一掃してしまつたのである。しかし、夫人が慌てゝ何か話しかけやうとしたとき、さつきの老婢がやつてきて食事の支度が出来たことを告げた。

食堂代りに使はれてゐる廣い客間には、彼を迎へる爲に教坊の美人が五六人清楚な装ひをしてならんでゐた。克彦はうつとりとするやうな氣持で舌ざわりのいゝ洋酒を久しぶりで味はひながら、夢のやうにひよいてくる樂の音の中に眠るやうに耳を澄ました。夫人は彼の傍に坐つて絶えず酒をすゝめた。痺れるやうな酔ひがすぐに克彦の疲れた五體に沁みてきた。知らぬ間に時が経つたらしいそのまゝ彼は烈しい陶酔のためにうとうとして眼界がくらく／＼つかすんできた。新しい意識が彼の頭に甦つてきたときには、何時の間にか來たのか、ひつそりとした部屋の壁につゞいた寢臺の上に彼は靴を穿いたまゝ羽根蒲團にくるまつて眠つてゐるのであつた。

彼は思はず起き上らうとしたがその瞬間、息を弾ませながら、自分の顔に迫ってくる女の瞳を感じたのである。彼はどきつとして肩をすほめた。

しかし、次の瞬間、強い香水のかほりが彼の鼻に迫ってきた。そのまゝ意識が朦朧として、全身の骨組がばらばらにゆるんでくるやうな、それにもかゝはらず、滑らかな坂道を自動車が発進力ですべつてゆくときに感ずるやうな、慌しい陶酔が彼の心をみたしはじめた。

彼の身体は急に綿のやうに軽くなつた。不思議に何の不安も恐怖もなかつた。運命に身をまかせるといふやうな意識的な想念を呼び起す餘裕すらもないほどに彼は、次から次へと現はれてくるきれぎれの夢を追ひ求めてゐた。

だが彼の頭にふたゝび新しい現實が甦つてきたのは、それから一時間近く経つてからであつた。——ちやうど陽の光りを遮つてゐた深い霧が一隅から少しづつ晴れてゆくやうに視野が次第にひらけてきたのである。彼は何時の間にか上着もチヨッキもぬいでワイシャツ一枚になつてゐる自分を見出した。何事が起つたのか——といふことについて考へをめぐらすよりも前に、烈しい自責と悔恨がどつとあふれてきたのである。しかし彼は部屋のまんに中にある小さなテーブルの前に、ちつと彼の方

を見詰めて、葉巻をくゆらしながら腰かけてゐる女の、瞳の底から燃えるやうに迫ってくる誘らしげな感情に観れると急にむかつくやうな憤りを覺えた。しかし、その感じはすぐに女の心に反射したらしい。彼女は凄艶な笑ひをうかべて立ちあがつた。

「——するぶん、よくおやすみになつたのね、もうそろ／＼夜が明ける頃よ、此處へ来てお話をなさないこと？」

「お話——いや、僕はそれどころぢやないんです、ほんの三十分か一時間で歸るつもりで来たんですから」

「お歸りになるんですつて——宿屋へ、それとも日本へ？」

「僕は眞面目に話をしてゐるんですよ、あなたとこれ以上同席する理由は無いちやないですか」

「大變な元氣なのね」と、女はゆつくりと葉巻の灰を落しながら立ちあがつた。克彦の心臓は烈しい動悸をうちはじめたのである。

「——わたしはあなたをお歸ししたくないのよ、でも、あなたがお歸りになりたければ仕方がないわ」と、言ひながら、彼女は克彦の寢臺に近づいて來た。彼は上體をもたけて正面から女の顔を睨みつけた。だが、その瞬間、彼の腦底を一つの不可思議な感情が走り過ぎたのである。それは、例へば猫の前に眼を瞋した鼠が相手にかすかな一撃を加へることもできずに、挑みかゝつた姿勢のまゝで次

第に戦鬪力を失つて萎縮してゆくときのやうな、自分を支配しかけて居る力の前にちり／＼と壓倒されてゆくもどかしさであつた。夜中まで降つて居た雨はもうすつかりやんだらしい。薄明の光りがカーテンのすき間から流れてきた。

9

次の朝、老蘇臺旅館に泊つてゐた相良は扉を敲く音に眼を醒ました。入つてきたのは前の日の夕方わかれたきりの隣室の客である荒川克彦だつた。

「如何したんだい、——鼠の穴でも探して歩いてゐたんぢやないかね？」と、相良は未だ醒めきらぬ眼を頻りにこすりながら、持前の皮肉な口調で叫んだ。

「いや、——そんな悠長な話ぢやない、僕はあなたとおわかれに來たんです」

「わかれに？」と、相良は寝巻のまま、むく／＼と寝臺の上に起きあがつて、一晩見ないうちにすつかり焦痺してしまつた若い放浪者の顔をもう一度しげ／＼と眺めてから、

「——ぢやあ、急に日本へ歸ることになつたんだね、それにしても、せめてもう一晩だけ僕のために時間を割いてくれ給へよ、何もこんなに短兵急に飛び出したところで仕方がないぢやないか、都合によつたら僕だつて上海位までは見送りにゆきたいからね」

「さうぢやないんですよ」と、克彦は悲しさに眉を顫はせた。

「——僕は。……僕は、もう當分日本へは歸らないんです」

「日本へ歸らないんだつて？ぢやあ、何處へゆくんです？」

「それはあなたに説明したくないんです、ことによると僕は最う永久に日本へは歸らないかもわかりません」

その聲には言ひ知れぬ深い決意が現はれてゐた。相良はその聲を聞くと急に釘づけにされたやうに兩腕を組合せたまゝうしろの壁にもたれかゝつた。二人は數分間、沈黙のまゝで向ひ合つた。しかし極度に緊張した相良の表情はだんだんくづれて來た。

「君、——何か君の身邊に異常なことが起つたんぢやないかね、もし、さうだつたら失敬だが何も彼も僕にうちあけてくれるわけにゆかないかね、お見かけしたところ君はまったく心のピン트가外れてゐるよ」

「いや、何も彼も自分にはわかつてゐるんです、だが如何することもできないんです」

「そんな——そんな馬鹿なことがあるもんか、僕は君の心の動きに干涉する資格は無いが大體の見當はつくね、君は昨夜、あの「楊子江夫人」に會つたんぢやないかね、……若さうだとすれば、僕はその女についても少し詳しい説明を君にする義務がある今までの女のために半生を棒にふるつた

男が何人あるか知れないんだ、——あの女の心には二つの流れが交錯して居るんです、楊子江の逆流に觸れた男の死體が決して水面にうかびあがるこゝろが無いと同じやうに、あの女の情感の犠牲になつた男は、前と同じ姿で明るみへ出ることができなくなつてしまふんだ、だから君は最初の一步をどつちの方向に踏出すかといふことによつて運命が決定するといふことを考へなければならぬいなぢやないかな」

「しかし、——僕はもう一步どころか百歩を歩いてゐるんです、それに僕の人生觀をこの場合に適用すれば、僕はむしろ悲劇の中へ身を躍らしたい氣持です、——ぢやあ、これで失禮します、時間を急いでゐますからね」

相良は扉をあけて出て行かうとする克彦のうしろから、何か大聲に喚き立てやうとしたが、しかし昂奮のために言葉が咽喉に悶えて全身がわななくと顫へてきた。彼は扉のしまる音を聞いて慌てゝ立ちあがつた。しかし、旅館の前待つてゐた一臺の馬車は克彦を乗せると、其まゝ小東門外の雑踏をわけて左の方へすべつていつた。

同じ日の夜遅く、その同じ馬車は旅装を整へた楊子江夫人と克彦とを乗せて、夕方からかすかに降り出した雨夜の道を蘇州驛に向つて走つていつた。白夜の仄明りの中に並木の若葉が美しく輝いてゐた。——樹の間がぐれに姑蘇の城壁が空を劃つてそびえてゐる。ところ／＼の森かげに散在する人家

の灯が小さくはためくの無心に眺めながら、しかし不思議にも克彦の心にも哀愁の翳も残つてゐなかつた。おれはこの女を愛してゐるのだらうか？

しかし、その答へは簡單であつた。否、——おれは人間の秘密をさぐるためにこの女の魅力に身を任せてゐるだけだ！

十二時を過ぎた蘇州驛はひつそりとしてゐた。——彼等が歩廊に出ると一臺の貨物列車が烈しい音を立てゝ通り過ぎた。そのとき小さなトランクを提げた一人の男が改札口から入つてきた。ちらつとその方を見た瞬間、克彦は慌てて瞳を外らした。「相良だ！」

克彦は彼に脊を向けて、わざとらしくゆつたりと歩廊の端の方へ歩いていつた。

第十二章

生活の嵐

梅雨が霽れると暑さが急に加はつてきた。高く冴えた大空の下にすべてのものが新しく、いきくと輝きはじめた。銀座の舗道には白いバラソルのうす絹をとほして燃えるやうな陽ざしが若い女の脂粉に彩られた顔の上に明るい翳をなけた。新しいカン／＼帽子、白いズツクの靴、細身のステッキ等、等——あらゆるものが炎天の下に氣ぜわしくうごきだした。

正午すぎにカフェー、ナイルの階下の廣間はがらんとして静かだった。その入口に近い今、水をうけてやう／＼生きかへつたばかりの植込のかけのテーブルに安達美和子は髻を生やした一人の客と話こんでゐた。客は近代劇場の經營者である袋井信策である。

「——それでだね、お光さん！」と、袋井はアイスクリームのさじをテーブルの上に立てながら、さう女給の呼び名で彼女を呼んでから、

「兎に角、そのことで一度ゆつくり相談したいと思ふんだ、決して心配することはないからね、君がその決心さへつけばすつかりあとの手筈は整つてゐるんだから、なあに、半年も経たないうちに君の名聲はたちまち天下を壓するよ、いや、さうなれば、かういふところから一人の天才女優をひろひ出したといふだけで、僕も世間に對して鼻が高くなるわけだからね」

「でもね、——お父さんの事件がみんな片づいてるないんでせう、それにお母さんが先月から病氣なのよ、だから、わたし自分の氣持だけではどうにも動くことができなくなつてしまつてゐるのよ」

「苦勞性だね、君は、——そんな問題はみんなあとから片がつくよ。それにかういう出世の機會は一度逃がしたら滅多につかまえることのできないものだよ、——生活の方はね、無論大したことはできないけれども、當分僕のポケットマネーから出してあげたつていゝんだからね、尤も、君が氣の進まないことを無理に引つ張だすといふわけぢやないがね」

「——それは、わたし、どんなにうれしか知れないわ、でも、そんな才能がどうしても自分にあるやうに思へないのよ」

「さう考へるからいけないんだ、——自分を信する前に先づ僕の鑑賞眼を信するんだね、君は深窓で育つて古風な教養をうけてきたものだから自分をすつかり引込思案にするくせがついてしまつたんだな、——近代人はもつと積極的になつて十の能力を百にして働かすやうにしなければ駄目だよ、兎に角、その話は今夜ゆつくり相談しやう、此處の店へはお母さんの病氣が何かにこちつけて休むんだね。僕は八時まで帝國ホテルの一八五號で待つてゐるからね、萬難を排してやつて來給へ！」

美和子がおどくしてゐるうちに袋井はもうすつかり話がつまつてしまつたやうにひとりで飲みこんでしまつたらしい。彼はいそいで謝定をすましてしまふと、「ちやあ」と言つて立ちあがつた。それから、美和子の顔の上にもう一度たしかめるやうな微笑を浴びせかけてから、軽くステッキをふりながら出ていつた。

美和子は日がくれるまでそわそわしてゐた。頭の中で自分の考へをまとめるひまもないほどに彼女は自分の身體が、もう何の支へる力もなく急流の中へ押流されてゆくやうな氣がした。喜びともつかず悲しみともつかず、こみあけてくる感情のために胸の中はどよめき返してゐた。——

同じ夜の八時少し前に彼女は帝國ホテルの一八五號室に袋井信策とテーブルをはさんで向ひ合つてゐた。何が自分を此處へ導いたのか、どうして此處へやつてきたのか、かすかな判斷すらもなく彼女はそわ／＼と夢見るやうな氣持で安樂椅子の深いクッションに身體をうづめてゐた。

美和子の頭の中は美しい空想でうつまつてゐた。かすかに暗闇の中に瞬いてゐた光は明るく燃えるやうに輝きをもつて彼女の運命を照しはじめたのである。

「ちやあ、早速今夜家へ歸つてお母さんに話して安心させるんだね」

美和子は黙つてうなづいて見せた。彼女には何時もカフェエのテーブルで見馴れてゐる袋井の顔が——あるかなきかのちよび髻を生やした輕薄さうな顔までが、今夜にかぎつて何といふこゝもなしに信賴すべきものゝやうに思はれてきたのである。いや、それは信賴すべきものといふよりも、むしろ何かたとへやうもなく神々しいものに思はれるのであつた。

「あゝそれから」と、しばらく経つてから袋井が親しげな笑ひを厚い唇に漂よはせながら言つた。——「最も注意しなければならぬことがあるんだそれは戀愛をしてはいけないといふことです、いまゝですばらしい天才をもつた女優が戀愛のためにどんなに荒んでしまつたかわからないんだからね、男のどんな誘惑に對しても常に身をまもるだけの用意がなければね——いゝかね僕の言ふ言葉の意味がわかるかね遊びとしての戀愛ならいくらあつても構はないが男に心をうち込むやうなことがあつてはいけないといふんです——！」

美和子はその言葉をうつとりとして聽いてゐた。

「でも、わたし、そんな風には考へられないんですもの」

「そんな風に考へられないといふと——つまり戀愛はもつと眞剣なものだといふ意味ですか？」

「えゝ——でも遊戯の戀愛なぞといふことは……」

「おや、おや——君はまるで昔氣質のお嬢さんですね、」と言ひかけて彼は慌て、立ちあがつた。

「——僕が君に愛を感じるとしますね、いゝかね、假りにだよ、すると君も假りに僕を愛するやうになる、すると段々に一つ手前の氣持で、ちやうどフィルムが轉廻するやうに非常に安全な戀愛が進行するわけぢやないですか」

彼はついと腰を屈めた、——と見る間もなく彼の右手は膝の上に重ねてあつた美和子の左手をぎゅつと握りしめてゐた。美和子はどきつきして肩をすくめたが、しかし、彼はすぐに手を離して愉快さうに笑ひだした。

「さあ、——これが第一歩といふわけですよ、これから僕が君の戀愛の教師にならうかな、——いや、これは冗談だがね、兎に角かういふ生活には何よりも誘惑が多いといふことを考へなければいけないよ、先づ當分は女優養成所に通つて貰ふんだが、しかし、安心したまへ、すべて君の將來は僕が引うけるから」

しかし、そのとき壁際のテーブルの上で卓上電話のベルが氣たゝましく鳴りひびいた。袋井はいそいで受話器をとつて低い聲でしゃべつてゐたが、しかしがちやりと電話を切つてしまふと、元の席について、

「今ね、僕の方の月岡燦珠がやつてきたんだ、ついでに此處で紹介した方がいゝと思ふんだが、どうかね？」

「え、どうぞ——」
 美和子の顔にはかくしきれぬ昂奮の色が現はれてきた、彼女はまったく夢の中をうろついてゐるやうな氣持だつた。軽く扉をノックする音が聞えた。そして今は彼女の憧れの的である當代の人気女優が颯爽とした足どりで入つてきたのである。

3

燦珠は美和子の方にちらりと流し眼を呉れたゞけであつた。しかし其傲然と取り澄ました態度は、女同志が初対面のときに持つところの、あの相手の地位と容貌に對する獨特の敏感さの中に燃えてくる嫉妬感ではなかつた。何故かといつて、彼女は明かに自分の地位を自覺してゐるから。だから、彼女は、つとめて美和子の存在を意にきめてゐないやうな素振りだ。袋井の左横にあつた椅子に腰をおろしたのである。

「ちやうどいゝところでした、——このひとを紹介しませう、今度僕等の女優養成所に入ることになつた安達美和子さんです」と、袋井がいかにも劇團の主腦者らしい儼然とした語調で言つた。

「安達さんと仰しやるのね、どうぞよろしく、わたし月岡」
 美和子はおどろくと顔を赤くしながら、腰をうかせていんぎんに頭を下げた。

「さう言へば、わたし」と、燦珠は美和子の視線を軽く覗きかへしながら——「わたし、前にあなたを何處かでお見かけしたことがあるのよ、何處だつたかしら……」

彼女は考へこむやうに小首をかたむけたが、美和子は一瞬間、そのために顔が眞赤になつた。そのまま、彼女は黙つてうつむいてしまつた。しかし、燦珠はすぐに氣輕な調子でひよいと袋井の方を向いた。彼女は「××新聞」の劇評が彼女を極度の熱情をもつて賞讃してゐること、だがそれにもかゝらず「△△新聞」の「劇評風聞記」は彼女と新進作家の荒川克彦との情事關係をすつばぬいてゐること、荒川が上海放浪の旅にのほつたのは彼女に失戀したためであるといつた風なことまでまことしやかに書き加へられてゐるといふことを、いかにも心外だといふ調子で早口にまくし立てゝゐた。「荒川」といふ言葉が茫然として腰かけてゐた美和子の耳に電光のやうに流れてきた。冷たいものがすうつと彼女の胸の底を流れていつた。頭がくらくくとしてきた。その瞬間、彼女は自分の身體が高い山の絶頂から深い谷底へ、傾斜の急な砂地をすべるやうにするくくと陥ちこんでゆくやうな氣がしたのである。其慌しい氣持の中で一つの情景が彼女の頭をかすめた。

上海にゐるころ月明館の四階の部屋で荒川克彦の部屋の、うす暗い壁に貼つてあつた一枚の寫眞である。その若々しい姿の持ち主は彼女の眼の前にも月岡燦珠の他の誰でもないではないか！すると今まで思ひ出しもしなかつた記憶が生々と頭の中にうかんできたのである。お、やつぱりさうだ

つたのか、さ彼女は思った——あの人は自分に何事も説明しやうとはしなかつたけれども、しかし自分心がなげ出してあの人に迫つていつたときにあの人の表情には、まったく思ひがけないやうな深い苦悶の色が現はれたではないか——。

どんな力も決して二人の心を結びつけた糸を断ち切ることは出来ないであらうと信じ切つてゐたその糸の結び目がひとりでにほどけてきたのだ。物狂はしさがどつと胸にこみあけてきて彼女の耳にはもう誰の言葉も聞えなかつた。

「わたし今夜は失禮いたしますわ、——家のことが氣になりますから」

美和子は氣を失なつたやうによろよると立ちあがつてゐた。

「ぢやあ、——明日の正午頃、もう一度来て下さい、いろ／＼な手筈をとりきめますからね」

袋井の言葉をあとに残して彼女はすぐに部屋の外へ出たのである。ホテルの玄関口へおけると夜風がしめやかであつた。一臺の自動車がとまつて玄関の扉がひらかれたところである。大きなトランクが順々に持運ばれ、おりて来たのは洋装した三五六の肉附のいゝ女とその良人にしては少し若すぎる烏打帽をかぶつた青年紳士だつた。すれちがひに二人のうしろ姿がちらりと美和子の視線をかすめたゞけであつたが、しかし彼女の顔はたちまち蒼白になつた。

美和子はあぶなく走りよるところだつた。しかし、稻妻のやうな一つの感情が鋭く彼女をうしろへひきもどした。そこに今、彼女の眼の前に現はれたのは、たしかに荒川克彦ではないか——窪んだ眼、瘦せすぎてはるるが頬骨の下から下顎にかけてのゆたかな線、淺黒い皮膚の色、隆いギリシヤ鼻——それはちらつと彼女の眼の前に閃いた情景にしか過ぎないが、しかし彼女はすべてを見てしまつた。古い記憶が一時にとつとこみあけてきた。それは不思議な瞬間であつた。美和子の心臓は極度の昂奮のために、油のきれた機械のやうに硬直してしまつたのである。彼女は茫然として立つてゐた。ひつそりと静まりかへつた彼女の頭の中を、たつた今扉の中へ消えていつた荒川のうしろ姿が列をつくつて通りすぎた。不吉な豫感が轟々と迫つてきた。いや、それはもう決して豫感ではない、——あまりにもあざやかな現實が數分間前の不吉な幻想の中から生々しい姿を現はしたのである。それは、今の彼女にとつて、たつた一つの夢であり、希望であり、力であり、誇りであり、信仰であり、否、彼女の存在の全部であるところの愛人の、懐かしいうしろ姿ではないか！

だが、夢は彼女がそのあとを追ふために分秒の餘裕すらも残さずに遠い闇の底へ吸ひとられるやうに消えていつた。高い窓から落ちてくる火影が、魂の抜殻のやうにほんやり立つてゐる哀れな彼女

の影を白い砂利の上に描きだしてゐた。

風は非常に強かつたが、しかしめづらしく冴えた月夜である。風に吹きとばされた灰色の雲の塊が、おそろしい速さで、あとからあとからと月を追ひ越していつた。砂塵が煙のやうに立ちのほつて電線の高鳴る音の中から聞えてきた。

美和子は放心したやうな足どりで電車線路を横切り、日比谷公園の鐵柵にそつて停留場の方へ歩きだした。頭の上では深い樹立の梢が絶えず、ひゆう、ひゆうと鳴つてゐる。彼女は眼の前の電柱にぐつたりともたれかゝつてもう一度帝國ホテルの明るい窓を見あげた。

長い溜息が、はじめて胸の底からのほつてきた。——彼女は自分を支えてゐたすべての力が失はれてしまつたことを感じた。あの人の幻像は、もう自分の心の中にふたゝび歸つてくることは無いであらう、と彼女は思つた。しかし、彼女の頭の中には明かに二つの意識が入り亂れてゐた。それは、路上に身體を投げ出して、心ゆくばかりに號泣したい感情と、さういふ自分の悲しい姿を遠くの方から冷やかな氣持で眺めてゐるもう一つの感情とが、しつかりともつれあつてゐるのであつた。——さてこれから如何するつもりなのだ？。

さう彼女は自分の心に問ひかける。——お前はひとりで生きてゆかれるか？

その言葉は、しかし彼女の小さい魂を強くうちのめすよりも前に、烈しい憤りをよび起した。それは自分を裏切つた憎むべき男に對してははなく、今、自分の一生をもろくも握り潰さうとして居る見えない力、——過去から未來にわたつて黒雲のやうに自分たち一家の上に襲ひかゝらうとして居る運命の力に對してであつた。

何でもないわ、——もうみんな過ぎ去つてしまつたことぢやないの……

彼女はそつと頬に手をあてゝみた。すると冷たいねばつこいものが指の先にふれた。彼女は自分が泣いてゐたのだといふことに始めて氣がついた。風はますます強くなつてゐた。濠の水がざわ／＼と波立つて、音が沁みとほるやうにひゞいてきた。

第十三章

悲

曲

荒川克彦は微燻に輝いた頬を夜風のなぶるにまかせながら、バルコンの欄干にもたれかゝつてゐた。

1

中庭をへだてゝならんでゐる客室の窓には明るい電燈の光が厚いカーテンに沁みて、とき／＼人のさゝめきが夜風を傳つて聞えてきた。月は無いが、しかし星は高く空を埋てゐる。一風呂浴びたあとの彼の身體は、久しぶりで爽かな弾力にみちあふれてゐた。彼はポケットの中から葉巻を一本とりだして爪の先で口を切つた。だが彼はそれを指にはゝんだまゝ火を點けようとしなかつた。

彼がこのホテルへ泊りこんでから今日で三日目である。その三日間、彼は一室にとちこもつて暮してゐたのだ。――晝は煙草のけむりとウキスキーの酔に心を痺れさせ、さて、夜は………？

夜は、楊子江夫人――今は彼の情人であるミころの信夫幸枝の妖艶な瞳にまもられて、官能の火は極度にまで燃えさかつた。はげしい疲れは新しい慾情の波をそゝり立てゝ、飽くことを知らぬ怪奇な夢が彼の五體を蛇のやうにのたうちまはるのである。

一ト月前の蘇州の一夜は克彦の運命を急轉させた。それはちやうど深い谷合の、折り重なつた岩をわけてひそやかな音を立てゝ流れてゐた溪流が一つの方向をさぐつてさまよひ流れてゆくうちに、思

ひがけない岩壁にぶつかつて、さて、やつとの思ひで岩壁を躍り越えたと思ふとすぐ下は千仞の斷崖であるといつたやうに——愛慾の流ればたちまち空想の方向を見失ふとみる間に、ひとすじの飛瀑となつて落下しだした。行くところまで行け！

今はさう思ふよりほかに仕方がなかつた。三十を過ぎて放縦な生活に身をまかしてきた女のゆたかな肉體は、さながら、枝から落ちようとする熟しきつた果實であつた。その芳醇なかほりは彼の魂に沁みて、慌しい陶醉の記憶は朝も夜も彼を追ひ駆ける。疲れた飽樂の後にくる絶望的な享樂、——全身を締めつけ心を溶け流すやうな絶望的な享樂のために、彼の神経はゆがみ、彼の感情は爛れてきた。その情感の奔流にあふられて彼は流るゝまゝに流されてきたのである。

蘇州から南京、南京から北京、北京からひと思ひに日本に……だが、しかし、情感の牢獄にとちこめられた彼にとつては久しぶりで踏む日本の土地ではありながらも何の新しい感激も起り得る筈はなかつた。古き戀の傷あともいや新しき戀への憧れすらも、今は遠い山をめぐる霧のやうにうすれてゐるのではないか。その中にほんやりうかんでゐる燦珠の顔——美和子の顔。

今、彼をひきすつてゐる力は精神の美しさでもなければ、魂の輝きでもない、それは醜い、けがれた、いや、けがれたといふよりも腐爛した肉體の臭氣なのだ。その臭氣の中にあつては、彼の過去の記憶をいろざる戀愛のまほろしも儚なく消えてしまふではないか！

彼は葉巻を弄びながら、深い物思ひに沈んでゐたが、しかし思はず顔をあげると、

「あつ！」

と低く叫んで欄干によりかゝつてゐた手をはなした。

彼が聲をあけたのも無理はない。何故かといつて、そのとき彼の部屋から左に三つ目の窓によりそつて一人の女が立つてゐるが、最初うしろ向きになつてゐたその女が急に身體をよちらせて正面を向いたので、彼が視線をうつした拍子に横顔がはつきりと見えたからである。その鼻から下頤にかけてのすつきりとした輪廓はあまりにも美和子に似てゐるではないか！いや、美和子そのものだ——うしろからくる電燈の光にその横顔だけがくつきりとうす闇の中にうきあがつてゐる。

だが、女の方ではもちろん、まったく克彦の姿をみとめないらしい。——彼の兩足は妙に顫へてきた。

しかし、——もし美和子だとすれば、いや、彼女がこんなところに泊つてゐる筈がないではないかだが、ことによると彼女の境遇に何か大きな變化が現はれたのかも知れない……。

闇をとほして女の視線が彼の方にひらめいたのである。その瞬間、彼はくるりと横を向いて、その

まゝ逃げるやうに部屋の中へはいつてしまつた。

上海にゐるころ親しくしてゐた外交官——かつて上海の總領事として聲名を馳せたことのあるH氏を訪問に出かけた楊子江夫人が歸るまでには未だ數時間の餘裕があつた。荒川克彦は部屋へはいると、ぐつたりと椅子にもたれかゝつた。骨ばつた彼の顔は蒼ざめ窪んだ瞳は、深い悔恨と、おどろきと、言ひ知れぬ哀愁とを秘めておのゝき顫へてゐた。

しかし重苦しい數分間が過ぎると、彼は黙つて立ちあがつてゐた。蒼ざめた顔にはひきつゝたやうなうすら笑ひをうかばせながら。——さうだ、おれは進んであの女に會はう、そしてゆくところまで行つてみるのだ！

だが、すぐに彼の心には、自分の現在の境遇を知らせないで、美和子との交情に新しい緒口をみつけることができるかも知れないといふ蟲のいゝ考がうかんできた。——さうすることによつて假りに罪惡を二重に繰返すことになるとしても、あの女の心を奈落の底に突き落すことにくらべたらどんなにましかなれないのだ！

かういふ境遇のどたん場に身を置いた大抵の男が自分の卑怯さをゴマ化するために考へるやうに、彼もまた、ひとりでにさういふ考の方にみちびかれていつた。

そのとき、ノックの音が軽く扉にひびいてボーイが、細長い箱を持つてはいつてきた。その箱が何處かの商店のマークのついた紙にくるんであるところから察すると、たぶん楊子江夫人が行先から届けさせたものであらう。ボーイはうやく／＼しくそれをテーブルの上に置いて出て行かうとしたが、しかし克彦はすぐに彼をよびとめた。

「——ねえ、君、ちよつと聞きたいことがあるんだがね？」

「何ですか？」

「いや、——大したこゝでもないんだが、ほらこの部屋から左に三つ目の部屋に女の人があるだらう、あれさ、あれは如何いふ身分の人だらうか？」

「三つ目と申しますと……」

ボーイはちよつと考へこむやうな眼つきをしたが、すぐに、にやりと笑つて、

「いや、あれは泊つてゐらつしやる方ではないんです」

「すると訪問客といふわけかね？」

「さうなんです」

「ぢやあ、あそこには別の人があるんだね、——その人はどういふ人なの？」

「劇團を經營してゐらつしやる方ですよ、さあ、名前は何と仰しやるんだつたか、ちよつと思ひ出せないんですがね」

ボーイの態度にはわざとらしく言葉を避けるやうな様子が見えた。

「劇團？」

克彦の顔はもうまったく冷静な表情を失つてゐた。劇團！といふ言葉から彼が月岡燦珠を思ひ出したことは當然だからである。

3

「ぢやあ、その劇團は何といふの？」

「それがですね、——よく憶えてゐないんですよ。」

「ひよつとしたら近代劇場といふんぢやないかね？」

「あゝ、さうでした、たしかそんな風な名前でしたよ。」

「………わかつた、——たしかその人は袋井さんと言ふんだらう？」

「袋井さん！ さうです、ぢやあ、ぢやあ御存じの方なんです。」

「いや、會つたことはないが………そんなことよりもほらさつき、話した女のひとね、あのひとがね、僕の知つてゐる女によく似てゐるさいふわけさ、それで、君——まさかバルコンの上から聲をかけるわけにもゆかないからな、さうかといつて他人の部屋へ堂々と乗込んで訊いてみるといふわけに

もゆかないしね、どうだらう、何かいい工夫がないものかね？」

「いやに御執心ですね、あの方を訪問なさる女のひとはするぶんあるんですが、しかしまあ大抵女優のやうなひとたちばかりですからね。」

ボーイの表情の中をそのときかすかな冷笑が流れた。克彦は昂奮してくる感情を無理におさえつけようとしてゐるが、しかし次第に言葉の調子に現はれる苛立たしさをおほひかくすことはできなかつた。

「——ぢやあ、君、すまないがねあの女のひとが歸つてゆくときにちよつと僕に知らせてくれるわけにはゆかないかね？」

「そんなことをなさるよりも、あの人たちは今に食堂にいらつしやいますからね。そのときゆつくりごらんになつて、それからのことになすつたらどうです。——もしか人間違ひでもなすつてゐるんだと大へんですからね。」

「それもいゝね………だが、食堂は人眼につくからな、僕はほんたうに心から君にたのむんだが、あの人が歸るときにベルか何かで合圖をして貰へないかな——決して君に迷惑のかゝるやうなことはしないんだから。」

彼は、さう言ひながらポケットの中から一枚の紙幣をつかみだしてそつとボーイの手に握らせた。

「いや、こんな御心配はいゝんですよ、ぢやあ、かうしませう、食堂からお歸りになるときに部屋をノックしませう、さうすれば、あなたが食堂の方へ向つて歩いていらつしやると何處かできつと擦れちがひになるわけですからね」

「なるほど、——ぢやあ、間違ひなく頼むよ」

ボーイは、やつとこれで解放されたぞ！とでもいつた風に素早く型どほりのお辭儀をしてくるりこ向を變へると扉の方へ歩いていつた。一人きりになると、もう一度バルコンに出てみたいといふ氣持が彼を追ひ立てた。彼は先づ電燈のスイッチをひねつた。うしろからくる光の中に自分の姿のうかびあがることを避けるために。

それから、おそろしく出ていつた。だが、彼の兩手が左側の欄干に觸れようとするよりも前に、思ひがけない情景が、否、おどろくべき情景が彼の瞳をかすめた。彼は三つ目の部屋のバルコンにつく扉のうすいレースのカーテンのかけに小さいテールをはさんで三つの人間の頭がうごいてゐるのを見たのである。一人の男と二人の女と。そして、美和子は彼の方に脊を向けてゐるが、しかし彼女と向ひ合つて、今紅茶のさじをうごかしてゐる洋装の女は？

克彦は上着の襟をつかんだまゝぢつと立つてゐた。立てゐるうちに彼の心は妙に萎れてきた。——そこに美和子と向ひ合つて腰かけてゐる女が燦珠であることは、今は少しの疑ふ餘地もない。女の眼がちつと彼の方を見てゐるではないか。その顔は晴々と輝いてゐる。一つの窓をへだて、呪ひと憤りと、悲しみにみちた男の瞳が、うす闇をとほして、ぢつと自分をみまもつてゐるといふことも知らずに、彼女は袋井信策らしい男に向つて何か話しかけてゐる。

この不可思議な、——といふよりもあり得べからざる情景が克彦の心に新しい刺戟を與へたことはいふまでもない。何故かといつて、そこには彼が長い間こつそりと胸の底にかくしておいた秘密のすべてが明るい電燈の下にさらけ出されてゐるではないか！

袋井が資本家らしくでつぷりとふとつた腹を撫でながらゆつくりと立ちあがつた。さあ食堂へ行きませう！と言つてゐるやうに見える。燦珠が立ちあがつた。それから美和子が、……。

やがて、三人の姿は部屋につく扉の中へかくれてしまつた。しかし、克彦は同じ位置に同じ恰好をしたまゝ茫然として立つてゐた。上着の襟をしつかりとつかんだ彼の兩手はわな／＼と顫えてゐた。

すぐ前のバルコンに、アメリカ人らしい背の高い、鼻眼鏡をかけた男が、葉巻をくゆらしながら出てきた。